
JOY

中村真央

タテ書き小説ネット Byヒナプロジェクト

<http://pdfnovels.net/>

注意事項

このPDFファイルは「小説家になろう」で掲載中の小説を「タテ書き小説ネット」のシステムが自動的にPDF化させたものです。この小説の著作権は小説の作者にあります。そのため、作者または「小説家になろう」および「タテ書き小説ネット」を運営するヒナプロジェクトに無断でこのPDFファイル及び小説を、引用の範囲を超える形で転載、改変、再配布、販売することを一切禁止致します。小説の紹介や個人用途での印刷および保存はご自由にどうぞ。

【小説タイトル】

ジョウ

【Zコード】

N1013Y

【作者名】

中村真央

【あらすじ】

事故で恋人を亡くして10年孤独に暮らしている浅井。10年目のクリスマス間に慌しく運命が転がり始める。可愛いすぎる強引で横暴な天使に出会つてから。

白い天井

白い天井が不思議だと思った。

自分の部屋じゃない。

天井から下がったベージュのカーテンに囲まれている。ぐるりと見回すと、ベッドの横に母親がいた。

そんなはずはない。大学進学で故郷を離れて半年が過ぎている。これは、夢だ。浅井はそう思った。

「あら！ 起きたの！ 看護婦さん呼ばなきや！」

枕元に垂れているブザーを押すことにも気付かず母はザッとカーテンを開いて廊下に走り去った。

病院なのだと浅井はやつと気付いた。

だけぞりしてこんなところに、と長い髪の毛をかきあげようとして、頭の包帯に気付いた。

包帯？ 頭に？ 何？ これ？

浅井が逡巡している間に若い女性看護士が飛び込んできた。

「あら！ よかつた！ 浅井さん！ あなたは外傷も少ないから意識だけが心配だったの！ 良かつたわ～！」

わからない。わからない。浅井は頭を振った。

「うん、そうね、彼氏は残念だったけどね、あなたは彼に助けられたんだからね、頑張つていかないと…」

待つて。

何この夢？ なんでこんな夢みてるの？

「ああ、だめよ。あなた頭打つたんだからあまり動かさない！」

看護士に両手で頭をつかまれた。

「今先生来るから、今の状態教えてね。頭痛いとかはないのよね？」

つかまれた頭で頷いた。

医師が現れ、名前は何だとか今日は何日だとか「ここのはどい」だとか、バカみたいな質問をされてバカみたいなに答えた。

バカみたいな夢だ。きっとそれが表情に出たのだろう。

「バカな質問だと思ってるんだね。じゃあ大丈夫だ。よかつたよかつた。あれだけの事故で奇跡だよ」

医師は浅井の膝あたりの布団をポンポンと叩いて、看護士と共に出て行つた。母もその後を追つて出て行つた。

あれだけの事故

彼氏は残念だつたけどね

いくら夢でもひじかれる。

どうして私がこんな夢を見るの？

ああ、きっと先輩が買ったばかりの車がスポーツタイプだから心配なんだきっと。

そう思つてゐるくせに、浅井はベッドを降りて椅子の脇に置いてあつた汚れた自分のスニーカーを履いて、病室を出た。

どうせ夢なんだから。そう思つてゐるくせに、鼓動が速まる。

エレベーターで1階に降り、施設全体の案内図を見つけた。そして、それを地下に見つけた。

いないことを確認するんだ。

いたつてどうせ夢なんだ。

混乱する頭で地下に降り、その場所を見つけて小走りになる。

どうせ夢なんだ。

一つずつドアを開ける。

知らない人が顔を向ける。礼をして閉める。それを繰り返す。ほり。バカみたいだ。全部この繰り返しだ。

そう思つてまたそつと開いた扉の向こうへ、

先輩のお母さんがいた。

お父さんがいた。

弟がいた。

先輩のお母さんが立ち上がり、おおおお、と喉の奥から溢れた声を両手で押さえ、また椅子に座り込んだ。

お父さんはおじぎをした。

先輩によく似た弟は、そのまぶたを真っ赤に腫らして、また白衣を被せられた顔をじつと見下ろした。

体は、大丈夫ですか。本当はおちりにすぐにお見舞いに向かわなければと思ったのですが、

この通り、龍がね、申し訳ないけどお見せできる顔じゃないから布は取れないんですけど、もしかしたらここでお別れかと思いますのでね、

お父さんがそんなことを語つている。
どうしてここまで具体的な夢なんだろう。

近寄つてみた。

布は取れないって言つてたけど、取らなくても頭中包帯でぐるぐる巻き。きっと顔も包帯でぐるぐる巻き。

先輩、車の運転気をつけないとこんなことになっちゃうんだから。ああ、警告の夢なんだ、きっと。

耳だけが見えていた。

少しだけ傷がついた耳。

この耳は、先輩の耳だ。

私はよく知つている。

何度も何度もつまんやり囁いたり口をつけたりした。

先輩の耳の形だ。

先輩。

これは、この人は、先輩。

やつと浅井は、確認した。

白いシーツで覆われた大柄な体。

これは確かに、先輩の体。

先輩の体が、靈安室で線香の香りに包まれていた。

その後の記憶がない。
また病室で目が覚めた。
まだ夢だと思っていた。

夢じやないのだと気付くまで、三日かかった。

夢ではないのだと、先輩が死んだのだとわかった時に、浅井は
声を失った。

それも惜しくはなかつた。
先輩を失つたのなら、惜しいものなんか何もなかつた。
自分の命もいらなかつた。
何もいらなかつた。

全ていらなかつた。

5時半の終業間際、鳴り響く電話を誰も取らない。クリスマスも近い今日は金曜日で、みんなこの後の予定もあるのだろうが我慢比べでもしているように、恐らく何のデータも入力せずにキー・ボードを叩いている。

結局客先からのクレームを処理したばかりの浅井が受話器も戻さずにその外線を取った。

「お待たせいたしました。」

の言葉も言い終わらないうちに、大声で捲くし立てられた。

『いつになつたら持つて来るつもりなんだ！とっくに5時回つてんだろうがっ！』

浅井はその大声に受話器を耳から離して、右手で額を押さえた。

「失礼ですがお客様・・・」

『大森だ！大森！千種区！』

千種区・大森様・・・見覚えがある・・・とディスプレイに出荷予定を表示してスクロールする。

あつた。設置予定明日午後5時。ビューティーサロン・フォレス

トイン。

『明日の開店に間に合やあいいと思って5時にしたのによ、今何時だよ？他の業者はもうとっくに引けてんだぞ！』

明日のオープンだ？

「申し訳ありません、ただいま確認いたしますのでもう少々お時間いただけますでしょうか」

『さつさとしろよ！』

『はい！すぐに！』

耳に受話器を挟んだまま浅井は通話を切り、ディスプレイに表示されている納入業社の社長の携帯の番号を呼び出し、繋げた。相手はすぐに出た。

『はい加藤』

「本社の浅井です。お疲れ様です。社長今どこですか？」

『ん？ ヤード戻ってきたと』

「明日のティーサーバー、もうトラックに積んでますよね？」

『ああ？ そうだな。明日はこれともう一件だから積んである』

「今から出でもらいますか？」

『ああ？ …』

「もう一杯やつてます？」

『やつてないけど、今日丸一日設置と撤去で俺ずたぼろだよ？』

「すみません。明日のティーサーバーが今日だつたんですね」

『知るかよ。そつちのミスだつが』

「明日オープンの美容院なんです。あとティーサーバーだけ搬入がないらしくて」

『だからそつちのミスだつて！ 俺はもう一杯やつちやうよ！』

「じゃ、山下君は？ 水野君でも。ティーサーバーの設置なんて一人でも出来るじゃないですか」

『おお！ そういうこと言うならあんたがやれよ』

「じゃあやります。迎えに来てください。送つても行つてください

よ。それが社長の仕事じゃないですか』

『俺の仕事は明日請けたもんだつーの！』

「わかりました。私がタクシーでそちらまで行つて、トラック運転して千種区まで行きます！』

『あんたトラック運転できんのかよ？』

「普通免許はあります。ペーパードライバーだけど」

『そんなのにつづのトラック貸さね～よ！ わかったよ！ 俺が行くよ

！』

「本当にですか！ありがとうございます！今度大型2件決まりそ�な
ので必ず加藤設備に回します！」

『おっ・・・お、おひ。まあ、これから出るとなると7時頃になる
けどいいのか』

「すぐに出でいただければ！何とでも言い訳しますから！ありがと
うございます！お気をつけて！」

『つたく・・・かなわん。急いで行くわ』

「ありがとうございます！先方にもお知らせしますね！」

また受話器を肩に挟んだまま、セッキディスプレイに記録された
千種区の大森の番号をダイヤルする。

「お待たせ致しました。星川商事です。本日納入予定のティーサー
バーですね、前の現場が遅れましてまたこの時間渋滞に巻き込まれ
てまして、そちらに向かってはいるのですが遅くなると連絡があり
ました。』報告が遅れて申し訳ありません！」

『あ、ああ？何、それで結局何時になるの？』

「ええ、大変遅くなつてしまつて申し訳ないのですが6時半までに
はと・・・」

三十分サバ読んだ。

『一分でも遅れたらつつかえますぞ！』

「連絡の遅れた私どものミスですので、なんとかお許しいただけれ
ばと存じます。ドライバーが頑張つてそちらに向かっておりますの
で」

『そんなのは仕事なんだから当たり前だ。まあいいわ。6時半な
「私も完了報告があるまでここで待機してますのでお願いいいたしま
す』

『別にあんたには関係ないだろ？が』

『私のミスですか』

『ふん。別に、受け取るから〇』は早く帰ることだ。今どき危ない
んだからよ』

「ありがとうございます。それではお願ひ致します」

『はいはい。あんたは帰れよ』

「ありがとうございます。失礼いたします」

そしてやつと電話器を置いた。

そして、机につづつした。

今的一件で何日分かの仕事をしたよつたん気分だ。上手くいったんだろうか。ミスはなかつたんだろうか。

浅井は会話を始めからリピートしてみた。

「・・・加藤社長、つて言いました？あの社長の時間から動かしたんですか？」

後ろから男子の声が聞こえる。

「電話一本での怖い社長動かせるのつて浅井さんぐらしきませんよねつ！」

女子の声も聞こえる。

つづつした浅井がゆらりと体を起こし、後ろを向いた。

加藤社長とは別の外注業社の社員の大沢と、浅井の後輩事務員の栗尾が並んで立っていた。

短い茶髪のイケメン大沢と、お姫様のように毛先をカールした栗尾がすっかり帰り支度で並んで立っていた。

その姿になぜか浅井は内心ムラツと怒りが沸いた。ただ反射的にムツとしただけなので理由にも行き当たらず、少し顔を傾げて仕事に戻ろうとした。

「その、加藤社長の搬入終わるまで仕事終わんないんすか？」

大沢が訊ねてきた。少し不思議でまた振り向いた。大沢とはそれほど親しくはないのだ。

「今日の飲み会は、浅井さんも参加するつて聞いてたんすけど、」「え？ 今日だつけ？」

浅井は栗尾に視線を動かした。そういえば事務員全員と外注業社の社員有志が集まる会に参加すると申し出っていた。事務員全員と言つても十数人しかいないので、一人だけ欠席とは言い辛かつただけだつたからいい理由ができたと思つた。

「ああ、ごめん。私ヌキでやつてもらえた？ あんまり早くは終わらないと思つから」

元々乗り気の飲み会ではないし、会費も前払いしてあるから迷惑は掛けられないはずだ。

「なんだあ。残念だなあ」

大沢が社交辞令を言つてくれる。

「しようがないですよねー！ 事務員で一番責任とれるのつて浅井さんですもんね！」

栗尾が髪の毛をふわりと動かし、可愛い角度で大沢を見上げた。

その瞬間、気付いた。

「・・・栗尾さん、あなた明日の設置確認をお客様にとつてなか

つたのね」

さつきのティーサーバー設置の、業務責任者印は、栗尾になつて
いたのだ。

「は？」

まだ栗尾は可愛い角度を変えない。

「お客様は今日搬入だとばかり思つていたそつよ。あなたは確認の
電話を入れる責任があるわよね」

「あ、え～、つと、きつとお話中だつたと・・・」

「加藤社長が出てくれたからなんとかしてもらえたけど、」

「でも、それつてお客様の勘違いが一番悪いんじやないんですか
？契約は絶対明日ですもん！」

「明日オープンの美容院なの。あなたそのオーナーにそんなこと言
えるの？」

「浅井さんなら言えますよ～！」

栗尾がキャラキャラと笑つた。

言わなきやよかつた。さらにもかついただけだつた。浅井はため
息をついて椅子をくるりと正面に戻した。

直後にカツカツと高いヒールの歩く音が響いた。背の低い栗尾は
高いヒールのブーツを履いている。

ピンクの短いファーのコートを羽織つて。

ブランド物のハンドバッグを腕に掛けてイケメン大沢と街を歩く
のだろう。

あ、そうだ。きっとこの子は大沢君に氣があるんだ。ああ、それ
でこんな妙なメンツのコンパなんだわ。ふうん・・・。

浅井が頬杖をついて頷くと後ろから声がした。

「あの。仕事終わつてから合流すればいいんじゃないですかね？」
驚いて振り向くと、まだ大沢がいた。

「あら。気使わなくていいわよ。私ももう疲れちゃって飲みたい気分でもないし」

「でも、」

「いいわよ別に。私のための会でもないし。ほら。待ってるわよ」
含み笑いで一瞬だけ視線を出口にいる栗尾に向かた。
「また今度全社で忘年会があるじゃない。その時にね」
また椅子を戻して、浅井は右手をひらひらと振った。

楽しい飲み会など一度も経験はない。常に退屈なだけだ。それが一度減ることは全然残念などではない。

笑顔を向けても分かってもらえないだらうから浅井はそのままキーボードの操作に戻つた。

「じゃあ・・・失礼します」

大沢のスニーカーがキュッと音を立てた。

ドアを開ける音がした時にちらりと一人を見送ると、街でよく見る似合いのカッフルに見えた。

黒いダウンジャケットの中からパークーのフードと裾を出し、山でも登るようなごつい靴を履いている長身の大沢と、髪の毛クルクルのコートフワフワな小さい栗尾。

ああ、結構なことですね。いよいよ寒くなつてクリスマスですもんね。

寒くなつてクリスマスが来て年末になり仕事納め。

私はそれまでは馬車馬だわ。

結局色気のない方向に思考を飛ばし、ため息をつく浅井だつた。

課長と浅井しかいなくなつた事務所に外線電話の音が響いた。

『おう、加藤だけど今現場終わりました』

電話を取つた浅井が驚いた。

「もつ?...まだ7時前ですよ...」

『おお、意外に道も空いてたし密がさ、設置手伝つてくれたからな』

『うわ、そんなことしてもらつちやつたんですか』

『せりそつだる。本来明日の予定で契約書にも印鑑ついてんの確認わせたからな』

『うわ・・・そんなことまでしちやつたんですか・・・』

『あつたつまえだる。悪いけどよ、こつちだつてわざわざ行つてやつた立場でだよ? いきなり喧嘩越しで命令しやがつてよ』

「はあ・・・」

『いへりお客様でもだな、謝るべきといひは謝るのが筋つてもんやろが! つて怒鳴つてやつたよ。契約書持つてきて納入期日を確認してみろや! つてな。ははつ。青くなつてたよ。笑うなあ』

「笑つたんですかあ・・・」

『せりそつやる。こきなり空氣抜けたみたいに萎んじやつてよ。ま、こき使つてやつたから勘弁してやるわ』

「・・・加藤社長、やつぱりそんな立場じやない氣がしますけど・・・」

・

『そんなん知らんよ。後はあんたの仕事やひ。じや、そつこつ! とで。お疲れさん』

嘘^{～～～～}。お客様をこき使つたんですかあ^{～～～}・・・。

浅井は顔を右手で覆つた。

確かに、契約は明日搬入になつてゐる。勘違ひしたのはお客様だ。お客様なのだ。こきいう対応が一番難しい・・・。

お客様は神様だ。勘違いしたとしても神様だ。謝らせるのが筋ではないのが商売なのだ。

悩んでもしようがない。ひとつと自分の仕事を終えよう。

浅井は、千種区の大森にダイヤルした。

「お世話になつております。星川商事の浅井と申しますが、」

そこまで言う前に、大森が電話を落としたかお手玉したかで雑音が入つた。

『あつ、あ、星川さんね、あの～、契約ね、明日だつたみたいで申し訳なかつたね、』

「いえ、今日は準備はしてありましたのでそうおっしゃつていただなかくとも大丈夫だつたんですよ。こちらも確認を怠つてしまつて失礼いたしました。こちらのミスでしたので無事設置できて安心いたしました。また何かご縁があればその時はよろしくお願ひいたします」

『あ、ま、そう言つてもらえると助かるわ。ほんと、悪かったです。次何かあつたらほんと、声掛けますんで』

『ありがとうございます。設置のお手伝いもしていただいたようで恐縮です。ありがとうございました』

『いやいや、当たり前だし』

『明日のオープン頑張つてくださいね。おめでとうございます』

『ああ、ありがとうございます。千種区ですから、もしよかつたらいつも』顔に

『あら。ビューティーサロン・フォレストインですね。機会がありましたら』

『ほんとにね。お待ちします』

『はい。今日は遅くまでご苦労様でした』

『ああ、あなたもお気をつけてお帰りください』

『ありがとうございます。失礼します』

また浅井は、だつと机に突つ伏した。疲れた。

逆ギレするタイプのお客様じゃなくてよかったです。ほっとした。といふか、同じく商売人なのだ。最後は宣伝までして。
くすっと笑って起き上がった。千種区のビューティーサロン・フォレステイン。行かないだろ？
ふうとためいきをつき、課長に仕事を終えた報告をし、更衣室で着替えて会社を出た。

寒い。襟元を合わせる。もう一、二月なのだ。

12月に入れば街中はクリスマス一色で、イルミネーションが華やかだ。

長い黒髪を一つに縛り、黒いロングコート、黒いローヒールで歩く自分が異質な気がする。

そう思いつき、浅井はくすりと笑った。

ビューティーサロン・フォレストイン。ステキな屋号の美容院ね。私は近所のおばさんが一人でやっている屋号も覚えていない美容院に半年に一度くらい、長さを揃えてもらひ程度しか髪はいじらない。

先輩が好きだつて言つた長い髪だからね。

だからクリスマスも関係がない。楽しいイベントじゃなくなつてもう10年も経つ。

特に、一生誰も愛さない！とか、独身を通す！とか、強い決意があつたわけではないのだが、そういう予感はあつた。あれ以上誰かを好きにはなれないだろつと思つ。それでいい。

この先ずつと一人でも困ることはない。貯金もしているし保険にも入つている。それ以上はこのじ時世、考へても意味がない。そう考へて浅井は顔を上げて改めて周囲を見回した。

それでも年々街は華やかになつていく気がする。ショーウィンドウの中もものすごいことになつていて。

赤いミニのサンタ服を着たマネキンの周りを、本物の子犬が小さなソリを振り回して走り回つている。

嘘・・・と驚いて浅井はウイングドウに近づいた。同時に

「あつ！」

と、甲高い声が聞こえた。

直後に誰かが肩に強くぶつかってきて転びそうになつたが、なんとか堪えた。

が、足元でパリンと音が聞こえた。

また、あ、と甲高い声が聞こえた。そしてその声が続けた。

「・・・「めんなさい・・・メガネ・・・踏んずけちゃつた・・・」

「

少しの間、浅井は呆然とした。
裸眼の視力はほとんどないのだ。

「ごめんなさい、どうしよう・・・」

浅井の足元でメガネの残骸を拾つているらしい声が聞こえる。

「あの、スペアって持つてますか？」

「持つてきてない・・・家にはあるけど・・・」

「近くのメガネ屋さんじや・・・」

「だめなの。レンズが特殊だから、」

「ですよね・・・すごく厚いですよね・・・あ、あの、それじゃ、「
声が浅井の顔の高さまで登つてきた。浅井は女子としては長身なので、この子も割りと大きいのね、と思つた。しかしそんなことが、
声を聞かなければわからないという状況が、怖い。

見えないなんて。こんな雑踏の中でメガネを失うなんて考えたことがなかつた。

一步も歩けない。

段々本格的に恐ろしくなつてくる。

これじゃ、家にまでも帰れない・・・。

「コンタクトじゃダメですか？一時的にならそんなにしつかり合わなくても大丈夫って聞きました」

「私コンタクトしたことない・・・」

「みんな最初は初めてです！弁償しますから、使い捨てのコンタクトなら安心でしょ？」

少女は急に元気な高い声で言い、その声に腕を引かれてコンタクト屋さんに連れて行かれた。

思えば、これが全ての始まりだった。

はつきり見えない中を暖かい手に握られて人の間を縫つて、明るく小さな店舗に飛び込んだ。

「いらっしゃいませ」

その若い男の声を聞いて、浅井は初めてほんの少し恐れを抱いた。これまでがあまりに速い展開で言われるがままについて来てしまつたが、まさか新手の詐欺？コンタクト詐欺？

「ああ、初めてですか。それでは医師の診断を受けていただかないとなりませんので、一階の眼科で行つてきて処方箋をもらつてきてもらえますか？保険証はお持ちですか？」

保険証・・・保険証詐欺・・・？！

「階段が危ないですよね。ゆつくり登りますから大丈夫ですよ！」
彼女は2階の眼科まで連れて行つてくれるようだ。だけど、だけど、と思つてゐるうちに一階の眼科の扉を開けている。

「どうぞこちらに。視力測定しますね。眼底測定もしますのでね
んん・・・、本当の眼科っぽい・・・。

「近視がかなりすすんでますし乱視もありますね。コンタクトです
と、ハードとソフトと、」

「あ、あの、」

少女が口を挟んだ。

「うつかりメガネを踏んでしまつて、一時的に見えればいいんですね。
それだと使い捨ての乱視がないのでも見えるつて聞いたんですけど、
何度も使えますけど」

「ああ、1日とか2週間とかのコンタクトのことですか？確かにそ
れで不自由はしないかと思いますが、乱視に対応したものだとまた

「いえ、今日これから家に帰るまで見えればそれでいいんです！」

「んん？」Jの子、なんでそんなこと強調してるんだ？

「ええまあそれでもお密さん構わなければそれで対応できるかと思いますけどね」

そういうて、医者は伝票のよつたものに何かを書いていた。初診代と診察代で3千円。そして下の階で購入の際に使用できるクーポン千円分もらつた。

こんな商売している医者で大丈夫だらうかと思つて、うちにまた階段を下りて一階店舗に入つて、処方箋で簡単に3種類のコンタクトの箱を用意された。

色々説明されたが最後には面倒臭くなつて、一日使い捨ての一一番安いものから試して、それがそう悪くなつたのでそれに即決した。うわ！となぜか少女が声を出して喜んだ。

それで、少女が浅井の斜め後ろにいて、鏡に映つてゐることに気付いた。初めて彼女をはつきり見た。

茶色のショートヘアを柔らかく浮かせて白い肌の頬をピンクに染め、長い睫毛に縁取られた大きな瞳を開いて、キャメルのダッフルコートを着た少女が微笑んでいた。

ありえないほどの美少女だった。まるでCGだ。

浅井は初めて対面した今まで手を引いてくれていた少女のその美しい笑顔に見惚れて、呼吸を忘れた。

そしてふと、田を正面に戻した。

真つ黒い長い髪を束ねただけの、真つ黒いコートを着たキツそうな一重の瞳のやせたおばさん。

それが私だ。

「商品は「ひらのクーポン」利用といつ」と、この金額になります」

店員が商品と電卓を持ってきたので、浅井がバッグから財布を出そうとすると、少女が慌てて口出ししてきた。

「あー支払いはこっちでしますー! だってメガネ割った責任があるしー!」

あ。それで安いコンタクト選んだことを喜んでたのね。

浅井はその心遣いと無邪気さが嬉しくて、少し心が温かくなつた。
「いいわよ。あのメガネ、もう古かつたしね。あなたのおかげでコンタクトも初体験できたし」

浅井はそう言いながらクレジットカードを差し出した。

「あー! だつて、それくらいだつたら払えるのにー! それじゃビリやつてお詫びしたらいいか、・・・」

いいの。あの笑顔と困った顔とその高い声で、私本当に嬉しい時間がすごせた。こんなに可愛い子つてそうはない。それなら、
「もう大丈夫よ。見えるから。後は一人で帰れるからあなたももう気にしなくていいわ。

今日は金曜日だし早く行かないと彼氏が帰つちやうんじやないの?
もしこの子に彼氏がいるのだとしたら、きっと来るまで何時間だつて待つだらうけど。

浅井は支払い伝票にサインを記入していたので気づかなかつた。店員は見ていた。そして、固まつていた。
ボールペンを返そうとしてるのに店員が固まつてるので、やつと浅井も振り向いた。

そして、驚いた。

少女の表情が一変していた。

頬を染めて上目遣いに大きく見開いていた瞳が、今はわずかに見下ろす角度に顎を上げている。

少し開けていた口も、への字に結んでいる。

「・・・・え？・・・・」

浅井が問うと同時に返事が来た。

「僕、彼氏なんていないよ」

呼吸も瞬きも忘れた。店員は口を閉めるのも忘れていた。
やつと息を吸つて、浅井が言った。

「・・・つまり、・・・」

「つまり僕は男です。別に構わないけどね。間違えられるのは慣れてるから」

少女、ではなく少年が、浅井の声に彼せるよつと叫んだ。

まだ信じられずに、浅井はその姿を凝視する。

伏せた睫毛は恐ろしく長いのに、そしてその声はとても高いのに、間違えられる

「スカートはいてるわけでも、化粧してるわけでもないのに、間違えられる」
赤い唇で笑みを作り、彼は続けた。ただその目は笑っていない。
そうか、笑い事じゃない。私は彼を傷つけたのだ。悪気なんか
んにもなくとも、彼は傷ついたのだ。

「「、「めんなさいね、私ほら、メガネ割つたから見えなかつたし、
ね、」

「あはは。そつか。それ結局僕のせいか！」

彼の本当の笑顔になつた。まるで花が咲いたよつと店内が明るくなる。

だからといって彼を傷つけたことに変わりはない。彼が傷ついて
いることに変わりはない。

「「、「めんなさい、私本当にそそつかしくて、
申し訳なくて浅井は謝り続けていた。

それを聞きながら、笑顔の少年は目をくるりと回して、浅井に提

案した。

「じゃ、お詫びに」の後僕においらせて

何？」と浅井が目を上げた。

「だって」コンタクトだって弁償できなかつたし、僕の立場がないよ
これじや

少年は笑顔を一瞬で崩して唇を尖らせた。そしてその顔もこの上
なく可愛らしい。

思わず浅井も微笑んでしまつた。そしてそれが了承の合図になつ
たらしい。

少年はキャメルのダブルコートのポケットに両手を突つ込み、
また花が咲くような笑顔を見せた。

「じゃ、どこに行こうか！ 晩ご飯はもう食べたの？」

少年がさつそく扉を開いて外に出ようとすると、白衣の店員が
慌てて浅井にレンズの箱を入れた袋を渡した。

「本日初めての装着ですので、なるべく長時間はなさらないよう
してください」

あ、はい」と答えるとする浅井と同時に少年が言つた。

「お酒は大丈夫？ お酒がいいね！ どこにこいつか！」

えつ？！と浅井が少年に顔を向けると、続けて少年が言つた。

「言つておくけど、僕もう成人だからね。とつぐに二十歳なんだ。
二十歳のベテランなんだからね」

そうは見えない、という言葉を押さえつける強調。

「四月に二十歳になつたのに誰もお酒に誘つてくれないんだ。ね。
お酒の店、どこか知つてる？」

ぐるりと回つて笑顔で訊ねてきた。やはり浅井も笑顔になつてしまつ。

二十歳に見えないことを本人も知つてゐるのだ。

だからと言つて、ねえ。お酒を飲む権利はもう持つてるんだもんね。

しかしお酒の店つてまた大雑把なリクエストだわ。

そう考えて笑っていた浅井の顔が固まつたのはその直後だ。

正面から、課長が浅井に向かつて歩いてきていた。

もう灯りの消えた店舗のショウウインンドウに向かい、浅井はバサリと縛っていた髪をほどいた。

課長の姿を認めてから髪をほどくまで浅井の中ではグルグルと思考が高速回転した。

つまり、今ここでこんなに若くて可愛い男子と歩いているのはそれなりに事情があつてですね、と課長をつかまえて一から説明するか？それが弟と言おうか？いや、課長が私に弟がいないと知つている可能性はひどろか高いし、あ、じゃ、従弟！イトコつてことに！てかこんなに似てないのに信用される？というかそれを課長つかまえてわざわざ伝えるのか？

と考えた挙句に他人になりすまし気付かれないよつにやり過ごすという原始的な手段に出ただけだつた。

そして幸運にも課長に気付かれずに済んだのだが、それを見ていた少年がにつこりと微笑んだ。

「それ、かつこいいね。もうオフに切り替えるつて気合入れだね！じゃあどこか知つてるお店あるんだよね？」

天使のような少年はポケットに手を突っ込んで待ちきれない風に足踏みをしている。

「早くいこー！」

「そうね」

浅井も、課長が去つた方向に背を向けて急いで歩き出した。当然のように少年も肩を並べて歩き出す。

「僕の名前は君島秋彦。二十歳、学生。あなたの名前は？」

「ああ、本当に男の子なのね、と浅井が一度少年の顔を見ると田が合つた。」

「私は、」

浅井が視線を外した。

「浅井鈴乃」

そして、ふうとため息をつく。

「一体私たちはどういう連れに見えるんだろう。親子ほど離れてはいないけど姉弟ほど近くもないし、第一こんなに見た目の共通点もないのに・・・。」

「浅井さんか」。浅井さん、お酒は強い?」

自分が見た目の心配ばかりしている間、少年は酒のことばかり考えていたようだと気付き、浅井はくすりと笑った。いや、少年じゃない。青年か。

「強いわよ」

「ああ、頼もしいね! 楽しみだなあ!」

ねえ、早く行こう! と青年・君島はスキップを始めた。

恋人も友達もいらない浅井の知っている店となると、会社の同僚に紹介された店しかない。

その中でもしゃれた小さめのバーを選んだ。

照明が天井に埋め込まれた小さな電球の数々と、ガラスケースの中に積み重ねられた様々な形のグラスを下から照らすキラキラとした間接照明と、客が座っているテーブルの上に置いたキャンドルのみの薄暗い店内。

案内された席に着き、君島は溢れる笑顔を隠さず全身で喜んでいる。

「ね! 入り口で年譜がれなかつたの初めてだ!」

「なんだ。そんなことが嬉しいのね。浅井も笑つて俯いた。

「何にする? とりあえずビールつてやつ? それでいい?」

浅井が頷くと君島が大声で、とりあえず生ビール二つ、と嬉し

そうにオーダーした。どうやらこれもやつてみたかったことらしい。じきに運ばれてきたビールグラスで乾杯し、テーブルに置かれたキャンドルで照らし、メニューを一人で覗き込んだ。

メニューにはカクテルの説明も添えてあったので、それだけではらく盛り上がった。

盛り上がったというよりは、君島が浅井を質問責めにしたというが正しい。

曰く、どれにする？ これはどんな味？ 強い？ これはどういう意味？ なんでこんな名前？ 美味しい？ 塩がついてるの？ 何で？ どうやって？

浅井は一つ一つ答えた。

答えながら、不思議な気がしていた。なぜ私はイラライラしていいのだろう？

理由はわかつていた。彼の可愛らしい顔と無邪気な性格のせいだ。この明るい笑顔だけで自分の気持ちまで晴れてくる。

そして気付いた。誰かと楽しくお酒を飲むなんて初めてだ。

先輩とはお酒を飲めなかつた。そんな年齢まで一緒にいられなかつた。

初めてお酒の楽しさを教えてもらひつのが、二十歳になつたばかりの青年にだなんて。

浅井は笑つた。少し酔つてきたようだと頬杖をついた。

そしてまた君島を笑顔で眺めて、はつとした。

「君島君、だいぶ酔つた……？」

「ぜえ～んぜん、酔つてない～！」
君島は真つ赤な顔でへラへラしていた。

しまつた……この子、ほとんどお酒の経験がないんだつたわ。

・・。ちゅつじゅじゅいかで醒まなれや・・・。

「もう出来しよ。次にい」

「なんであー！僕や、いの、アレキサンダーの妹とかいうのがさ

、」

こんな風にぐずられても浅井は笑つてしまひ。

「また今度にすればいいぢやない。今日全部飲んじやう」

「今度？本当に？」

君島がうつろな顔を向けてくる。それに浅井は笑つた。

その浅井の耳に、大声が響いてきた。

「あそ」へーあそ」の席がいいー窓際のおーつーあそ」へーしょー

大沢くーん！」

浅井の笑顔が凍つた。

栗尾の声だつた。

嘘……。なんでこんなに早く一人が抜けてくるの……？って、あ、もう一時？いつの間に……。

二人は浅井たちと同じく窓際の、空きテーブルを一つ挟んだテーブルに座った。栗尾が背を向けた椅子に、大沢が栗尾、君島を挟んで浅井と向き合う席に着いた。

気付かれる前に出ようと浅井は焦つたが、君島はまだポワ～っとしている。

「ね、君島君、」

浅井の声に被せるように、酔つた栗尾の大声が響いた。

「もうホントに嫌あ。あのイヤミなお局様あ

「いつも私ばつかりなのよお。私が一番若いからだつて分かつてるけどお

・・・私のことか？

「さつきのだつて、ど～考えたつてお客が悪いに決まつてんのにい

・・・私だ・・・

「自分で余計なことしてさあ～、仕事ができるうみたいなフリすん

のぉー！」

・・・ん～・・・

「浅井さんは実際仕事できるよ。それはみんな認めてんじゃね～の？」

「ああ、余計なフォローしないで。大沢君・・・

「あ～！！！大沢君、庇うんだあ～！あのオバサン！」

オバサン・・・

「趣味わる～つ～～～あのヒト絶対力レシいな～歴年齡と一緒にだよ

！キモつ！」

キモ・・・・

浅井は俯いて頬杖をつき、ため息をついた。
その浅井を君島が半眼でじっと見ている。

「髪型一回も変えたことないって、ありえなくない？ずっとあの真
っ黒のロングだよ？」

「先輩が好きだつて言つたの。絶対変えないわ」

浅井が小さく反論した

「メガネだつてさあ！あれ一つしかないのよ～貧乏なの？ケチ？て
か面倒なのよ！もう女じやない！」

「同じのを三つ持つてるわ。先輩が選んだフレームなのよ。他は選
ばないわ」

浅井も酔っているのだ。こんなことを口にするのも初めてだ。

「でも可哀想よね。女に見られないままオバサンになつてしまつた
なんて、ホント、可哀想！」

きやはははは、と栗尾が大声で笑つた。

浅井は、俯いたまま微笑んだ。

「お前さ、いいすきだつての。そんなん」と思つてんのお前一人だよ

いいわよ大沢君。あなたがフォローするたびにもうとひどくなるの。そういうものよ。

もういい。私も、何バカな」と言つてゐるんだか・・・。

「君島君、もう、」

浅井は無理に笑みを作つて、顔をあげて君島にまた言つた。それを待つてたかのよつに、君島が尋ねた。

「浅井さん、フェアレディって、知つてゐる?」

思いがけない突然の質問だったので、浅井は反射的に頷いた。
君島は真つ赤なままの笑顔で浅井を見つめ、続けた。

「ラジオで聞いた話なんだけどね、D-1がど田舎のど田舎の同会
に行つたんだって」

そう言って、彼はテーブルに目を落とした。
「自慢のZで行つたんだよ。赤いZ」

グラスから落ちた水滴を指で、テーブルに「Z」となぞった。
浅井はその君島の長い睫毛に目を奪われた。

「それでね、会場の公民館に時間より早く着いちゃってね、
私は、こんなに可愛くなかったな。浅井は、ふと笑った。

「Zをさ、適当な場所に停めて会場の下見してたの
可愛いなんて先輩が言つてくれただけだつたな。

それで充分だつた。

他に何もいらなかつた。

ずいぶん私は幸福だつた。

ふと、君島の声が止まつていてることに気付き顔を上げると、それ
を待つっていたかのように君島が笑みを見せた。

「でね、そのZが停めてあつた場所が超ジャマな場所でね、運転手
を館内放送で呼び出すことにしたの」

君島がまっすぐ浅井を見詰めたまま語るので、浅井も目をそらせ
ずに頷いて聞いた。

「だけじゃの公民館にいたのがおじいちゃんばかりで、車見にいつたのもおじいちゃんで、放送したのもおじいちゃん」
浅井がまた頷いた。

「えへ、お呼び出しあります、玄関前に停めてある、赤いへ、ふえあれでーこという車でお越しの方」

滴で書かれた「ニ」の最後を人差し指でピンとはねあげた。

浅井が、ふふつ！と吹き出した。

「うつ、嘘！ そんなのつ・・・！」

そう言つてから、あはははと大声で笑つてしまつた。

「あー嘘じやないよ！」

真剣に反論する君島も可笑しくてさらに笑つた。

「ホントだよ！ だつて、外見てみてよー！」

「なによ外つて」

笑いながら、浅井は外の様子を見よつと顔を窓に近づけた。

「真つ暗で見えないわよ」

「見えてるよ」

「何が？」

「窓に映つてる。きれいな女人」

「そんな、」

そして浅井にも見えた、窓に映る頬を染めて笑う長髪の女性。

「きれいでしょ。髪縛ってたときもね、きれいだと思つたんだよ」
その言葉にすぐには反應できなかつた。自分のこんな笑顔を見る
のは初めてだつたから。

「髪を下ろすとまるでウーハーのようだよね。それもよく似合つよ」

困る……。いつもこの慣れてない……。浅井は髪をかきあげ
て、困つていた。

「あなたは、きれいだよ」

浅井は、笑つことにした。

「そんなこと言つたつて何にも、」
そう言つて君島の方を向いた。
直後に君島が叫んだ。

「だめー！」

だめ、と叫んだ君島がぼやけていた。

なにか白いものが眼前に迫ってくる。

「『めん！僕、あなたが、』

君島の温かい手が頬に触れたようだ。
まさか

「あなたがこんなに傷ついてると思わなかつた・・・！」

まさか私、

泣いてる？

浅井は驚いて自分の頬に触れてみようとして、君島にその手を握られた。

「触らないで、コンタクトは僕が取るから

「どうか、涙でコンタクトが取れたのか。

「どうか、泣いてるのか。

「どう認めたら、次々と涙が湧いてきた。

「なんだろうこの涙は。

「ああ、『めんね、このコンタクトもう使えないんだよね、

君島がおろおろしながらそんなまぬけなことを言つ。

可笑しくて、笑つた。それでも涙は止まらない。

「なんだろうこの涙。

「僕、ハンカチもティッシュも持つてないよ。このペーパーナプキンでいい?」

君島がそれを浅井の頬に当て、涙を吸い取つた。
またわざわざに触れた指が温かい。

「その、温かい手が、嬉しい。
温かい視線が嬉しい。

涙の理由なんてわかつていた。

私は寂しかったのだ。こんなにも。

「「めんね～、浅井さん、今度また飲みに行く話、ナシにしないでね！」

浅井はまた声を上げて笑つてしまつた。泣きながら。

こんな涙は初めてだ。

浅井は目を押さえて、涙を收めようとした。

笑つて「まかす方法はないだろうかと考えながらも、涙は止まらない。

今は嬉しいのに、笑つてゐるのに、どうして止まらないんだ？

そしてその涙も、ずいぶん気持ちがいいのだ。

君島を困らせて「」とも、気持ちがいいのだ。

こんな涙は初めて。

ありがとう。君島君。

浅井は笑いながら、泣きながら、そんなことを考えていた。

その時、聞き覚えのある声が浅井を呼んだ。

「あの、・・・浅井さん、ですよね？どうしたんですか？」

大沢が一人のテーブルの横に立っていた。

浅井の甘い涙は一瞬で引いた。

「なんで泣いてるんですか？」

大沢が心配そうに訊いてきた。

え~~~~~どひしよひ・・・・! 答えられぬばずがない・・・・

7

あの もしかしておきの栗屋の言ひたのですか……？

「すいません、俺、上

「勝手によそのティー・ブルに来るなよ」
酔っ払った君島の声がした。それを無視して大沢が続けた。
「栗尾、悪酔いしてるんで、気にしないでいいっていうか、」
「こっちのことに口を挟むなって言つてんだよ！」

君島が怒鳴った。

「だいたい何だよー。あんなこと言わせつぱなしにしておいてー。てか全然浅井さんに当てはまらないしー。」

浅井は驚いて顔を上げた。そして大沢は君島を見下ろして、諫め

た

「君、女の子でしょ。ちゅうと言葉が乱暴じゃないの？」

「なんだと！」と君島が椅子を倒して大沢に向かおうとした。
「言つちやつたあ・・・と浅井がため息をついて立ち上がり、教えた。

「失礼よ、大沢君。男の子なんだから」

大沢が沈黙しているうちに、君島も立つていることだしこのタイミングでましょ、と浅井がバッグを持ち上げた。

一 帰ろ、君島君

浅井には周囲がよく見えないので、君島が浅井の手を掴み先導しようとした。

「あつ・・浅井さん！」

大沢が浅井の空いている方の手を掴んだ。

「おー・・・男ってなんすか！誰ですか」いつ！
「こいつって言つたなーさつき知り合つて気が合つたから楽しく飲んでただけだ！」

間髪入れずに君島が答える。

「ナンパだよっ！！」

「なんですか！今日だつて断つておいて、」

「あ、君、断られたんだ？じゃ振られたんだろ！気付けよ！」

「じゃあ一人で誘わなー、お前が悪いんだよ！」

君島が浅井の腕を握る大沢の手を払った。

「行こう！ 浅井さん！」

君島が浅井の腕を掴み、早足で立ち去りうとした。

浅井は一度大沢を振り向き、やっぱり見えない、と笑った。

大沢は一人立ち尽くしていた。

自分の腕を払った君島の力が思ったより強かつたことと、浅井が

最後に向けた笑顔で動けなくなつた。

そんな顔するんですか、浅井さん・・・。

「君島君、本当は酔つてるでしょ」

「酔つてないよおー。やつものせた、あいつがシッレイだつたでしょ？」

「うん、まあ確かに・・・」

「ね！それにさ、僕さつき浅井さんの真似したんだよ。気付いた？」

「え？ 何？」

「浅井さんでわ、説明の真ん中抜かすの。最初と最後だけ言つたの。

知つてた？」

「そんなことない。普通よ」

「ふふふ。ホントだよ。だから相手がついてこれないの」

その後離れた場所から、浅井さん！と大沢の大声が聞こえた。

「ほらね！ 今気付いたんだよ僕が言つた」との意味に！

「え？ 何を言つたの？」

「あいつに聞けばいい」

「浅井さん！」

大沢が追いついて、浅井をまっすぐ見て呼んだ。しかし浅井がふと気付いた。

「大沢君、あなた栗尾さんに責任あるわよね？」

「責任？！」

あははは、と君島が笑つた。

「それだよ、浅井さん。間の説明を飛ばして。ふふ。僕会計してくるね」

君島が離れた。

「栗尾は、その、悪酔いしてるんでこれから自宅まで送つていきますけど、浅井さん、明日、ヒマですか？」

「…………え？」

「そんな、今日あつたばかりのヤツと飲めるなら、俺とでも飲めるでしょ？」

「は？」

「いつも、断るから、きっと俺が誘つても断るんだと思つてた」「え？」

「明日、デートしよ？」「う」

「…………ええ？」

「いいよね？」

浅井は急に不安になつた。何しろはつきりとは見えてないのだ。つい振り向いてキャメル色を探した。

すると後ろからキャメルが近づきながら、浅井を通り越して大沢に言つていた。

「今さら？ていうか、失礼の上乗せだよね。浅井さんがメガネ外して髪下ろさなきゃキレイだつて気付かなかつたんだろ？」

「知つてたよ。お前よりずっと前から知つてたよ」

「ウソつけ。じゃあ、いつからだよ？」

「俺が入社した時から。だから3年前から」

「なにそれ？3年も片思つて？バカ？今どき小学生でもやらないよそんなの」

大沢が黙つた。

「言えなかつた。浅井さん、頭いいし、俺高校中退だし、誰が見たつて釣り合わないつて」

「なんだそれ？」

被せるように反論したのは、浅井だった。

「知らないわよ高校中退だなんて。何よ釣り合いつて。そんなことで」

さつきまで自分が君島に釣り合わないことに不安だつたせいで余計腹が立つていて。

「だいたい何？頭いいつて。私は普通に仕事してそれで生計立てるだけのことよ」

そして酔つていいで、思考がズれていく。

「だけどそれじゃダメなんじょ～さつき言つてたのはそつこいつ」となんじょ？」

「いや、俺は何にも、」

「ファッショソやアクセサリーにお金かけないのはまともじやないつて言つなら、まともじやなくてもいいわよ」

「あの」

「私は一人で困らないようにずっと頑張つてやつてきたこれからもやつていくの。だから全然困らないの」

ふふ、と隣で君島が笑つた。

「これまでだつてずっと一人でやつてきたんだし、これからだつてずっと一人で、」

君島の指がまた頬をなでたので言葉が途切れた。

その動作で、浅井はまた自分が泣いていることに気が付いた。

嘘。

今度は何の涙だつていつの。

浅井は自分で自分がわからなくなつてしまつた。

「だけどこいつは、浅井さんを見てたんだってわ」

君島が浅井の右手を取った。

「で、今も見てるだけかよ」

そしてその手を、大沢に渡した。

「今まで苦しかったのも全部こいつのせいだから、目一杯嫌がらせしてやつたらいいよ」

輪郭のぼやけたキャメルが浅井から離れていくのが分かった。

「え？ 君島くん、どこ行くの？」

浅井は慌てて言う。

「僕はさ、キューピッドだったね」

コンタクトショップで見た君島の姿が思い浮かんだ。
キャメルのダッフルコートをふわりとゅらして笑う、まるで冬の天使のようだ。

「そいつに送つてもらつて。3年も待たせたんだからタクシー代くらいだしてくれるよ」

君島の足音がする。

「だつて、また飲みに行こうつて、」

その天使が消えてしまつ氣がして、追いかけようとした。

「うん。また行こう」

大沢に腕をつかまれていて進めない。

「また会えるよ。きっとね」

輪郭のぼやけたキャメルの天使はそう言つて、ドアを開けて消えた。

一度止まつていたのに、浅井の涙がまた溢れた。

会つたばかりの天使のような可愛い男の子。

その姿だけでその視線だけで、そしてその言葉で自分がどんなに

救われたか、

わずか数時間がどんなに貴重だったか、浅井は自分の胸の痛みで知った。

今までこんな気持ちで泣いたことはなかつた。

今度は大沢が浅井の頬の涙を拭う。

「あの子にもう、会えないのかなあ・・・」

泣きながら浅井が呟く。

「俺がいてもダメですか？」

大沢が言った。

泣き顔で大沢を見上げる。

すると大沢は、浅井の頭を撫でた。

「すいません・・・浅井さん、可愛いですね。泣いてるから、子供みたいだ」

それが優しい笑い声で、頭に置かれているのが大きな手で、浅井も自分が子供のように思えた。

「会えると思いますよ。俺は会いたくないけど」

泣いてるのに笑えてきて、浅井は下を向いた。そうね。きっとまた会える。

大沢くんのことはよく知らない。これからいろいろ訊いてみよう。多分この大きな手は私を傷つけない。キヤメルの天使が認めたのならそうだろ。う。

私にはそれが重要だ。あの子がキューピッドなら、とりあえず従うわ。

違つてたら、・・・そうだ。どんな手使つても探し出して、文句の一つも言ってやる。

「20歳・学生・君島秋彦」

多分これで探せる。きっと。そう考えて、浅井は安心した。

そして気付いた。

「私・・・コンタクト取れちゃって、今何も見えないのよ。・・・
どうやって帰るう・・・?」

大沢と浅井が酔いつぶれた栗尾の腕を両側から支えてタクシーに乗り込み、自宅まで送り届けてから浅井のアパートに向かった。思いがけず訪れた幸運に大沢はすっかり浮かれていたのだが、「あれ？ 大沢君ってこの前まで南営業所の三島さんとつきあつてたわよね？」

という浅井の突つ込みにうろたえた。

入社当初から浅井に憧れていたのは本当だった。

しかし当時20歳だった大沢にとつて5年の年齢差はただでさえ大きく、そして浅井とはそれ以上の差を感じていた。

壁がある、というか、バリヤーを張っている。浅井にはそういうイメージがあった。

なんとか、どこかからそのバリヤーを破つて、または破れ目から忍び込んで、という気持ちで今日も会社で声を掛けてみた。それも結局空振りだったのだが。

その気持ちと、休日や空いてる時間を特定の女性と一緒に過ごすことは、大沢にとつては別だった。

「あ、あの、三島とは付き合ってないっていうか、俺断つたんですけど、向こうはそう取らなかつたっていうか、いや、やっぱり付き合つていなかつたです。今はあいつちゃんと男いますし、俺は、」そこで大沢は絶句した。続ける言葉が見つからない。

大沢にとつてこれまで恋愛とはここまで緊張を伴うものではなかつた。

自分から告白したことは一度もない。しかし相手に不自由したことも一度もない。

つまり自分から行動したのは今回が初めてで、さつきの小僧の言う通りに小学生のように緊張している。

「そういう意味では、俺は今までちゃんと付き合つたことなんかないんです」

俯いて額を搔きながら、小さな声で言った。

え?と浅井が訊き返したが、大沢は答えず、代わりに質問を返した。

「浅井さんは前に付き合つた人はいるんですか?」

浅井はすっと視線を外して目を伏せ、すぐにまた大沢の目に視線を戻し、瞬きもせずに答えた。

「内緒」

大沢の目を射るように見つめたあとに、また浅井は目を伏せた。

内緒。

いない、とクールに即答すると思っていたので、大沢はその反応に戸惑つた。

イエスかノーで答えられる質問に対する答えが、内緒。

そんな曖昧な答えを言つた浅井の目には、なにか強い意志が見える。

助手席のシートを見ているよつて見ていない瞳の奥に見えるのは何だろ?う。

多分、決意。

決意・・・?

一步踏み込んだバリヤーの内部に、まだ何重もバリヤーが囲っている。

結局大沢のイメージをそんなふうに上書きして、浅井がタクシーを降りて行った。

タクシーを降りて大沢に手を振り、浅井は階段を上がりつてドアの鍵を開けて灯りをつけた。

メガネもコンタクトもないのぼんやりとしているが、今朝出てきたままのシンプルな2DK。

長年住んでいるので、何歩でドレッサー代わりの棚に辿り着くか知っている。

そこから引き出しを開けて、予備のメガネを取り出した。

これも先輩が選んだあのフレームと同じもの。

先輩を失ったのは10年前。

実家と縁を切り、大学もやめて、先輩と過ごした街で仕事をみつけて、ただ生きてきた。

それで精一杯だったし、死ぬまでそれが精一杯だろうと思つていた。

それなのに天使に出会い、自分を見ていた目を教えられ、そしてそれに心を動かされた。

それを嬉しいと思うことを、先輩に対する裏切りだとは浅井は思わなかつた。

毎日健康に生きていることが既に裏切りだと、10年間思い続け

てきているか、

翌朝早く、大沢が浅井の部屋の前に立つた。チャイムを鳴らし、ドアが開けられ、

現れた浅井を見て大沢は用意していた挨拶を飲み込んだ。浅井は昨夜のようにメガネを外して、長い黒髪をほどいて流している。

黒のショートコートが白い肌を強調し、細身の長身はモデルのようだ。

見惚れてほんやりしている大沢に、浅井が首を傾げながら行き先を尋ねると

「どこでもいいですよ」

と最も困る答えを返された。しかしそれも予測範囲内。

「朝だし、モーニング食べながら考えよつか
はい！」と大沢が喜んだ。

大柄な大沢の車は紺のRV。

ただでさえ車に乗ることがめったにない浅井にとつて、こんな背の高い車は見たことはある程度の認識しかない。

乗つて、と言いながら軽く運転席に乗り込んだ大沢の動作を見て、あ、ドアを開けてあそこを掴んで、と学習したものの、ステップに乗せる足を間違えて考え込んだりした。

大沢がそれをじつと笑いを堪えてみてるので、浅井はちょっと睨んだ。

「怒らないでください」

とやはり大沢が笑つた。

「どの方面に向かいます？」

「街にしようつか？とりあえず街中の駐車場に停められたら後が楽よね？」

「はい。じゃ、栄方面に？」

「はい」

そして車は出発した。

車を運転しないので、浅井は車道の真ん中を走っているのが怖い。
「免許あるんですか？」

「あるけど、ペーパー」

「車乗る気はないんですか？」

「う～ん。車買つて持つお金もなかつたし、車なくても困らないし。
・・・

「そんなもんすかねえ。じゃあ、困つたら俺に言つてくれれば、買い物ぐらい付き合います」

車道が怖いのできつと窓から外を見ていた浅井は、ちらりと大沢を見上げた。

気付いた大沢が顔を向けたので、ありがと、と笑つた。
すると大沢が照れて頷いた。

多少朝が早くても、モーニング文化の発達した地域なので喫茶店は山のようにある。

いつも満車の街中の駐車場が空いていたので、そこに停めて二人でうろうろと探した。

「ここ」の3階の店、満腹モーニングつて書いてます

「満腹？そんなに食べる？」

「俺は食べますけど。浅井さんは？」

「私、朝無理。でも大沢君食べるなら私も上げるし」

「え・・・。それじゃ満腹モーニングじゃ多過ぎるかな」

そしてその上の階の、自然派モーニングの店のドアを開けた。

メニューを見て、自然派じゃ足りなかつたかなあと大沢が呟いた

ので、また後で別のところで食べたらいいじゃない、お皿に混む前の方が多いし、と浅井が笑つた。

大沢もまた笑つて頷き、じゃ次の店探しましょうとタウン誌を持つてきた。

そのタウン誌の新譜紹介ページで大沢が手を止め、このCD欲しい、と呟き、え？それ？私それじゃなくて、今度出るケミカルが欲しいの、と浅井が言った。

趣味近いみたいですね。じゃ、このあとこの屋に行つてみます？と、予定が決まった。

昼間でもクリスマスマードの街は煌びやかで、店の大きなウインドウの前に鮮やかなポインセチアが並べられ、白いシクラメンもそれに沿い、濃い緑がそれを縁取る。

歩く人々も楽しげで、隣を歩く大沢も楽しげで、クリスマスマジックなのかなあと浅井は分析している。分析中に気付いたが、通り過ぎる女子がほとんど大沢に振り向く。派手なブルゾンにゅつたり目のブルージーンズ、長身小顔で短い茶髪。

ぱつと見て目立つ上に、じつくり顔を覗き込んで黒目がちの整った童顔。

そうだった。大沢君は、事務所人気筆頭イケメンだった。その筆頭イケメンは、楽しげに延々と浅井に話しかけている。

浅井さん、歩くの速いっすよね。

いつもCDで買うんですか？

てか、トランス以外は何聴くんですか？

浅井も考え方をしながらも、質問には次々と答えて、ビル8階にあるCDショップを目指した。

その二人を、会社の同僚事務員一人が見ていた。

やはり目立つ大沢に気付いて、声を掛けようと走り寄つてから女連れに気付き、

あら、やだ、大沢くんつてフリーだつたはずなのにどうして？誰あれ？

とその後をつけた。

身長はお似合いのサイズだけど、モデルみたいなスタイルだけど、かなりのロングヘアだけど真っ黒よね、きっとそのせいで顔も白く見えるし小さく見えるけど、でもほら全体的に地味な感じね。

と小姑のように判定した連れの女が浅井だと氣付いたのは、昼前に喫茶店に入つてからだ。

テーブル一つ離れた場所を選び、二人の会話に聞き耳を立てていた時に、大沢が大きな声で相手の名前を呼んだのだ。

「え！ 浅井さん、ダフトパンク持つてんの？！」

事務員は、グラスを持つ手を離してしまった。ゴンと鳴つてジュースが少し零れた。

もう一人の事務員は、俯いて固まつた。しばらく無言のまま固まつた後、一人はゆっくり田端のテーブルの方を覗き見た。

そう言わればあの長身はまさにお局サイズ。

あれにメガネをかけて髪を縛れば、・・・・・

そうなの？ 今ちょっと想像できないんだけど、そうなのね？ きっと？

でもたつたそれだけで、メガネと髪だけで、人つてそんなに変わるもの？

事務員はその衝撃を受け入れるだけで疲労困憊し、食事を終えて出て行つた二人をさらに追う気力を失つていた。

ただ、目ではそれを追つっていた。

大沢が会計をして、浅井がそれを先に店外に出て待つていて。正にカツプルですね。デート中のカツプルですね。

長い黒髪が風になびいて、細い指でそれを押さえている。ただそれだけの仕草が、モデル体型のせいか美しく決まって見える。

事務員たちは、それを目の当たりにするだけで脱力していた。

そのモデルのような浅井の元に、天使のような少年が駆け寄つてその腕を引いたのを見ても、

ああ、似合つたじゃない？

と、頷いた。

驚くのに疲れたのだ。

「やーまた会えたね！」

白いダウンジャケットを着た君島が浅井の腕を取った。

「へ？君島君？！」

「秋ちゃんつて呼んで」

突然の出来事で、浅井はあっけにとられている。

大沢が出てくるのを待ちながら、周囲をぐるりと眺めていて、ダイナミックなランニングフォームで逃走している白い人がいるな、とは思っていた。

それが予想以上の速度で、浅井の腕を掴む直前までそれが君島だとはわからなかつた。

「え？君、・・・秋ちゃん？」

「うん！待つた？」

「へ？」

そして、君島を追つてきた中年の男女が息を切らして、声が届く距離まで追いついた。

「まで！小僧！」

君島がくるりと半回転して、浅井の陰に隠れた。

へ？とまた浅井が君島を見た。

「あんた、この、小僧の、なんだ？」

中年の男が浅井に訊いてきた。

話しかけられたことに驚いたが、それ以上にその口のきき方が不快だったので答えなかつた。

「あんた一体、この小僧と、どういう関係なんですか！」

激しい息遣いの合間に怒鳴られる。

君島が苦笑して、浅井の前に出て男と応対しようとしながら、浅井がそれを右手で断つて、言つた。

「あなたに答える義務はないでしょ」

男が、なにを！とまた怒鳴りかけたが、女が男の袖を引いた。
「みつともないことやめてよ！普通のカップルじゃないの！何考えてんのあんたは！」

私買い物に来ただけだって言つてるでしょ…

「ふざけんなよ！この小僧前にも見たぞ！」

「私はないわよ。じめんなさいね、お兄さん」

「いえ。いい運動になりました」

君島がにこりと答えた。

なにを！とまた一步踏み出そうとした男を、浅井が睨んだ。

「邪魔しないで下さい」

君島を睨み続ける男を、女が引つ張つて行つた。

はあ～、と君島が、荷物を降ろしたよつに肩を落とし、ため息をついた。

「何？今の」

「聞かない方がいいよ」

浅井の簡単な問いに笑つて君島が即答した。

「そういえば昨日の彼氏は？もしかして今デート中？」

顔をしかめたまま浅井が頷くと、え、本当？僕がいぢや まずいね、と立ち去ろうとした。

「ちょっと待つて。携帯ぐらい教えてよ」

君島がまた苦笑して、電話を取り出し、簡単に番号交換をして、じや、と右手を上げて走り去つた。

「携帯なんか出して、どうしたの？」

直後に大沢が店を出てきた。

「うん。イタ電。こちそつさまでした」

「あ、はい。いえ。イタ電つて多いんですか？」

「ううん。 それでもないよ。 大丈夫。 あの、 大沢君つて、 赤が好きなの？」

「は？」

「ブルゾン、派手な赤だし。結構赤系が多いよね？」

「ああ、そうかな。はつきりした色だから」

「黒は？」

「浅井さん黒多いっすよね」

「無難な感じだし」

よし、じまかした。と浅井は頷いた。

帰りの車の中で浅井はクリスマスの予定を訊かれた。

訊かれるまでもなくこれまでクリスマスにイベントがあつたことがないので、首を振つた。

「じゃ、空けといてください」

大沢に真つ直ぐ見つめられて反射的に頷くと、大沢も満足気に頷いた。そして俯いたまま続けた。

「俺、本当に、本気です」

運転する大沢をじつと眺めた。
きれいな横顔だ。

どうしてこの子が私を・・・?

入社した時からって言つてたけれど・・・。

今でも若いけど入社した時は20歳。

その頃からもちろんこのきれいな顔だつたのだけれど、
その頃から私を見ていたというのは一体どうしたことだらう?

「大沢君、私、あなたが入社した時つて何かしたっけ?
「は?」

「だつて、うちの事務員つてたくさんいるし、私つて目立たない方
だと思つんだけど」

「あ、俺が、その、昨日の話ですか?」

「うん。あれ?でたらめだつた?」

「いや、まさか。てか、やっぱ浅井さん覚えてないんすか
「え?」

「俺入社して一発目で搬入ミスやつたんですよ。そのフォローを

浅井さんにしてもらつた」

「んん?だつて、それが私の仕事だし」

「そう。あの時もそう言った。俺が社長に怒られて謝りに言った時」

「だつてそうだもの」

「いや、それどころかフォローしたことも忘れてたんだよ」

「え」

「お礼言つてんのに、何のこと?とか言つて」

「あ、ごめん。忘れっぽいから」

「そう、それもあの時聞いた」

「それで?」

「それだけ」

「え? それだけ? ミスのフォローしただけ?」

浅井が疑わしげに大沢を見上げた。

「そうです」

ごめん、新人君の仕事なのにね。忘れてた。

浅井はそう言って笑った。

その笑顔が美しかった。

大沢が見た浅井の初めての表情は、笑顔だったのだ。

あれ以来ほとんど見ることはなかつた表情を、大沢はずつと忘れなかつた。

そして、それ以上の表情を昨夜見せられた。

それは結構ショックだったが、その勢いで今日があるので、今

日一日ずいぶん楽しかった。

クリスマスの予約もとれた。

少しづつ、これからだ。

夕方に部屋まで送つてもらい、手を振つて別れた。

一人暮らしで週末は家事もたまつてるので夕食までは一緒に

しなかつた。

翌日日曜日も洗濯をしたり布団を干したり、一田家事に追われる予定。

大沢と街を歩いて一緒に過ごすのは、悪くなかった。

会話も楽しいし疲れなかつた。

やはり、私を好きだと言うのが今一よくわからないけど、まあそういうこともあるのかなあ。

急に始まつたことなので浅井自身まだよく自分の気持ちもつかめていない。

多分、これから少しづつなんだろうな。

浅井もそう考えていた。

「何それ？嘘でしょ？本当に大沢君だった？」

「大沢君は絶対大沢君だったんだけど、」

「なによ、浅井さんじやなかつたの？」

「それが・・・浅井さんだつたのよ。だつたんだけど、」

「何なのよ！はつきり言いなさいよ！」

月曜日の事務所でのトップニュース。

一番大きな声を上げたのが栗尾だった。

それはそうだろう。金曜日の夜は栗尾が大沢を独占していたのだ。それがその翌日には浅井に盗られたとなると、よく考えればみつともないことだ。

しかも栗尾には金曜の夜の後半の記憶がないので何があつたか皆田見当がつかない。

「だつて、メガネ外して髪も下ろしてたから全然印象が違つてて、でもよくよく見るとやっぱり浅井さんだつたのよ」

「そんなんに変わるかなあ？」

「それから、それだけじゃなくて、すつ・・・とい可愛い男の子に抱きつかれてた」

「え！」

「女の子みたいな男の子で、もうすつ・・・とい可愛い子で、なんかもう浅井さんもやせててスタイルいいからすつ・・・といお似合いで、とにかく大沢君ともお似合いで、あたしもう疲れちゃつて・・・」

「何言つてんの？」

「本当なのよ。私も疲れちゃつたの。見ればわかるわよ
「ね～。疲れたよね～」

昨日一人を見た事務員一人が顔を合わせて頷いた。

嫌だわ、と栗尾は自分の机に戻り、ネイルのデコを撫でる。クリスマスまでに大沢と付き合おうと思っているのに邪魔が入った。

でもまだ時間はあるから大丈夫。
これまで一人でクリスマスを過ごしたことはないの。
だから今年も大丈夫。

栗尾には自信があった。

噂がすっかり膨らみきつた水曜日、大沢が昼に本社事務所に顔を出した。

まだバレていないと思っている浅井は大沢に目もくれなかつたのだが、事務所内の全員が一人に注目していた。

そして栗尾は何も知らない素振りでいつも以上に馴れ馴れしく大沢に話しかけた。

「大沢君、お昼どうする？ またあそこに行こうか？」

精一杯浅井に挑戦的なセリフを言つたつもりだが、浅井は反応しない。

いや、弁当買つて帰るよ、と大沢が答えると、じゃ一緒にコンビ二行こうね！ と高い声を出した。

しかし浅井もコンビ二に行くので一緒になる。

普通に財布を持つて、他の事務員たちも一緒にエレベータに乗り込んだ。

ビルの前の幹線道路は中々信号が変わらない。

大沢にへばりつく栗尾から離れた場所で浅井は信号が変わることを待っていた。

やつと大通り側の歩道の信号が点滅を始めた。

そしてその時、急ブレーキの音と「ギャン」という金属音に似た音が重なつて聞こえた。

急停止しかけた車は再び速度を上げて交差点を通り過ぎた。

しかし歩道にいた全員は、その車が急停止しようとした場所に反射的に目を向けた。

後続車が、小さな塊を避けたり避けきれずにタイヤで踏んだ。

「ネコ?...」

「嘘!」

「やだあ...」

信号が黄色になり、避けもせずにアクセルを踏む車も通り過ぎる。栗尾が悲鳴を上げて大沢に抱きついていた。

大沢は焦つて体を離そうとしていたが、浅井は気付きもしなかつた。

ほんの田の前で起つてこりの惨劇を、自分は見ていいことしかできない。

何かできることがないのか考えてもまるで思いつかず、かといって目を伏せることもできない。

せめて早く車が停まって欲しい。でも停まつたところで、自分に何ができる。

どうしたらいいのかわからない。多分何もできない。

浅井はそんな無力感と絶望感に苛まれていた。

車が速度を増す中、大きなライムグリーンのバイクだけが車間を広げ、ライダーが上体を起こしてヘルメットのシールドを上げた。そして後ろを振り返り左手を横に伸ばして手の平を向け、後続車に速度を落とすように合図した。停止線まではまだ距離がある。

後続車はクラクションを鳴らして抗議したが、バイクは構わず停止し、左足でスタンダードを出してから両足を下ろした。

グローブを脱ぎ、タンクバッグを開けて中からレジ袋やタオル、ティッシュを取り出し、ヘルメットを被つたままバイクから離れ、

かつてネコだつた肉の塊の前に膝をついた。

後続車はクラクションを鳴らすのを止めた。

ネコにタオルを被せ、そのまま拭うように拾い上げてレジ袋に入れた。

自分の手もティッシュで拭き、それも一緒に別の袋に入れてきつ

く縛り、立ち上がってバイクに戻る。

相当長身の男だった。

ネコの入った袋をタンクバックに入れて後続車に頭を下げてからバイクに跨りグローブを嵌め、何事もなかつたように走り去つた。

信号は再び青になつていた。

「す」・・・・・

「あざやか・・・・・」

結局全員、信号で渡らずに一部始終を見ていた。
浅井も口を開けてみていた。そして、小さく、す」、「と呟いていた。

大沢がそれに気付いていた。

「今つて、ジガーレイのバーテンじゃない?」

「え?あのオカマ?」

「違うつて!あんなオヤジじゃなくて、学生のバイト君がいるじゃん?」

「ああ!あの超でつかい?」

「やうね、今の子超でつかかっただしね」

「ジガーレイ?」

浅井が思わず訊ねると、若い同僚が勢い込んで教えてくれた。

「そうです!ちっちゃいカクテルバーなんんですけど、店長がオカマっぽいんですけど、ほかのバーテンが結構イケメンで、さつきのバーカイクの子も多分そなんですよ!おまけにあの子つて、名大生なんですつて!」

「へへ・・・・詳しいのね」

「やだ!私じゃなくて番子があそ」ぱりかり通りてるから、付き合いでですよ~」

「あ、なによ、紗絵があのバーテン狙いなんでしょう!」

「違うわよ!どうせカクテル飲むならイケメン見ながらつて思つてるだけよ!」

「嘘!あんたつてあのバーテンにばっかりオーダーするじゃない!」

「あの子のショイクが一番上手なの…」

「何やらしい」と言つてんの！」

「え〜！意味わかんないんだけど…」

思わず吹きだしたが、信号が変わったので浅井は横断歩道に足を踏み出した。

その時に後ろから大沢の声が聞こえた。

「戻るわ」

浅井が振り向くと、大沢は踵を返してビルに向かっていて、どうしたのよ〜と栗尾が呼びかけていた。

どうしたのかな、と思いつつ、浅井はそのままコンビニに向かった。

会社帰りに浅井は、赤の毛糸と編み物の本を買った。クリスマスマではそう時間がないので、マフラーへりにしか編めないだろうと思つ。

昔から編み物は好きなので、当分これに掛かりきりだと思つだけで嬉しかつた。

そして一人で街を歩きながら、君島のことを思い出していた。携帯の番号を訊きだした日に、帰つてからすぐに電話したのだ。しかし取つてもらえなかつた。次の日も。その次の日も。そして今日もこれから掛けようと思つてゐる。どうか、掛けなおしてよ、と思つてゐる。

そう思つていたその時、携帯が鳴つた。

歩きながらしゃべるのが苦手なので、歩道の隅に寄つて立ち止まり通話ボタンを押して耳に当てた。

すると後ろから、「もしもし」と聞こえた。

笑つて振り返ると、予想通り君島が右手を上げて立つていた。

「何度も電話したのよー。」

「うん。知つてゐる。何度も電話もつたよ。」

今日も白いダウンジャケット。相変わらず天使のよつと輝く笑顔だ。

「なんだかよく会つわよね。もしかしたら今までもよくすれ違つてたのかしら?」

「それないよ。」

君島が浅井の腕をとり、歩き出した。

「だつて最初に会つたのがこのあたりだつたから、ここで待つてた

らあなたに会えるってわかつてたし」

浅井がちらりと君島を見た。

「あら。待ち伏せしてた?」

「ふふ、と君島が笑つた。

「してない。たまたま通りかかったら、あなたがたまたま歩いてたら電話したの」

「そう。じゃあ私たちは相性がいいのかもね」

「そうだね。結構運命的な出会いかも知れないね」

笑いながらふざけた会話を続けていたが、それをまたしても同僚事務員が聞き耳を立てていた。

それに気付かず、二人は近くの喫茶店のドアを開けた。

「それで、この前のはどういって？」

「この後予定があつて食事をするほど時間がないといつ君島に、まず一番訊きたいことを切り出した。

「あの追いかけてきたおじさんは？」

君島はコーヒー カップに口をつけたまま、浅井を見上げた。可愛い顔してブラックなのか、と浅井は首を傾げてショガーポットを開けた。

「教えないよ。内緒」

カップを置いて君島が答えた。

「内緒つて。あのおじさん、真剣に走つてたわよ」

「僕も真剣に走つたよ」

砂糖もミルクも入れてかきまわしながら、顔を上げた。

「あの感じだと、あなた、あのおばさんの浮氣相手とか？」

「冗談のつもりで笑いながら言った。

君島は、何の反応もせずに、ただ浅井を見つめた。

「それと、間違われたとか……？」

君島は、にやりと笑つた。

「何？その笑いは？」

「うん。まあ、あれじゃ「まかしようがないよね」正解

浅井が絶句した。

「だから内緒つて言ったのにな」

君島はやはり笑つていた。

「なつ、なんで、人の奥さんなんか、あ、あの、出会うのが遅かつ

たつてやつ?」

思わず顔を近づけて小さな声で訊いた。

君島はフフフと笑う。目を伏せると長い睫毛がお人形のようだ。こんな可愛らしき子が、不倫?!

あの時のおばさんはどんな顔だつただひつ。思い出せない。思い出せないくらい凡庸な外見だつた。

どうしてそんなおばさんとこの天使のよつな子が、浅井が顔を顰めて考へてみると、君島が軽く答えた。

「そんなんじやないよ。

それに相手はあの人だけじやないしね

浅井は、絶句の上に息も止めてしまった。

「気にしないで。僕も相手も本気じゃないんだし」

君島は笑つて手をひらひらと振つた。

「お互い便利に使つてるだけなんだ」

浅井が首を振つた。

「どうして、そんな、」

「うん。楽だから」

「楽、だなんて、そんなはずないじやない」

「うん」

君島が一息ついて答えた。

「誰も束縛しないから、楽なんだ」

その言葉を少し考へた。束縛しないから楽。しかしそう考へるのを止めた。

「楽でもなんでも、そんなことなんにもこゝ」となんかないんだから、絶対やめなさい!」

君島はまた天使のように微笑んだ。

「僕のことなんか心配してないヒマないでしょ。もうすぐクリスマスなのに」

「「こまかす気なの？」

「だって僕、クリスマスの予定がないんだよ。浅井さんはあの彼氏と？」

「え、そうだけど」

「いいね。その袋は何かプレゼントなの？」

あっさりと話題を逸らされた。

そして君島が浅井の買った文庫本に興味を示したので、どうせマフラーを編み終わるまで読まないので貸すことにしてた。

それを少し離れたテーブルで、事務員が聞き耳を立てていた。さすがに内容までは聞き取れず、一人でコーヒーを飲んでいたことを確認できただけだ。

そしてそれはその夜には栗尾に報告されていた。

夜に、大沢から浅井に電話が入る。

会うようになつてから、つまり先週の土曜日から、毎晩定時に電話が入るようになつた。

明日は忘年会ですね。

そうね、そつちはみなさん参加? うん。社長も。本社は社長参加?

社長は確かに張り切ったかなあ。

そうなんだ。俺本社の社長ってみたことないかも。

そうね。私も何ヶ月も見てない気がする。

いや、そんな忘年会よりさ、クリスマスですよ。
え？

え？忘れてんの？

忘れてないけど、そういうえば詳しい予定は決めてないじゃない？

ああ、大丈夫です。俺が決めてます。

へえ。どんなの？

内緒です。

内緒？

あ、でもそんなに期待しないでください。

毎晩電話で会話しながら、避けていたる話題があつた。
大沢はあのバイクの男。浅井は君島のこと。

金曜日の夜は本社上げての忘年会が開催され、下請け業者もほとんどが参加した。

大沢も出席したのだが、くじ引きの席が栗尾の隣だったのと、またしても栗尾に独占された。

同じく参加していた浅井もさすがにそれは気にはなったのだが、まさか文句を言うわけにもいかない。

それに、この場でこの前のように一人で話してもきっと盛り上がりだらうし。

そんなふうに考えて浅井はなんとか納得する。

居酒屋での一次会が盛況に終わり、年配の上司たちと共にいつもなら浅井はここで離脱するのだが、

次はみんなでジガーレイに行くんですけど、浅井さんも行きませんか？

と、同僚に誘われていてぐらついていた。

「ほら、この前のバイクの！覚えてないですか？」

と言われるまでもなく、浅井はジガーレイと言つ単語もしつかり記憶していた。

まだ早いですしね！行きましょう行きましょう…と腕をとられ、しそうがないわね、と了承した。

「あ。やっぱ浅井さん、行くんだ」

栗尾が大沢に聞こえるように呟いた。

「見かけによらず、浅井さんってすごいのよね

呆れたように首を傾げて笑つてみせた。

「すつごい若い子と、最近毎日会つてゐるんだつて。なんか、子供みたいな子？それなのに次はバーテンなのね。物足りないのかな？」

「知るかよ」

面白くない大沢は、はき捨てるように答えた。

「多分、名大つてどこがツボだつたのね。おばさんは若さと学歴にこだわるの！」

栗尾は大沢の学歴コンプレックスをよく知つていた。

人の弱味を探り当てる能力は天性のものがある。

そしてそれだけではなく、興信所の探偵と付き合ひがあり、頼めば軽く調査してくれる。

その探偵によれば、大沢の周囲は結構高学歴の人が多く、大沢だけがぽつんと高卒の資格すら持たない。コンプレックスを持たざるを得ない環境にいるのだ。

そして、軽く浅井の調査も済んでいた。

浅井は大沢のコンプレックスを充分刺激する経験を持つていた。

すつごい若い、子供みたいな子、とは多分、あの時の小僧だらう。大沢はいらいらしていた。

あの時の小僧と会うのはしちゃうがない。

腹は立つが、ある意味あの小僧が実際俺たちのキューピッドだつた。それは認める。

それだけのことなら会うのはしちゃうがない。

しかし、この後のバーは、余計だらう。

あのバーテンは、余計だらう？

ただ見かけただけの男に興味持つの？浅井さん。

大沢はそんなふうに、いろいろしていた。

しばらく歩いて到着したのは、繁華街から少し離れた街角の小さな一軒屋。中のライトが暗いせいか窓が琥珀色に見える。

ドアを開けると暗い店内に小さく鈴が鳴る。いらっしゃいませ、と確かに中々の男前が案内に来た。

「カウンターに行きましょうよ！」

と突然後ろから栗尾が浅井の腕を掴んで、ぐいぐいと進んでいった。

浅井は少し戸惑つたが、きっと酔っているんだろうな、と歯向かわすについていった。

大沢もその後ろを追つた。

店が小さいせいもあるのか、結構混んでいて席がそんなに空いてない。

ダーツのコーナーもあり、椅子のないスタンド席もあるので立つていてもいいようだ。

カウンターは2席しか空いていない。大沢があぶれた。

浅井もさすがにこの席を大沢に譲る気はなかつた。そこまでも人よじじゃない。

一次会で大沢が栗尾とずっとしゃべっていたことが、やはり浅井は面白くなかった。

この店にきてまでそんな姿を見せられなくてもいいでしょ。

浅井はそう思つていた。

大沢も腹を立てている。

そんなにカウンターがいいのか？俺を立たせたまでも？

大沢は少し酔つっていて、いらいらしていて、よく考えれば浅井に

原因はないのに、腹を立てていた。

そして少し位置が高いスタンドテーブルに腕を乗せて、目当てのバーテンを探した。

カウンターの中には店員が一人いて、一人は接客中。

一人は横の作業台でオレンジを切っているところ。

そのオレンジを切っているメガネの店員が、かなりの長身だった。恐らく、彼。

切ったオレンジをグラスの口に差し、トレーに載せてフロアから戻ってきたイケメンに渡した。

それから新たな客3人の顔を確かめるように眺め、「ご注文は？」

と言った。

低い、掠れた声だ。

「私、スクリュードライバー！」

栗尾が、ついさっき彼がオレンジを差したカクテルを簡単に頼む。「ホワイトレディ

浅井もいつも好みを口にする。

大沢が口を開かなかつた。

「お客様は？」

バーテンが催促した。大沢はしばらくバーテンを睨んでから、言った。

「ビル

「バド、クアーズ、ハイネケン」

「クアーズ

「はい」

バーテンが頷いた。

バーテンは作業時間の短いメニューから用意した。

まずビール、次にステアカクテルのスクリュードライバー、最後に浅井のホワイトレディ。

材料をシェイカーに入れて上部を合わせて蓋をし、両手で持ち上げたところで栗尾が質問した。

「バーテンさんって、名大の生徒さん?」

バーテンは長い指を広げて俯いたまま上目遣いで栗尾を見て、「そうです」と頷いた。

わ〜、す〜〜い、何部なの〜?と更に訊き出そうとするが、バーテンは作業中は口を開かないし、結構ぐるぐると細かい仕事も忙しそうにこなしているのでほぼ無視している。

大沢は敵意丸出しでバーテンを睨んでいた。

頭がよくて顔も声もいい。背も高い。もてるだらつ。あのバイクはいいアイテムだ。

さらにつらいらを増していた。

浅井も、バーテンを観察していた。

手先が器用で動きにそつがない。

端正な顔立ちが冷淡に見えるのは切れ長のつり目せいだらつ。少し長めの黒髪がメガネに掛かっている。そして恐ろしく、寡黙だな。

浅井は笑っていた。

バーテンがホワイトレディを作り終えて浅井の前にコースターと一緒に置く瞬間を目掛けて

再び栗尾が訊いた。

「バーテンさん、専攻は？」

バーテンがまた、栗尾をちらりと見て答えた。

「工学部です」

栗尾が笑つて、浅井を振り向き、大きな声を出した。

「え～！奇遇ですね～浅井さん！」

浅井さんと同じ、名大工学部ですって！」

「名大・・・?」

大沢が、囁きのような掠れた声で繰り返した。
隣で顔色を失つて呆然としている浅井を覗き込んで、栗尾が笑つた。

「そう言つてましたよね～？浅井さん」

言つていない。

履歴書にも書かなかつた。

それをなぜ

「まじで？」

大沢が硬い作り笑顔で浅井に訊いた。
浅井はその顔も見ずに俯いていた。

思い出したくない。

話題にされたくない。

だから隠していた。

誰にも知られていないはずなのに。

笑つて「ごまかすタイミングも逸した浅井は、それでもなんとか笑みを作り、首を振りながら椅子から降りた。

やつぱり私は場違いだつたわね、という顔で財布から一枚札をしてカウンターに置いて去ろうとした。

直後に大沢の声がした。

「あんたさ、この前死んだネコ始末しただろ?」

周囲がシンと静まった。

浅井も驚いて振り向いた。

「国道で轢かれてぐちゃぐちゃになつたやつ」

えつ・・・と栗尾もひきつった顔で呟いた。

バーテンは無表情に大沢を見下ろし、いえ、と答えた。

「あんただよ。外に止まつてるバイク、あれだつたよ」

「違います」

やはり無表情にバーテンが首を振つた。

店内の全員が注目している。

天井のスピーカーからピアノ曲が流れていた。

浅井は全身が熱いような冷たいようないたたまれない気持ちになり、慌てて大沢の腕を引いた。

大沢はそれを振りきり、大きな声を出した。

「その手で、ネコ始末したんだろ?」

浅井がまた大沢の腕を掴んだ。

「その手で平氣で食いもん作つてんだ?」

大沢はもう浅井の手を振り払わなかつた。

それでも浅井は両手で強く掴んで、店の外に引っ張つていつた。

「なんてこと言つのー。」飲食店なのよ？営業妨害って言われてもおかしくないわ！」

店の入り口からも遠く離れた駐車場の角で浅井が大沢を叱り付けた。

「信じられない！ここだつてきつとうちの顧客なのよ？」

浅井の会社の業務内容は業務用厨房機器のリース、販売、修理、メンテナンス。

主に代理店を通して一般飲食店に設置されている。

大沢の仕事は修理メンテナンス。この店に来る可能性だつてある。「いくら酔つてたつてそのくらいの自覚もないなんて、」

大沢は無表情で聞き流している。

そんなに酔つてはいない。ただ、いらついてるだけ。

その衝動の延長で、目の前で真っ直ぐ大沢を見上げて怒つている浅井の両肩を掴んだ。

浅井が息を飲むと同時に、大沢がその腕を引き寄せて顔を近づけた。

浅井が顔を伏せて腕から逃れようともがくと、大沢が更に強く肩を掴みなおす。

「浅井さん」

大沢が名前を呼んだが、浅井は尚一層抵抗した。

何これ？

何？大沢君つてこんなことする人？

どういうこと？これ、どういう意味？

とまどいながらも、浅井はわずかに屈辱を感じていた。

たつた一回一緒に街を歩いただけで、どうしてこんな扱い？
なんでこんなに強く掴まれなきゃならない？

さつきバー・テンを罵ったことよりも、浅井は今掴まれている肩の
痛みで大沢を見損なっていた。

これだって暴力の一種だ。

唇を噛んで、力を入れてその両手を振り払った。

完全に拒絶されて、大沢が何かを言おうと息を吸つた。
その時力ちつと勝手口が開く音が聞こえ、誰かが出てくる気配が
したので、大沢は手を下ろして吸つた息を吐いた。

そして、出てきたのはヘルメットを下げた、あのバー・テン。

二人の姿は目に入つただろうに、バー・テンは顔も向けずに真つ直
ぐ駐輪所に向かつた。

とつさに浅井も大沢に目もくれずに、バー・テン目指して走り出
した。

迫つてくる浅井の足音に気付いているだろうに、バー・テンは振り
向きもしない。

その浅井の後姿を大沢はしばらく眺めていた。

そしてとうとうバー・テンが浅井を振り向いたところで、踵を返し
た。

「お連れの人、店に戻りましたよ」
バーーテンが走つてくる浅井を振り向いて、一度目を動かしてから言つた。

「うん？いいの。一人で、来たんでもないし」
ちょっと走つただけで息が切れた。しかしまず謝らないと。

「さつきは、ごめんなさい。もしかして、叱られて、帰るといひっ？」

「いえ。元々この時間までです」

バーーテンがあつさり即答する。

「そう。それでも、あんなこと、ごめんなさい」

「いえ」

バーーテンは、会釈をして立ち去りつとした。

「あの」

浅井が呼び止めた。バーーテンが顔だけ向けた。

「猫のこと、訊いていい？」

バーーテンは、首を傾げてからまた歩き出した。だから浅井もその後について歩いた。

浅井はバーーテンのあの行動にずいぶん感動したのだ。
きっと動物好きの優しいお兄さんなんだろうと想像していたのに、
どうも様子が違う。

だからこそなおさら興味がわいた。

母校の後輩だといつことも、痛みと共に強く印象付けられた。

この無愛想な理系のバーーテンが、誰もが目を逸らした猫の最期を
引き受けたのはなぜなんだろう。
まだ少し荒い息を整えながら、訊いた。

「どうしてあそこまで、わざわざあんなことできたの？」

「バーテンは振り向かない。」

「だつてもう、生きてなかつたし、誰も助けられなかつたし、あんなことしても、」

そして到着した駐輪所でバーテンがヘルメットを置いたバイクは、ライムグリーンだった。

「通り過ぎたつてしようがないし、みんな嫌だなつて思いながら通り過ぎたと思うのに、」

バーテンがキーを回してセルを押した。

そして始動したエンジンを二三度吹かした。

安定したはずのエンジンがなんとも不規則な爆発音を繰り返す。バイクってこんなものなの？と気を取られていると、バーテンが

口を開いた。

「あそこ、よく通るんです」

バーテンがメガネを外した。

「気付かなかつたら通り過ぎたけど」

そう言つた後でヘルメットを被り

「気付いたのでああするしかなかつた」

シールドを開けてメガネをかけ、

「ああしなかつたらこの先あそこを通る度に後悔する」

グローブを嵌めてスタンドを蹴り上げ

「別に猫のためじやないです」

バイクをバックさせて駐輪所から出し、シートに跨つた。

「俺が不愉快だつた。それだけです」

それからヘルメットのシールドを下げる度に左足でシフトを落とし、浅井に会釈して走り去つた。

浅井はその姿をしばらく見送っていた。
バイクが交差点を右折して見えなくなつても、まだ立ち尽くしていた。

バーテンの答えは、期待以上だつた。

俺が不愉快。なんてシンプルな。

何の装飾も言い訳もない。だから、強い。

シンプルで単純なものが一番強い。どんな場合でも。

そんなことを改めて教わつた。

そうだ。私もシンプルに強くなる。

浅井はなんとなくそう思つて、笑つた。

その浅井を、店から出てきた大沢と、それについてきた栗尾が見ていた。

そして浅井が振り返って店に戻る前に立ち去った。

「浅井さんって、年下が好みなのね。大沢君も気をつけなきや！」
二人のことを知つていて、栗尾が警告する。

「でも若いつてだけで好みに全然共通点がないのよね。大沢君だって若いんだから毒牙にやられちゃうわよ！」

鬱陶しいな、と大沢が言いかけた時に、栗尾が声を潜めて続けた。

「でも、気持ちはわかるわよ。だつて最初の彼と不幸な別れ方したじゃない？もう年上が怖いって思つてもしちゃうがないのよね」

探偵に頼んでいた浅井の調査がこんなに早く届いたのは、新聞に名前が載つていたからだ。

生まれ故郷での詳細な調査はまた後になるが、今回の報告だけでも浅井の衝撃的な過去が明らかになり、栗尾は満足していた。

ただしの嫉妬は感じていた。

悲劇のヒロインのような物語に。

「情熱的だったのよね。浅井さん、若い頃は」

大沢は驚いていた。

自分には内緒と言つて隠した過去を、栗尾には伝えている？

「浅井さん、今でも好きなんだと思つわ。だって今でもその時の彼の話、よくするもの」

もちろん嘘だ。浅井は過去の話を一度もしたことがない。こんなに激しく美しい過去を持ちながら、一人で秘めている。そのことすら美しい。

そして栗尾にはそれが許せない。

そのまま陶酔をぐちやぐちやに踏み潰してやる。

大沢を別の店に誘い、栗尾は滔々と浅井の過去を物語つた。それを拒む勇気は、大沢にはなかつた。

週末だと言づのに大沢からの連絡がない。

クリスマスまであと10日。

浅井はコタツに入つて赤いマフラーを編んでいる。

昨夜は大沢と栗尾が先に店から消えた。

同行した全員が実は大沢と浅井のことを知つていて、それを知らない素振りをしていて、しかも栗尾の大沢に対するアプローチも周知の事実で、その二人が早々に消えたということをサカナにこの後も飲みたいのに、浅井の前で口にできる話題ではない。

他に話題がないだけでなく非常に会話もぎこちなくなり、そのまま盛り下がつて忘年会はお開きとなつた。

浅井はその後何度も大沢の携帯に連絡したが、電源が入つていないと返されるだけだつた。

いらいらしながら編み目を増やしている。

考えたくないと思いながらも他に思いつくこともない。

栗尾さんと一人で消える？

大沢君、否定してたわよね？

そうじやないのなら最初から言えぱいいだけのことじやないの。胸の中でブツブツと文句を言いながら編み目を増やしている。

それよりも栗尾が浅井の隠している過去を知つていいことが不気味だつた。

なぜ知つているのか、何をどこまで知つているのか、何が目的なのか。

わかるはずもなくブツブツと悩みながら編み田を増やしていく。

だけど、何を言われても無視しよう。
どんなふうに引っ掛けられても、先輩のことは口にしない。
あんなふうに、酔つたはずみで話題にするような、
先輩はそんな人じやない。

悔しくてたまらない気持ちをこなすために、浅井は編み田を増やしている。

ブツブツとマフラーを伸ばしていると、コタツの上に乗せた携帯が鳴った。

すぐに取り耳に当てるど、

「ごめん。君島です。今いい？」

と高い声が聞こえた。

浅井は思わず笑つて、ベッドに背中をもたれて答えた。

「うん。いいよ。今一人だし」

「え？ 一人？ なんで？ 土曜日なのに？」

声を上げて笑つてしまつた。

「あなただつて土曜日にどうしたのよ？ たくさんいる彼女は？」

納得はしていないものの、事実なので君島に突きつけると

「だからさ。彼女たちには亭主とか彼氏とかがいるんだよ。基本的に僕は土田フリーなの」

呆れて天井を見上げた。

「あれ？ もしも～し！」

言葉がないよ、君島君。と、また浅井は笑つた。

「あはは。言葉がない？」

君島君と付き合つたちは、寂しいのかも知れない。

笑いながら浅井は思つた。

見捨てられた自分をごまかしたくて、君島君を利用しているんじやないだろうか。

そういう気持ちはあるのではないか。

「浅井さん、ヒマなら出でこない？」

私が今君島君に会いたい気持ちと、何が違う?だとしたら、会えない。

「この前借りた本、面白いね」

会う理由がない。

「続きを読みたいんだけど、自分で買つ気にはならないんだよね」

だつて私たちは、

「浅井さん、買つでしょ? 今日買つて先に僕に貸して」

・・・・・は?

「じゃないと借りた本返さないよ」

つっかり爆笑した。

完璧な理由を作られてしまった。

これじゃしょうがなく会いに行くしかないじゃない。

なんて上手なんだろう。

もしかしたら君島君の彼女たちも、いつもひつひつて引きずられたんじやないだろうか?

君島君は、お互に利用しているのだと言つた。

私もその一人になるのだろうか?

それは、悪いことだろうか?

大沢が昨夜戻ってきたのは遅かった。朝方と言つてもいい。

栗尾に聞いた浅井の話のせいでその後全く酔えなくなり、何をどれだけ飲んだかも覚えていないほど飲んだ。

栗尾は話し終わつてすぐに酔い潰れ、またタクシーで自宅まで送り届け、大沢はその後店を変えて一人で飲み続けたが、まるで酔えなかつた。

その事故は覚えていた。

当時かなり話題になつた有名な事故だ。

大沢は中学生だつた。

峠道のガードレールを突き破り、10mの崖下に転げ落ちた車両が発見された。

悲惨な車体の潰れ様に、生存者はいないだろうと警察も救急隊員も一目で思った。

もし命があつても相当な重体に違ひない。

まず確認に降りた警官が発見したのは、運転席の大柄な男性の遺体。

ただ横転して転げ落ちているためか、まるで運転席から立ち上がつたようにその位置が動いている。

あるいはシートベルトが機能しなかつたのか、助手席に覆い被さるように体を伸ばしている。

そして車体はそのまま潰れていいるのだ。遺体も潰れていいる。助手席に逃げようとしたのだろうか。

体力的にこれだけ余裕があったのなら、むしろ体勢を低くしてシートの下に潜るなどで衝撃に備えていたらあるいは、

そんな不可解とも言えない程度の男性の遺体状況の理由を、反対側に回った警官が叫んだ。

「助手席に！もう一人います！シートベルトが伸びてる！」

慌てて集まり、手持ちの道具でドアを開け、潰れた男性の下からなんとか引っ張り出したのは

髪の長い若い女性だつた。

意識はないが呼吸がある。奇跡だ。

救急隊員も降りてきて、女性をタンカに乗せて吊り上げた。

男性の遺体は完全に挟まり潰れていて、車体を切断しなければ出せない。

「こんなになつても」

救急隊員がそこで言葉を詰まらせた。

誰もが唇を噛み締めた。

両腕で彼女の両肩を押したまま、彼は息絶えていたのだ。

その、助けられた若い女性が、浅井。

「まだ18・9でそんなことになつたのよね。忘れられないと思つわ」

世間の涙と感動を呼んだ事故だつた。

「意識が戻った時には彼のお葬式、終わつてたんですつて。可哀想ね」

誰もが自分を犠牲にした男を称え、悲しんだ。

「だから浅井さん、学校やめて会社に入つて、実家に戻らざるに」

に残ったのね」

俺に内緒にしてたのは、そんな男のことだった。

大沢は打ちのめされていた。

「でもそんなこと、言わなくともわかつちゃうことじゃない。
そうよ。そういうえばおじさん、ずいぶん同情してたもの。可哀想
な事故だつて」

今の大沢にはどうでもいい言葉だが、唐突なので引っかかった。

「そうか。きっと可哀想だから採用したんだわ」

大沢の視線に気付いて、栗尾が微笑んだ。

「やつー! うちの会社の社長つてね、私の伯父さんなの!」

昼過ぎに、先日会社帰りに一緒に寄った喫茶店で君島と待ち合わせすることにした。

メガネをやめてコンタクトにしたのだが、大沢に悪い気がしたのでスカートはやめた。

それでも君島に会うのが後ろめたい気がしている。

連絡してこない大沢君が悪い。

昨日だつてあんなふうに、栗尾さんと帰つたんだし、私が今日誰と何をしようとしている。

と思いつつも、やはりすつきりはしない。

なんなんだろ、一体。

もしかしたら大沢君つて、ずいぶんイメージと違う人なのかも知れない。

そんなこと考えててもしうがない、と浅井は首を振った。
定期で地下鉄に乗り、駅で降りて徒歩5分。

大きな窓の開放的な喫茶店で、君島はもう窓際の席に座つていた。外から見ても目立つ華やかさ。花をあしらつよりも窓が豪華に見える。

きつとその効果を狙つてお店の人気がそこに案内したに違いない。
そんなことを考えて、浅井は笑つた。

その視線に気付いたのかどうか、君島が顔を上げた。

そして微笑む浅井を見て、一瞬冷えた笑みを見せた。

見間違いかと思えるほどの短い瞬間。

すぐにいつもの華やかな笑みに変わったので、浅井も微笑んだまま喫茶店の入り口に向かった。

しかし、さつきの君島の笑みが頭から消えない。
あの凍った瞳。

君島の冷たい視線に射られたせいで、浅井の頭もすっかり冷えた。
一步一歩歩きながら、頭の中に貼りついたさつきの笑みを凝視して、一つ一つその意味を剥ぎ取る。

美しい笑顔だつた。

初めて見たなら。

しかしあんな冷たい視線を、浅井は一度も向けられたことがない。
誰に向ける目か？
誰に向ける目を、私に向けたのか？

浅井は推論を一つ、導いた。

それが解かを知る問い合わせ、思いついた。

喫茶店のドアを開け、近寄ってきたウェイタレスに、
「待ち合わせ。お水もいらないわ」
と断り、大股で君島の座る窓側の席まで進んだ。

様子の変わった浅井に驚き、君島が立ち上がりつて

「どうしたの？」
と訊いた。

そして浅井も訊いた。

「私を、
試した？」

一瞬で君島の頬が紅潮した。

それが解だつた。

浅井は微笑んだ。

「帰るわ。またね」

そう言つて踵を返した。

え！待つて！と後ろから君島の声が聞こえていたが、かまわづド

アを開けて店を出た。

走り去るつもりはなかつた。

追いかけてこなければそれでもいいと思つていた。

「浅井さん！」

君島の高い声が聞こえた。

振り返ると、目を大きく開いた天使のような少年が、自分に向かつて駆けてくる。

その表情は知つてゐる、と浅井は思つた。

初めてコンタクトショップの鏡越しに見た顔と同じ。女の子だと思った。可愛い女の子の困つた顔。

ごめんなさいって謝つてくれたわね。

浅井は微笑んで、走つてくる君島を待つた。
もうこれで最後だと思つたから。

「さつきの、どういふこと

君島が浅井の目の前で止まり、訊いた。
私に言わせるの？赤くなつたくせに。
そう思つて笑つた。

笑つていないと、涙が落ちそつだつた。

「私を彼女たちと比べたんでしょう？」

あの冷えた瞳は、君島の彼女たちに向けられるものだ。

「私も彼女たちの一員になれるかどうかの試験だつた？」

浅井も大沢という相手を得て、その資格は充分だつたのだ。

「ならないからね。私、そんなに君島君好きじやないよ」「もしあの冷えた瞳を見てなければ、今頃どうなつていた？」

「友達にしかならないから」

どうにもなつていない。私はこの子を利用したりしない。

「それがだめなら、ここでお別れ」

「この子とそんな付き合いは、したくない。

「そういうことなの」

「この子にそんなふうに利用されたくない。

悪いことだらうか、と来る前には思つていた。

「冗談じゃない。

「この子をそんなふうに利用したくない。

君島は田を丸くしたまま、口を結んだまま、浅井を凝視していた。

君島が浅井を試したように、今は浅井が君島を試している。仕返しという訳ではない。

これは駆け引き。

そこまでわかつていたのに、どうしても耐え切れず、君島は吹き出した。

「ごめん！あの、」

笑いながら言い訳した。

「そんなつもり、なかつたんだ、本当に、」

笑いすぎて涙が出た。

「こんなに、見事に振られるなんて、」

その涙が呼び水になった。

君島がしゃべれなくなつた。

片手で顔を覆い、俯いて動かなくなつた君島に驚いて、浅井は慌ててその手を引き、人の少ない路地を駆け抜け小さな公園まで走つた。

自動販売機で熱いお茶を一本買って、ベンチに座る君島に一本渡す。

浅井はベンチの横の枯葉がわずかに残る立ち木にもたれてペットボトルの蓋を開けた。

しばらくして君島が大きくため息をついて、空を見上げた。

泣き腫らして目も鼻も赤い。その顔も可愛いわ。

浅井はそう思い、笑つた。

その浅井の笑顔を見て、君島が言つた。

「女の子みたいに可愛いと思つた？」

浅井は答えず、微笑んだまま君島を見下ろした。
君島も微笑んで俯き、語りだした。

「今日、約束があつたんだよ。人妻と。でも今朝になつて亭主の外出の予定がキャンセルになつたからつて電話が来てね。

僕の約束もキャンセルつて思つでしょ？」

浅井が頷く。

「そうじやないんだつて。僕には会いたいんだつて。それでね」

君島が浅井を見上げた。

「僕に迎えにこいつて。亭主に紹介するつて
え？」と浅井が驚いた。

「だから、女装してこいつて」

君島は微笑んでいた。

その笑顔に、浅井は胸が潰れるような気がした。

「別に、こんなこと初めてじゃないんだ」

君島は再び顔を伏せた。

「僕はそういう意味でも便利だから」

浅井が立ち木から離れ、君島の横にしゃがんだ。

「僕だつて彼女を利用するしね」

君島は浅井を見ずに続けている。

「だから僕は、」

浅井が被せるように言葉を続けた。

「だから彼女たちが嫌いなんでしょ？」

言葉を奪われた君島が、浅井を見下ろした。

やつと目があつた君島に、浅井が微笑んで言つた。

「だから嫌よ。彼女たちの一員になるのは」

君島が一瞬目を丸くして、その目をぐるりとまわしてから、あ、と息を吐き出した。

そして髪をかきあげて空を仰いでから浅井を向き直つて言つた。
「だから、真ん中省略しないでよ！」

君島は、赤い目のまま笑つていた。

今は省略してなかつたでしょ？と浅井が言つとさうに笑つた。
ざつくりカットしてゐるよ。まったくもう。

笑いながら君島もペットボトルを開けた。

その笑顔にほつとして、浅井が立ち上がつたのだが、足首がバキ

つと鳴つた。

君島がまた吹きだして、運動不足だよーとセリに笑つた。

そのあとしばらく笑い続けた。

笑いすぎよ、と浅井が抗議しても君島は笑つていた。

君島君を見て微笑んだ私の表情が、彼女たちに似ていたのかも知れない。

反射的に君島の笑顔が凍つたのかも知れない。

そう思いながら、浅井は暖かいお茶を両手で握った。

「この子は笑っている方がいい。

こんなふうにキラキラ光る笑顔が一番いい。

そしてしばらくして、君島が浅井を見上げた。

「浅井さんは、変な人だね」

失礼ね、と笑顔で睨む。君島が笑つたまま続けた。

「こんな話聞かされても、引きもしなきや同情もしないんだ」

浅井は笑顔を引っ込めなかつた。

君島も笑顔でそれを覗き込んだ。

「僕の、友達にはなつてくれるんだよね」

浅井が頷いた。

「僕ね、友達少ないんだ」

そんなネガティブなことを言いながらも、君島はやはり晴れやかな笑顔を見せる。

「しかもね、僕の友達つてのは、みんな友達が少ないやつらなんだ」

「そう。じゃあ資格充分だわ、私」

苦笑してまたペットボトルに口をつけた。

「それにね」

君島が、嬉しそうな顔で続けた。

「僕を好きじゃないって言つたしね。それで充分」

「僕を好きって言つ人は、たいてい僕の顔が好きなんだ。
違うって反論されてもだめなんだよ。僕がそう思いこんでるから
ね」

あら。私も好きよ。

「だから、好きって言われるだけでもう信用できない。
僕の中味が好きだって言われても信用しない

あなたの中味も好きよ。

「相手に悪いとも思わないしね。
僕を好きだっていう相手は信用しない。
僕がそう決めた」

あら。

浅井は心の言葉を全部飲み込んだ。

「だつて、僕は自分の顔が嫌いなんだ。
その嫌いなものを好きだって言う人と、気が合うはずないよね」

あ。なるほど。

「僕がそう決めた」

笑う君島を見て浅井はまた苦笑した。

それならどうして、信用しない相手と付き合つたりするの。
その質問も飲み込んだ。

君島君には笑つていて欲しい。

特に今は。

思つた以上に複雑な男の子。

同情なんかしないけど、余計なことで傷付いて欲しくはない。
こんなにも綺麗な笑顔を持つているんだから。

・・・・つて言つと、嫌われるのね。
気をつけよう。

「もつすっかり寒いね。枯葉も落ちちゃつてゐるね。
ね、ちょっと早いけど」飯食べに行かない？鍋

君島がベンチを立ち上がつて言つた。

「鍋？」

「寒いから」

「鍋ねえ。そういうえば会社の近くに美味しいところがあるわ」
「そこ行く。決まり。つて、浅井さんつてどんな会社に勤めてるの
？」

「え？あれ？言つてなかつた？つて、そういうえば君島君だつてどこの
大学？」

「あれ？言わなかつた？大学じゃないよ。看護学校

「あら！看護師さん？」

「の卵」

「えー！初めて聞いた！」

「浅井さんは？」

「二人で歩きながら、あそこのコンビニの向かいのビル5階にある
オフィス、と指差す。

そのコンビニで右に曲がつて5分歩くと、美味しい鍋屋さん。

「こっちの方は来たことないよ。穴場だね！」

「オフィス街だもんね。あんまり知られてないかもね」
「そうかあー！じゃあ今度友達に教えよう！」

「ん？数少ない友達に？」

「そうそう。」

一人で笑いながら引き戸を開けて、元気な声に迎えられた。

夕方近くに大沢はチャイムで起こされた。

「一日酔いの最悪の気分でぐらつく頭を右手で押さえながら玄関まで出ると同僚の田村だった。

「お。悪い。電話しても出ないから直接来た。仕事手伝ってくれ」
「ばか言うな。見てわかるだろうが。仕事どころかまともに歩けもしないんだぞ、と口に出すことすらできないのに、田村は勝手に部屋に上がりこみ、大沢の仕事着一式と道具、作業靴まで取り揃えて、大沢を拉致した。

現場までのトラックで作業工程を聞かされたがまったく頭に入らない。

現場では体が覚えている作業を体が勝手にこなしていた。
大沢はただただ倒れなければそれでいいと、それだけを考えていた。

無事作業が終了して、お疲れさん、と田村に背中を叩かれて、戻しそうになり堪えた。

「晩飯おごるわ。迎え酒もアリだぞ！」
聞きたくない。

「つうか昨日、どんだけ飲んだの？」

「トラックに戻り、田村が訊いた。大沢は返事もできない。

「つうかお前さ、本社の浅井さんと付き合ってんだろう？それをさ、浅井さんも来てる一二次会で栗尾お持ち帰りってどうよ？」

「うう、なんでお前が俺と浅井さんのこと知つてんの？と、気持ち悪さに耐えながらも疑問には思つた。

浅井ももちろん誰にも発表していないが、大沢もまだ誰にも言つていなかつた。

なにしろ先週一度データしただけの間柄で、クリスマスの約束をとりつけただけの間柄で、しかも今のこの状況を思えば先に続けられる自信もない。

だから大沢は返事をしなかった。

トラックを本社の駐車場に停め、歩きながら田村が続けた。

「だいたいあのおばちゃん、若いのが好きなんだって？」

「何でお前がそれに引っかかるってんのか不思議だけどよ」

「あ？・・・なんだそれ？」

「てかお前だつて若いってだけでおばちゃんに目つけられたんだろ

？」

「・・・それ、誰に聞いたんだ？」

痛みは引いたがぼんやりする頭を支えて、大沢はむかついている胃がさらにむかついてくる気がした。

「お前つてそんな趣味だったつけ？意外だよな。面食いのくせにさ」
笑いながら田村が店の引き戸を勢いよく開いた。

「ほほ同時に、あつ！と甲高い声が聞こえた。

「あつ！すいません、」

ちょうど中から客が出ててくるところで、田村がぶつかりそうになつたのを謝つた。

「いえ、大丈夫です」

その声にも聞き覚えがあつた。

しかし大沢はそれよりも、その後ろに立つ女性の姿に息を飲んだ。

浅井さん。

支払いをどつちが持つかでちょっともめて、結局折半に決まり、浅井がカードで決済するので君島が自分の支払い分を浅井に渡した。だから君島が先に出口にむかい、浅井はカードや財布をバッグにしまつたりしていて、君島が声を上げた時にちらりと状況を確認してまた目をバッグに戻した。

「こんばんわ」

君島の挨拶が聞こえた。

おや。知り合いだったのね。とまだ浅井は気付かなかつた。

それから顔を上げ、正面に立つ男性が、業社の社員の田村だと気付いた。

そして君島が挨拶をしたのはその後ろに向かつてだつたとやつと気付いた。

「浅井さん」

その大沢が、名前を呼んだ。

「え？！」

田村が驚いて大沢を振り向いて、そして浅井をまた見て、また大沢を振り向いた。

田村が、メガネを外して髪をほどいて私服を着ている浅井を見るのは初めてだつた。

「え！ 浅井さん・・・？！」

名前を呼んだものの、大沢はその後を続けることができない。

昨日知った様々なことを整理できずに、体調極悪の中仕事をしてきたのに、昨日はバー・テンを追いかけて、今日は小僧か？

どうして休日に、小僧に会つてゐるんだ？

会うなら俺だろ？

そして俺ですら、不足のはずだろ？

あんな強烈な過去を持つていて、今あなたがしていることは何だ？

命懸けで彼に守られて、今あなたがしていることは何だ？

思考がめちゃくちゃな方向に飛びまくりまとまらず、大沢は言葉を探せない。

その間、田村一人が声をひっくりかえして驚いていた。

うわ！浅井さんっすか？本当に？

いやー、びっくりしました！全然変わるもんっすねー！
てか、会社もこれで来てくださいよー！だとなあ！俺たちもなあ！
つて、違うか。大沢はあれだもんな。

てかお前、本気だつたんだな。

焦つているのか興奮しているのかわからない田村のおかしな日本語の、最後だけ大沢は汲み取つた。

本気だつた。

そう、俺、本気だつた。
あなたにもそう言った。
あなたもそれを受けたはずだ。
過去なんか知らない。

それで、

これは誰だよ？

大沢がいきなり君島に掴みかかった。

「大沢君！」

「大沢！」

浅井と田村の二人が同時に叫んだ。

胸倉を掴まれた君島が店外へと引きずり出される。

「その顔で」

大沢を見上げる君島の顔が、少女のように可愛い。

今の大沢にはそれすら憎い。

「その女みたいな顔で、油断させるのが手か？」

まだ一日酔いからはつきりと覚めない大沢は、この状況にも冷静な視線で見上げる君島を疑問には思わなかつた。

そしてたつた今大沢が口にした言葉は、君島への最大の侮辱だった。

二人の体格差を考えれば、これはただの卑怯なリンチだと、浅井と田村は慌てて止めようとした。

大沢が右肘を後ろに引いて、拳を君島の顔目掛けて突き出した。

君島はわずかに首を傾げてそれを避け、そして空振りしたその右腕を掴んで上に持ち上げ、大沢の胴を伸ばしてから、軽くステップを踏むように足を合わせ、右ひざを大沢の腹にぶちこんだ。

大沢が、うぐ、と唸つた。

君島は、掴んでいた大沢の右腕を自分の後ろに引いて、大沢を道路にどさりと倒した。

わずかの間の出来事で、浅井も田村も呼吸を止めていた。

ほんの瞬間だった。

一切無駄のないなめらかな一連の動きに、まるで大沢は練習相手かのように、まるで決まった手順を踏んでいるだけのようだ、正確に捉えられた。

ふわりと膨らんだキャメルのコート。

素直なショートヘアを揺らして、君島が肩越しに浅井を振り向き、微笑んで挨拶をした。

「ごめんな、浅井さん。」これで最後にしよう。
本はね、月曜日にそこのコンビニに持ってくるよ。お昼なさい
よね？」

キャメルのコートを翻して君島が走り去った。

「君島君！」

呼んでも振り向かない。
追いかけようとした。

しかし、と大沢を振り向く。

大沢は道路に座り込んでいて、田村に背中をさすらわれている。
田村が言った。

「今こいつ、かつこわるいんで見ないでやってもらえますか
でも、と浅井が言うと、田村が首を振つて続けた。
「俺が送つて行くんで、大丈夫です」

「じゃあ、お願ひします」

そう言つて、浅井も歩き出した。

そして走り出した。

君島に追いつけるんぢやないかと駅まで走つた。
寒い冬の夜なのに、全力疾走したせいで汗が落ちる。
息を弾ませてホームを全部回つた。
どこにもいなかつた。

大丈夫。

大丈夫。

月曜日に会いに来るつて言つてた。

その時にまたきちんと話せばいい。せつとわかつてもうえり。

だつて私は、

大沢君を許せない氣がする。

浅井は荒い息が治まるまで、駅のホームで立っていた。

翌日浅井は一日中家にいた。

誰にも電話をしなかった。誰からも電話は来なかった。
大沢からも君島からも、連絡はなかった。

一晩寝て起きて考えても、大沢が悪いとしか思えない。
そして君島を傷つけた罪悪感が募る。

自分と大沢で君島を傷つけた。

君島は昨日、それでなくとも充分傷付いていたというのに。

明日は謝ろう。

精一杯謝ろう。

許してもらえるまで謝ろう。

大沢も一日中家にいた。
飲まず食わずで。

ベッドの上で呻きながら、丸一日後悔していた。
何もかも後悔していた。

どこから後悔していいのかわからぬくらい後悔していた。

あんな醜態を晒したことも初めてだった。

肉体労働をしていることもあり、自分の体力には自信があった。
体も大きい方だ。

けんかで負けたこともないし、そうけんかを仕掛けられることも
なかつた。

それをおんな、女みたいに小さこやつにあつたつ。
浅井の前で。田村の前で。

ここに来るまでの車中で田村は無言だった。
別れの挨拶も一言だった。
つまり

月曜日には知られ渡つてゐるだらう。
浅井と大沢のことを知る者全てに。
分つてはいたが、口止めはしなかつた。
しても無駄だからだ。
口止めした、といつことも知られ渡るのがオチだ。

どこから後悔するつて、
あの日チビにナンパされた浅井さんになつたところからだ。

キュー・ピッシュなんてとんでもない。
あいつが疫病神だつたんだ。

キャメルのコートを着た、悪魔だ。

大沢の予想通り、土曜日の一件は週始めの事務所の一大ニュースになつた。

上司も含めた浅井以外の全員が小声で噂している。なにしろホットな話題であり、数時間後に間違いなく展開するのだ。

浅井以外全員そわそわしている。

そしてそれに気付かないのも、浅井一人だつた。

周囲に目を配る余裕がない。仕事も手につかない。君島君を、どう引きとめよう。何を言おう。

キーボードに両手を置いて、その間を凝視して、仕事をしている振りをして固まっている。

まず謝らなきゃ。

浅井はずつとそればかり考えている。

脣近くに、田村が来た。大沢はいない。

浅井が気付いて会釈をすると、田村が意味ありげな笑みを浮かべた。

浅井はそれを無視した。

嫌な気持ちがした。

まるで秘密を共有しているかのようなもつと言えば、共犯意識を強制されているような

笑えるわけがない。

あんなふうに君島君を傷つけておいて。

私は大沢君も許してないのよ。
自分も許せない。

やはり浅井は、自分の両手の間を凝視していた。

そして正午になり、浅井が席を立つてエレベーターに向かつた。
普段なら向かいのコンビニに行く社員が必ず数名いるのだが、今日は誰も動かない。

全員窓からそのコンビニを見下ろすつもりだからだ。

浅井は一人でエレベーターの扉を閉めた。
その不自然さにも浅井は気付かなかつた。

横断歩道を渡りコンビニの前で立ち止まる浅井を、会社のビル横から大沢が見ていた。

車で到着したばかりだが、田村の車があるのをみて事務所に上がるのを止めた。

田村の車がなくとも上がるつもりはなかつた。どうせ噂は広まつているだろうから。

しかしここで男を待つ浅井の姿を見るのも辛い。
それでも来ずにはいられなかつた。

「いやー、俺、あんなにきれいな人だったとは気付かなかつたよー。」

「浅井がいなくなり、田村が大声で得意気に話し始めた。

「でもキレイって言つてもなんていうか、やつぱりねえ？」

「反論にならない反論で栗尾が話題を遮る。

「だったら普段からちゃんとしろつていうのよね！」

しかしそれを無視してさらに話題が沸騰する。

「そうよね！私も驚いたもの！大沢君がアサイサンって呼ばなきゃ氣付かなかつたわ！」

大沢と浅井のデートを目撃した事務員。

「そうそうそれとーあの女の子みたいな男の子！びっくりするぐらい可愛いの！」

浅井が会社帰りに君島と喫茶店に行つた後をつけた事務員。

「それ。その超可愛い男に、大沢は無様に投げられたってわけさ」「信じられない！っていうか意味わかんない！」

「俺もさ、超可愛いから男だって気付かなくて、それなのに大沢が胸倉掴むからさ、必死で止めようとしたわけよー！」

微妙に田村の演出が加わる。

「それがさ、確かに女みたいな顔して、つて大沢が言つたんだよ。それで俺びっくりして、だつて女だとばかり思つてたからさ、それでびっくりしてるスキに、大沢があつさり投げられてたんだよな」

「あら・・・すごく可愛いわ」

「ねー。あんな可愛い顔して、あんなに大きい大沢くんを投げるほど強いのね」

「紹介して欲しいわ」

「何言つてんの？あんたたち。だいたいどういう付き合いかわからん

ないじゃない？」

栗尾が何が何でも話題を切り裂こうとする。

「まあ、その女みたいな男がこれから来るんだからさ。どういう付き合いがわかるんじゃないの？」

田村が窓を指差した。

「つか、男だってだけで問題だけどな」

昼休みは0時から1時まで。

この時間内に君島君を説得できるだろうか。

浅井はタバコの自販機の横で俯いて考えていた。

前の大通りの往来で、太い排気音に気付いた。

その音を覚えていたわけではないのだが、なんとなく目を上げた。

そして目に入ったのは、ライムグリーンの大型バイク。

あのヘルメット、あのブルゾン。

バーテンだ。

バーテンがバイクで通り過ぎていく。

その偉そうで自由そうな姿を見て、凝り固まっていた悩みが溶けた気がした。

『俺が不愉快だつたから

ネコのことをバーテンはそう言つた。

そして私もシンプルに強くなろうと思つたはずだ。そうだ。

私は君島君のともだちになると呟つた。

彼女たちの一員じゃなく、ともだちになると云つた。

彼女たちの一員だつたら別れることもあるだろひうけい、私はともだちなのよ。

あなたのともだちになる資格だつて充分だつたじやない。

うん。また、絶対会う。

絶対ともだちはやめないわ。

浅井は何度も頷いた。

その姿に勵まされながら見つめていると、バイクが交差点の右折レーンで止まった。

おや？この前は直進したと思ったけど？

といぶかしんでいるうちに、バイクはワインカーの方向に曲がった。

そして右折するのかと思いきや、ロターンしてガードレールの切れ目からコンビニの駐車場に入ってきた。

あら？ここに用事？

あら。なんて偶然。

そして、はっと息を飲んだ。

バーテンのあのシンプルで強い論理で君島君を説得してもらえた
いだろうか。

いや、無理だよね。

と一瞬で却下した。

だいたいどうやって君島君に、私のことを覚えていないかもしけ
ないバーテンを紹介するのだ。

バカだなあ私。

いいんだ。大丈夫だ。ともだちなんだから。

と繰り返し考えて浅井は自分に暗示を掛ける。

それにしても遅い。休み時間がなくなってしまう。

説得する時間がどんどん短くなる。

そしてふと気付いた。

もしかしてそれを狙つてたりして。
ぎりぎりに来て、じゃあねつて。
そしてそれつきり。

そんな・・・・・。ビリじょつ。

どうする?バー・テン君なりビリじょつしますか?
浅井はバイクを見ながらずつと悩んだ。

「え?ちょっと、あれ、ジガーレイのバー・テン?」

「ええええ!――!なんで?え?」

「浅井さん、すごくない?!!」

「バカじゃないの!――この通学路でしょ――の前だつてこの時間通つたじゃないの!」

栗尾が水を差し続けているが、一向に熱は冷めない。
「だつて二次会の時、浅井さん外でしゃべつてたよね?」
「ね~!――見た見た!――!バイクのところでね~!」
「それで大沢君が・・・・・」
その後は栗尾に遠慮して続けない。

最後は田村。

「大沢いなくてよかつたよ。あいつこんなの見たら・・・・・」

その大沢は、道を挟んだ真向かいで見ている。

駐車場の車の枠内にバイクを止め、エンジンを切つてサイドスタンドを出した。

明るい日中に間近で見ると、巨大なバイクだ。

乗っているバーテンも巨大だ。

ヘルメットを脱いでグローブも脱いだ後に、浅井と目が合つた。バーテンも先週末の客を覚えていたようで、軽く会釈をした。

あら。覚えててくれたんだ。じゃ、もしかしたら今君島君が来たら案外助け舟を出してくれたり?

・・・・しないよねえ。

と、浅井も軽く会釈を返した。

それにしても遅い。

と浅井がきょろきょろと視線を動かした。

来るんだろうか。来るよね。

君島君が、来るって言つたんだから。

来るよね、君島君。

浅井はじりじりと待つてゐる。

バーテンもぐるりと駐車場を見回した。

一周見回してから、もう一度浅井を向いた。

じりじりしながらも、視線に気付いて浅井もバーテンを見上げた。

それから、バーテンが浅井に訊いた。

「浅井さんという方、ご存知ないですか？」

浅井は少し口を開けて、硬直した。

返事がないのでバー・テンが首を傾げて
「すいません。俺も顔知らないので・・・」
と、首の後ろを搔いた。

あ、もしかしたらバーに何か忘れ物でもした？私の名前入りのもの

を？

とにかく慌てて名乗った。

「私は、浅井です。あの、何か、」

今度はバー・テンが硬直した。

え？何？と浅井も硬直に付き合つた。

そしてバー・テンは少し眉をひそめて、ブルゾンの内ポケットから
袋を取り出した。

「君島から本預かつて来ました。
あなたにお返しすればいいんですね？」

バーテンは、文庫本を差し出した。

浅井はまた口を開けて硬直した。

「ちょっと……あれ……」

「全然偶然じゃないじゃない！」

「なに？ 浅井さん！ なんなの？！」

「どういうこと？ なんでバーテンまで？！」

「何か渡してるし？！」

「だから言つてるじゃないの！？」

「ここまでくると水を掛けているのか油を注いでいるのか栗尾にもわからない。」

「若い子が好きなの！ 若ければなんでもいいのよ！」

真向かいで眺めている大沢も硬直していた。
バーテンだ。

俺の大嫌いなバーテンが浅井さんと話している。
あのチビと待ち合わせのはずなのに。
あのチビでも許せないのに。
どうしてバーテンだ。
どうしてあの何もかも持っているバーテンだ。

「君島、君は？」

驚きすぎて、疑問が多くすぎて、浅井はやっとそれだけを口にした。

「三日酔いで潰れます」

バーテンが即答した。

「三日……」

浅井が視線をバーテンから外して、三日前を思い出す。

土曜日。土曜日から。

私と別れたあの後から飲み続けた？

「だってあの子、お酒弱いじゃないの・・・」

そして、初めて会った日も思い出した。

あの子、たつた力クテル2杯であんなに酔ったのよ。弱いくせにここまで来れないほど飲んだの？

そんなにも私はあの子を傷つけたんだ。

それを謝る機会も、もうないんだ。

浅井は俯いた。

せっかくできたともだちを、失った。

「うん。弱いんで量は飲んでないでしょう。まだ生きてますから早く死なないでしょ？」

頭の上から、低い掠れた声が降つて來た。

え？と顔を上げると、バーテンがまだ本を突き出したまま浅井を見下ろしている。

「えっと・・・あなたは、君島君のともだち？」

「いや。知り合い」

ともだちじゃない？知り合い？

「だって、この本わざわざ代わりに届けにきてくれたんでしょう？」

「一千円で引き受けた」

思わず吹きだした。

文庫本2冊配達で2千円なんて！高すぎる！

笑い出した浅井を見て、バーテンが顔を顰めた。それを見て浅井が更に笑った。

笑つて、体の中の濁んだ気分が吐き出されたような気がした。

そして田の前の、嫌そうな顔で見下ろしているバーテンに、希望を見出した。

「君島君のところに連れて行って
は？」

「これを逃せば、一生君島君に会えなくなるかも知れない。

「中川区でしょ？バイクで20分も掛からないわよね？」
「嫌です」
「5千円出す」
「嫌です」
「1万円」
「・・・」
「決まり！」

ともだちでもないといつ君島君の頼みを2千円で受けたのなら、他人の私もお金で運んでくれるだらうと、浅井は読んだ。

「あなた、スカートじゃないですか」
「大丈夫よ。脚には自信あるから」
「なんですかそれ」

バーテンが折れつつある。拒絶理由が弱い。
追い討ちになるのかどうか、浅井が言葉を続ける。

「私も時間がないから、ちょっと行ってすぐ戻つてもらえばそれでいいの」

バーテンがまだ躊躇つている。

「嫌だなあ・・・。タンデム嫌いなのに・・・。
「タンデムって何？」

バーテンがさらに眉間のシワを深くした。
段々それが面白くなってきた。

「荷物だと思って」

「荷物の方がマシだ」

多分、落ちた。

だから浅井が笑つて催促した。

「早くしないとこれ、倒しちゃうよ」

足でバイクのタイヤを倒す仕草をしてみせた。

やつとバーテンがバイクの準備を始める。

後部のステップを両方倒して、浅井にヘルメットとグローブを渡した。

「私が被るの？」

「飛ばしますから」

ふうん。とヘルメットを被り、グローブを嵌めると、バーテンは既にバイクの方向を変えてエンジンを掛け、シートに跨つて浅井が乗り込むのを待つていた。

乗せて、と簡単に言つてみたものの、足の掛け方から難しいわ、と浅井は悩んだ。

右手でこつちのグリップを掴んで、左足をこつちのステップに乗せてください。

バーテンが親切に説明してくれた。

そこまでは親切だつたが、走行中は俺に掴まらないでください、自力で姿勢を維持して下さい、と指示された。

バーテンが一度スロットルを吹かした。そしてギアを落とし、右

を見ながら、今度は慎重にスロットルを開け、重さと速さを確かめながら駐車場から通りに向かう。

そしてあつと言つ間に大通りに合流し、車の大群に飲み込まれた。

「嘘

「すこ」

「まじ?」

コンビニ向かいのビル4階窓には、全社員の顔が張り付いている。
そして全員、片言の感想を述べた後は、言葉がない。

あまりに衝撃的だった。浅井はそんなキャラクターではないはずだったのだ。

コンビニで男と待ち合わせという段階から既に衝撃的な話ではあったのだが。

何より、美しい絵だった。

少し長めのバーテンの髪がなびき、自慢するだけある浅井の形のいい脚が膝上からむき出しで、戦闘的なフォルムの緑の大型バイクが、クルージングしている車たちの流れをかき分けて飛んでいった。

まるでドラマか映画のワンシーン。

たちまち消え去ったからなおさら強くそう感じじる。

こんな展開になるとは想像もしていなかつた。

そして今後、どう展開するのかも全く読めない。

こんなにも身近に、突然こんなドラマが発生して、誰もが浮き足立っていた。

そしてその美しい絵を、目の前で見せ付けられた大沢も呆然とし

ていた。

一昨日君島に蹴られた以上の衝撃だ。

なぜなら、浅井からバイクに乗ったからだ。

浅井がバー・テնに、バイクに乗せると頼んだ。

バー・テնは断つた。何度も断つた。最後まで躊躇つた。

浅井がむりやりバー・テնのバイクに乗つたのだ。

大沢はそれを、道路を挟んだ向かいから見ていた。

ビルの4階からは、きっとみんなも見ていただろう。何一つ公表していないのに、ほとんどのことを知つてゐる社員たちもきっと驚いてゐるだろう。

大沢と付き合つてゐるらしい浅井が、大沢を投げ飛ばした男と待ち合わせしてゐるはずなのに、ほとんど知り合つたばかりのバー・テンのバイクに乗つて走り去つた。

いいツラの皮だ。

大沢は、鼻で笑つた。

なんだよこれ？バカにしゃがつて。

踵を返して車に戻る。

来るんじやなかつた。いや、正体がわかつただけマシかもな。

浅井さんがそういう女だとは思つてなかつた。

あれが正体なら俺の方からお断りだ。

乱暴に車のドアを閉めて、急発進した。

タンデムシートとは言え、バイクには生まれて初めて乗る。本当にめちゃくちゃ飛ばしている。容赦ない。

自分で体勢を維持、なんて不可能だ。

シート横についてるグリップとかいう取っ手を掴んでいても、絶対振り落とされる。

とかく、振り落とす気じやないだろ？

死ぬ。風圧に耐えられない。落ちる。

ごめん。

と、結局浅井はバーテンのブルゾンの脇を握った。

その途端少しあくまでスピードが緩み、反動でうつかりバーテンの背中に頭突きをした。

その後は比較的速度を落としたようだ。

10分ほどで学生アパートらしき小さな建物の前に到着した。バーテンが肩越しに浅井を睨み、降りて下さい、と言った。

そう言われても、ガチガチに体に力を入れていたので簡単には体が動かない。

「ごめん」とヘルメットの中で呟いて、やはりバーテンの肩に掴まり、よれよれと地面に降りた。

ああ、すごかつたなあ・・・。

怖かつたけど結構爽快なものだわ。うん。いいストレス解消になりました。

と冷静なつもりでヘルメットを外そうとして、グローブを嵌めたままだったことに気付き、まずグローブ脱がなきや、と笑つて片方外すと、その手が震えていた。

その手を見て、さらに笑えた。

すごい体験だわ。バー・テン君のおかげで。とバー・テンを見上げてから思い出した。

「あー君島君だつた！」

完全に用件を忘れていた。

「206。ドア開いてるので行つてください」

「え？」

開いてる？ なんで？ で、あなたは？ 行かないの？ と訊く前に、

「俺はここでたばこ吸つてます。時間ないですよ」

と言われ、改めて自分の用件を思い出し、バー・テンにヘルメットとグローブを渡して走り出した。

一応チャイムを鳴らしてからドアを開け、君島君へと中に呼びかけた。

返事がない。

勝手に靴を脱いで上がり、1Kの奥のドアを開けた。

きれいに片付いた部屋の、右側半分を占めるベッドに君島君はつづ伏せて寝ていた。

「君島君」

もう一度呼ぶと、君島が顔を上げた。

また目と鼻を赤くしてぼんやりしている。

次の瞬間その目をバチッと開き、ガバッと上半身を起した。

「浅井・・・さん」

むくんでまぶたも腫れて子供のよつなその顔に、Tシャツから覗くアンバランスな太い筋肉質の腕。

「え？ あれ？ なんで？ 僕、」

その高い声からは想像もつかない土曜日の獣のよつな姿。

「なんで、来たの？」

でもやはり寝起きの子供のよつな、今にも泣きそつた情けない君

島の顔。

「返しに来るつて、言つたじやな」

腹が立つてきた。

「待つてたのよ。ともだちだつて、言つたわよね？」

腹が立つて、涙が出そうだ。

「言いたいことだつて訊きたいことだつてあるのよ。それなのこ、来てくれないなんて

涙が出そうだ。

浅井はそれ以上続けられずに俯いた。

「だつてさあ・・・・・」

君島が呟いたので浅井も顔を上げると、君島はとっくにサメザメと泣いていた。

「僕だつて好きでこんな顔なんじやないのこ

あ。

と、浅井の涙が引っ込んだ。

「僕のせいじやないのこ

君島の目からぼろぼろと涙が落ちる。

「こつまでもこの顔で差別されるんだ

美しい泣き顔なので、悲しさが倍増されていく仮がある。

「いつでも、ばかにされるんだ」

「こんなにも美しい子に涙を流させるなんて・・・。

浅井もつゝ慰めようとして、呑呑くまで言いかけた。

それと同時に、低い掠れ声が響いた。

「まだ言つてんのか。いい加減正氣に戻れ。鬱陶しい」

それを聞いて君島が枕に顔を埋め、一層高い泣き声で言った。

「ひどいでしょう。全然いたわってくれないんだよ。」
「こんなに友達が泣いてんのに!」

「ともだちじゃない」

「こんなことまで言つんだよ。ひとでなし!」

「なんとでも言え。俺は充分迷惑をかけられた。もつたくさんだ」

え・・・それはひどいんじゃないですか?

浅井はざきむきして、いつの間にか後ろに立っていたバーテンを覗き見た。

バー・テンは冷徹な表情で君島を見下ろしている。見下ろされている君島が、涙をためて真っ赤な目を浅井に向かた。「ひどいと思わない?」

思う・・・・。と思いながら浅井が再びバー・テンを見上げた。そしてバー・テンが表情を変えずに、口を開いた。

「昨日もバイト明けに実験の続きがあつて、部屋に戻ったのが朝方。風呂入つて寝ようとしたら、いいつから酔い潰れてるから迎えに来いって電話がきて、まっすぐ立つこともできないこいつをバイクでここまで連れてきた。

来たもののいは足の踏み場もないくらいの汚れ様で、さつきまでかかってここまで掃除した。

俺は一睡もしていないんだ。これから学校だしな」

・・・・すいー！君島君、それはかなりの迷惑かも・・・・！
ていうか、そこまでするんだ？バー・テン君・・・・

「うー・・・・。思い出したら気持ち悪い・・・・」
君島が再びベッドに倒れた。

「まだアルコールが抜けてないから絡むんです。ほつとけばいいですよ」

そう言いながらバー・テンは君島に田もくれずに勝手にクローゼットに手をかけた。

「君島。ヘルメット借りるぞ」

扉を開くと、ぱさぱさと物が落ちてくる音がした。

バー・テンがそれを見下ろして言った。

「お前、クローゼットできのこ栽培してんのか」

「ヘルメット……は、洗面所だよ……。なんでそんなの……」

「洗面所？」

バー・テンがさらに眉間にシワを深くして君島を見下ろした。

「うん。いつでもきれいにしてる……」

あほか、とバー・テンがつぶやきながら洗面所に向かつた。

「ヘルメットって……。なんですか？」

君島が訊いたが、バー・テンはすでにいない。

「なんでかな……」

君島が浅井を見上げた。

「多分、私用だと思つ」

浅井の返事に、君島がしばらく反応しなかつた。

バー・テンが黄色いヘルメットをぶら下げて戻ってきた。
「あんな湿度の高いところに置いておくと内装がやられるだ。どうでもいいけど」

「ヘルメット……どうすんの？」

君島がぽんやつとバー・テンに訊いた。

「借りる」

「だから、なん……あつ……」

また君島がガバッと上半身を起こした。

「バイクで？ 浩一の後ろに乗ってきたの？ 浅井さん？」

「うん。 そう言わなかつた？」

「言つてない！ 聞いてない！ え？ 乗せたの？ 浩一が？」

君島が驚いてバー・テンに顔を向けた。

バー・テンは指を一本立てた。

「往復一円で請けた」

「一万……って、お金？！お金取るの？浅井さんから？…やめよ浩ー！なんてことするんだよ！」

君島が表情を一変させて、バーテンに怒鳴った。

「俺がボランティアでこんなことするわけないだろ」

バーテンは表情を変えず、低い声で言い捨てた。

君島は次に浅井を向いて、同じ調子で言つた。

「だって、浅井さんだって、浩ーのこと知らないんでしょう？それなのになんで、」

浅井もバーテンを見習つて、冷静に答えた。

「知らないからお金で乗せてもらつたのよ」

「だつてそんな、僕が行くつて言つたのに、」

また君島の表情が変わる。今度は自責に眉をひそめた。浅井が少し笑つた。」の顔を利用しようつと思いついた。

「あ、そうね。この一万円の出費は君島君のせいだわね」

君島が口を噤んだ。

「一万円分、君島君は私に負い田があるのよ。いい？」

「負い田つて……？」

「あのね。あなたから勝手にサヨナラなんて言わせないわ。いい？」

「・・・・・」

「だって私のせいじゃないでしょ？私が悪いんじゃないもの。それなのに勝手な」とわれちや困るわ。わかつた？」

「・・・・・」

「また電話するし、とらなかつたらここに来るから」

顎を上げて、笑顔で君島を見下ろした。

君島は唇を尖らせて俯いた。

「うん。これで用は済んだわ」

浅井が笑つて見上げると、バーテンが頷いて黄色のヘルメットを渡した。

「君島君、これ借りるね」

「浅井さん・・・」

君島が呟いた。

「バイクの後ろでも気をつけて乗つてね」「バーテンが振り向かずにまた言い捨てた。

「そのためのヘルメットだろ」

また鍵を掛けずに部屋を出て、浅井はバー・テンの後ろを歩きながら、今の出来事に満足していた。

「コンビニで説得よりもむしろ効果的だつたわ。自宅に押し掛けて恩を着せるなんて考えててもいなかつた。

全部バー・テン君のおかげね。バー・テン君と君島君が知り合いだつた偶然のおかげだわ。

でもどんな知り合いのかしら……? と、浅井は黄色いヘルメットに目を落とした。

「あ、そうか。あなたと君島君つて、バイク仲間なの?」

「え? いや、あいつはバイクどころか何の免許も持つてませんよ」

バー・テンが振り向いて答えた。

「だつてこのヘルメットは……?」

「俺のバイクに乗るために買つたらしいですけどね

「じゃ、やっぱり仲いいんじゃないの?」

「いや、一回も乗せたことないです。ああ、昨日初めて乗せた」

階段を下りたので、浅井がバー・テンを見上げて言った。

「昨日……? 君島君酔いつぶれてたつて」

「はい。電話が途中で切れたから死んだのかと思つて死体を見に行つたら生きて転がつてたんです」

浅井は、吹き出した。

「行かなきやよかつた」

「でも、」

浅井が笑いながらフォローした。

「でもおかげで今日は1万2千円稼げたじゃない」

「ああ、そういう考え方もあるか」

浅井はさらに笑つた。そしてポケットから財布を出して札を差し

出した。

「本当に助かつた！ありがとう」
バー・テンが、一万円札を見下ろして、受け取ると同時に言った。

「領収書要りますか？」

おかしな子だ、と浅井は笑い続けていたが、
「あ、そうか。それは君島君の弱味の証拠になるわよね。うん。頂
戴」

と答えた。

多分これつきりの、バー・テンのタンデムとかいうツーリングの記
念だし、君島のための散財の証拠なのだから君島に会えるフリーチ
ケットのようにも思えた。

楽しくて浅井は笑顔でバー・テンを見上げると、バー・テンは顔をし
かめていた。

言つてはみたものの、紙もペンもないのだな？と推測してさうに
楽しくなつた。

「今度会うときに頂戴。またここで会うかも知れないし、バーで会
うかも知れないしね」

バー・テンがさらに眉間にしわを深くして顔を背けた。

それを見て浅井はさらに愉快になつてしまつた。

「浩一って名前なのね。苗字は？」

バー・テンは答えずにヘルメットを被りバイクにまたがつた。そし
て浅井が乗り込むのを待つている。

浅井も君島の黄色のヘルメットを被つて、最初よりは上手くタン
デムシートに座つた。

そしてバー・テンも、帰りは来る時よりも穏やかな走行になつてい
た。

会社に到着してヘルメットを脱いで渡しバー・テンにお礼を言つた

が、バイクのエンジンも切らずヘルメットも脱がないバーテンには聞こえていないようだ。

だから大声で言った。

「苗字教えてくれないと私も浩一って呼ぶわよー。」

バーテンは眉間にシワシワにしたまま、はっきりと「原田」と答えた。

「ありがとー原田君ーまたねー領収書忘れないでねー。」

原田は返事もせずに動き出した。

あつという間に交差点をヒターンして走り去ったが、浅井はその姿が視界から消えるまで見送った。

エレベーターから降りて浅井が事務所に入ろうとした時に、廊下で田村に呼び止められた。困ったような怒ったような顔をしている。「さつきのあれ、・・・大沢にその、あいつこの前のことなどでさえ落ち込んでるつてのにさ、今度別の男のバイクに乗るつて、」ぐだぐだとはつきりしない田村にいらついて、浅井がはっきり言った。

「この前のことでも今日のことでも、大沢君のせいよ」

田村が絶句する。

「全部大沢君が悪いの。文句言つてゐのならそんなこともわからないのつて伝えておいて」

言い捨てて浅井が踵を返した。

田村には何がなんだかわからないが、始まつたばかりのこの二人が早くも危機だということは分かつた。

さあ、どうしようか。と跳ねるように階段を下りて自分の車に向

かつた。

パチンコ屋の駐車場に車を停めて、大沢はハンドルに顔を伏せていた。いくら頭を振つてもあの残像が焼きついて消えない。もうたくさんだ。

女に不自由したことのない大沢が、ここまで恥をかかされたことは初めてだ。そのことだけで腹が立つて仕方がない。そんな女じゃないはずの浅井が大沢が告白してからこんな女になったのだとしたら、見抜けなかつた自分がバカだ。

ああ・・・うんざりだ！

しばらく運転席でぐずぐずしていると、携帯が鳴った。会社で持たされているものだ。無視するわけにはいかない。

「はい。大沢です」

『おお！俺！田村！』

「ああ」

『今日飲みにいこうぜ！』

通話を切つた。

田村はあの時本社事務所にいて、浅井がバイクに乗るのを恐らく事務所内の全員と見ていたはずだ。

俺を慰めるつもりか笑いものにするつもりか知らないけど、冗談じゃない。

電話を助手席に放り出した。

直後にまた鳴り出した。

しばらく鳴らした後で渋々取つた。

「はい、大沢」

『大沢君？私！栗尾です！今大丈夫？』

これも勘弁してくれ・・・と大沢はシートに背中をもたれかけた。

『今日仕事終わったらちょっと飲みに行かない？いい店見つけたんだけど！』

大沢は返事をしない。

『もうすぐクリスマスじゃない？どこでパーティしようか探してるとこなの！一緒に行つてもられない？』

クリスマス。予定はキャンセルだな。何も決めてないけど。

『どうせ大沢君はクリスマス予定があるんでしょ？その前に一度飲もうよ！』

『いいつ・・・。今日のことに触れない。』

『別に私は大沢君が誰と付き合つても構わないけど、大沢君気にする？』

『それ以上か・・・。それ以上のことを、言つてるのか。』

『それに、大沢君が誰と飲んだって何にも言わないでしょ？』

「ああ。どこに行けばいい？」

『ふふ。行つてくれると思った！定時で終わるから、6時に名駅！忘れていた。元々俺は女とこいついう付き合いをしてきたんだつた。』

「わかった

栗尾が誘つているのは、酒とそれ以上のことだ。そして大沢はそれを受けた。

大沢はずつとそういう付き合いをしてきた。付き合つていない女と関係を持つ。関係を持つてから付き合つ。付き合いを止めてからも機会があればホテルに行く。

それが俺の女との付き合い方だ。浅井さんが言つていた南営業所の事務員とも付き合つてはいながらホテルには行つた。

それなのに浅井さんに限つては、気付けば先に好きになつていて声もかけられずに、あのチビの言つづな今時小学生でもやらない片思い。

気のせいだつたんだろう。何か勘違いしていた。俺はそういうタイプじゃないんだ元々。

だいたい浅井さんのようなタイプと付き合つたことなんか一度もなかつた。

どうかしていた。

まあいい。栗尾とホテルにでも行けば気が晴れるだろう。浅井さんにも知られても構わない。

大沢はシートに座りなおし、キーを回した。

午前中仕事が手につかなかつたせいもあり、定時で終えることができなかつたため事務所に部長と浅井の二人きりになつた。それでも9時前には片付け、挨拶をして帰ろうとしたら呼び止められた。

一 浅井さん、雇間のことなんだけど……

・・・・・ハハーン・・・・・。休憩時間に何をしようと自由ではあるのだけれど、さすがに会社の前のコンビニの1つだから部長も見てたのかと恥ずかしくなった。

「はい、あの、みつともない」とをしました。以後あんなことはし

ません。失礼しました」

「
は?
」

部長が今一歯切れが悪い。

「その、毎間の彼とはお付き合いが？」

いえ、とんでもない

では田村詠依のナレーション

・・・なぜ部長にバレてる・・・?

「やはりそうですか・・・。そうですね・・・。何から話したら

いいか
・
・
・
」

部長が片手で額を押された。

「浅井さんは、以前親しい男性を事故で亡くしてますね？」

・・・・え・・・・・

「実は知っていたんです。履歴書をいただいた段階で、社長があなたの名前を覚えてましてね」

「どうして」

浅井の血の気が引いた。

「事故から何ヶ月も経つてない時期でしたし、社長が大変同情してましてね。即決でした。そして本来あんなことはしないものなんですが、親御さんに連絡をしまして」

浅井が目を閉じた。

「なぜか住所も電話番号も履歴書と違つてましたが、あのあたりに浅井さんは3軒しかないんですね。104で訊いて最初の浅井さんでしたよ」

親とは縁を切つたつもりだった。

「不幸な娘なので就職はなんとかとお願いされました」

「聞きたくない。なぜそんなことを今。

「実はですね。本題は、大沢君なんですが」

頭がガンガンする。

「彼と別れてもいい」とはできませんか?」

何を言われてるのかわからない。

「社長の縁続きの娘さんが大沢君とお付き合ひを始めたいそうなんですよ」

浅井が顔を上げた。

「この不景氣に解雇されるのも大変ですよ。転職に有利な年齢も過ぎてますよね」

脅しですか。しかもこんな前時代的な。いつもの浅井ならそう言うかも知れない。

しかし今はいつもの浅井ではない。

礼をして俯いたまま、会社を出た。

親とは縁を切つたつもりだった。

先輩を亡くした時、浅井がまだそれを受け入れられずにいた時、浅井がまだ入院していたその枕元で、母はまず先輩を罵った。

死んだ人を悪く言つてもしょうがないけどね・・・恥知らずな真似してくれたわ。

嫁入り前の娘を本当に傷物にするとはね。あんたもあんたよ。町中で噂になるわ。恥ずかしい。

浅井はベッドの中で体を固く丸めて自分を抱きしめ、息を止めて耐えた。体が震えていることを知られないうに。

声を失っていた浅井に反論はできなかつた。そうでなくとも、そんなん侮辱を晴らせる言葉なんか知らなかつた。

絶対許さない。浅井は唇を噛んだ。涙が出ないようじ。絶対許さない。許す必要なんかない。

親なんかいらない。先輩だけでいい。
他に、なにもいらない。

そして浅井は退院した後に勝手に大学をやめ、声が戻つてから仕事を探し、決まってから引越しをし、親を捨てたつもりでいた。

親も浅井を捜そうとはしなかった。

それを不審にも思わなかつたのは、浅井が親のことを一切考えていなかつたからだ。

それが、会社からの電話一本のせいだつたと今日知られた。

「不幸な娘なので」

どうしてこの親はこれほど的確に娘の傷を抉るのかと、浅井はぶつけようのない怒りと絶望を同時に噛み締めている。
不幸なものが。私は不幸なんかじやない。そう自分に言い聞かせてやつてきた10年だ。

それなのにこの10年、結局親の監視下にあつたようなものだ。
一人で頑張つてきたつもりなのに。
そして自分の未来も自由ではない。

はあ、と、寒い夜空に白い息を吐いた。

それからやつと、大沢のことを考えた。

まだ始まつたばかりでここまでの障害が入るなんてよほど縁がない。

そう思つしかない。

今ならやめることもそんなに難しくないだろつと浅井は考えた。
お互にお互いのことをまだ何も知らない。それなりこのまま終
えても何も変わらない。

きっと大沢君もそう考へてゐるだろつ。

会わなくなつて、電話もなくなつて、何日経つ？それすら数えていない。なにしろ私はずっと君島君のことばかり考えていたのだ。

このまま終えるのが一番いい。

浅井は俯いて家路についた。

約束の6時前に大沢は駅前のど派手なイルミネーションを眺めながらタバコを吹かしていた。

周囲はカメラや携帯をかざした女子やカップルだらけだ。男一人で立っている場所ではない。

どうして浅井さんと見にこなかつたんだろうな、と大沢はぼんやり考えた。

そして答えがすぐ出た。

たつた一度のデートは場所が違つた上に夜までは一緒にいなかつた。

はあ、と煙を吐いて灰皿でタバコを潰し、見ておけばよかつたなあと後悔した。

多分、もうチャンスはない。

それから首を振つて考え直す。

違うだろ。浅井さんは俺が思つたような人じやなかつたんだ。そうだろ。

そして上を向いた。

どうせあのチビやバーーンなんかと見に来たりするんだろ。俺じゃない。

やない。

しばらくして、高く響くヒールの音が迫つてきた。
来たのか?と大沢が振り向こうとすると、

「わっ!..」

と脅かそうとするような大きな声を発しながら栗尾が腕に抱きひいてきた。

「待たせちゃつた?」

覗き込むような上目遣いで栗尾が訊ねる。

「いや」

と答えながら大沢が腕を解こうとした。中学生かよ、と思いながら。

「まずは食事にしよ！なにが食べたい？」

小首を傾げて栗尾が訊いた。

なんでもいい、と答えながら、こんなもんだよな、と大沢は思つていた。

髪の先から足の先まで手入れの行き届いた、ファッショனにしか興味がないような女子。

今までそういう相手としか付き合つてこなかつたはずなのに、なんで浅井さんに声掛けた？

大沢は首を捻つた。どうかしてたんじやないか？

「なんでもいい？スペイン料理は？」

「スペイン？俺こんな格好だけど入れるのか？」

大沢は赤の派手なブルゾンにカーゴパンツのカジュアルな格好だ。「大丈夫よ。スペイン料理つて言つても家庭料理風だから、堅苦しくないし」

それならそれでいい、と言つと栗尾は大沢の手を引いてイルミネーションで飾られたビルに向かつて歩き出した。

ヒールの音が響く。

そうだ。浅井さんはヒールが低かつた。背が高いせいもあるだろうけど。

それにバッグ。栗尾の小さいバッグには一体何が入れられるんだ。浅井さんでのかいバッグにはきっと仕事に使うものも入つてたんだろう。

そういうタイプとは付き合つたことがなかつたのに、俺は何を考えてたんだ。

「すゞいね、イルミネーション！」

「そうだな」

「そうだよな。こんなもんだよ。」

何度もそう繰り返しながら、大沢は結局浅井のことを考えている。

そして同じように、栗尾も浅井のことを考えていた。浅井の生まれ故郷での調査報告が届いたのだ。

「ねえ、あの人。浅井さん？ 北陸出身なのよね。肌きれいだもんね」
またしても美しい物語を掘り出された。

「結構いいお宅の優秀なお嬢様？ 今どき男女交際禁止だつたのを、隠れて野球部のキャプテンと付き合つてたんですつて！ ホントに見かけによらない人よね！ 今日自慢してたんだけどっ！」

悲劇に終わっているのに、悔しい気持ちが抑えられない。

「自分で言つてたんだけどね！ 本当は東大合格できたんだつて！ わざと落ちてこっちに来たのよ！ 彼が先にこっちの大学に来てたからですつて！」

自分はこれほど劇的な恋愛をしていない。

「聞きたくねえよ。そんな話」

大沢が吐き捨てた。

「そうよね！ どうでもいいわ！ あんなオバサン！」

栗尾が大沢の腕に絡みついた

「せつかぐの食事が不味くなるわ！」

一人でエレベーターの前で立ち止まり、話題を失つて沈黙した。

部屋に戻り、浅井はすぐに風呂を入れて、透き通ったピンクの柔らかい球を放り入れた。

殻が溶ければ湯を白濁させてバラの芳香を放つこの入浴剤には、先輩の思い出が閉じ込められている。

本当はあまり使いたくない。残りが少ないから。そして、先輩を思い出すのが辛いから。

しかし今日は、先輩に頼りたい、甘えたい、今日は先輩に会おう、そんな思いで浅井は家路を急いできた。

先輩が野球部の飲み会でビンゴの景品にもらつて来た入浴剤。

先輩は野球部が忙しかったために、あまり浅井の部屋にはこなかつた。会つ時はほとんど浅井が先輩の部屋を訪れた。

先輩の部屋の風呂は、少し大きめではあったもののとても一人で入れるようなサイズではなかつた。

しかも先輩は大柄だし浅井も長身だ。それなのに、一緒に入ろうと誘つてくる。

いやです、と拒否しても、なんで?とまつたくきょとんとした顔で訊いて来る。

恥ずかしいから、と答えても、何が?とまつたく取り合わず、それ以上の反論が思い浮かばないうちに服を脱がされ浴室に引きずり込まれ、浅井の好きなピンクの球を湯に放り込む。

事故後まだ退院する前、母が一時自宅に戻った時に病室を抜け出し、先輩の部屋に向かつた。

まだ信じられないのと信じたくないの間の現実味の薄い世界に浅

井はいた。

まず自分の部屋に戻り先輩の部屋の合鍵を持つて自転車で走った。やはり現実味は薄かつた。こんな時間に、午前中に、先輩が部屋にいるはずがないのだ。先輩はこの時間、グラウンドにいる。部屋にはいない。

部屋に着いて鍵を開けて先輩がいなくとも、だから何も感じなかつた。いるはずがないのだから。

部屋には何の変化もなかつた。まだ片付けにはきていないのだろう。

まだ信じられないでいたのだが、頭の中で了解はしていた。

先輩は死んだ。

だから浅井は病院を抜け出してこの部屋から先輩の大切なものを持ち出そうと思って來たのだ。

でも何を？

何を持つていつたらしいかな？先輩。

浅井はまだ混乱していた。

信じられないでいるのに先輩の遺品を探す矛盾を受け入れていた。どうして自分は悲しくないのか、涙も出ないのか、分からないま探し物をしていた。

そして高い棚の上にこの入浴剤を見つけた。

これがいい、と思ったわけではない。

ああ、あんなところに、と腕を伸ばしだけだつた。
背伸びして腕をいっぱい伸ばしても届かなかつた。

そして、後ろを見た。

背後から腕が伸びるはずだった。

こんな時には先輩が笑つて取ってくれるはずだった。

骨ばったあの大きな手で

左腕より太くなつたあの固い右腕を伸ばして

それなのに誰もいない後ろを見て、浅井はやつと先輩を失つたことを知つた。

そのまま崩れて座り込み、悲鳴を上げた。喉が破裂するほど悲鳴を上げたはずだった。

吹き出た涙が床に落ちてぽたぽたと音を立てた。

聞こえたのはその音と、ヒューヒューと空気が漏れる音だけ。声を失っていた浅井の喉は泣き声も上げられず、空気が通ついく音を発するだけだった。

これで、生きているのか、と思つた。

先輩を失つて、泣き声すら出せないで、生きていると言ふのか。

こんな私に、生きる意味なんかあるのか。

ない。

そう思つた。

生きる意味なんかない。

先輩のいな世界で生きていく意味なんかない。

生きていく必要なんかない。

そう思いついて、浅井は安心した。

棚から落ちてきた入浴剤を抱えて、浅井は笑った。
涙の溜まつた床に転がつて、笑つた。

そこで記憶が途切れている。

そしてまた病院で目覚めた。

夢なのか現実なのか分からなかつた。

ただ、夢でも現実でももう先輩はいないのだと思つた。

あなたに比べたら私の不幸なんか不幸じゃないわ、と言われた。もつと不幸な人は世界中にはいるのよ、と言われた。

あなたが後を追つたら先輩は何のために死んだの、と言われた。

あなたが他の人と幸せになることを先輩も望んでいた、と言われた。

た。

始めは意味がわからなかつた。

先輩を失つたと頭が受け入れた後はしばらく、言葉が理解できなかつた。言葉という概念も失つた。失つたといつことも分からなかつた。

何もかもがわからなかつた。

悲しい、という意味もわからなかつた。

やつと、他人が同情している、私を憐れんでいると気付き始めたとき、浅井は反射的に拳を握り、血が滲むまで爪を手のひらにい込ませて、溢れそうになる涙を止めた。

人前では一度も泣かなかつた。

口の中が血だらけになるまで唇を噛み締め、手の平に血豆ができるも拳を握り締め、涙を堪えた。

自分でも理由はわからなかつた。

もう死のうとは思わなかつた。

そして同情の声が次第に引いていった。

逆に非難の声が聞こえてきた。

先輩の親友には直接言われた。

「須藤のために、少しごらい泣いてやつてもいいんじゃないの？」

先輩のために

その言葉で浅井の強張った心が溶けかかり、初めて人前で涙を落としかけたが、その親友は気付かず続けた。

「事故は須藤のせいかも知れないけど、君を庇つて死んだのにその君が泣いてもいらないなんて、須藤が可哀想だ」

その言葉で涙が引いた。

その言葉でやつとわかつた。

絶対に同情されたくなかったのだ。

先輩を失つて浅井が泣き崩れるのが当たり前だと誰もが考える。こんなに早く逝つてあなたを悲しませて、と続く。

先輩があなたに不幸で悲しい思いをさせていく。

浅井が泣くとこれを肯定することになる。

先輩が浅井を不幸にしたと、肯定することになる。

そんなことは絶対認めない。

自分はそれを初めから知つていたのだ。だから泣かなかつた。

自分への同情は先輩への非難だ。それが許せなかつた。

それなら自分が罵られた方がいい。だから泣かなかつた。

浅井はまた、唇を噛んで微笑んだ。

当然、親友は激怒した。

それでいい、と浅井は思つた。

私に同情して先輩を責めないでください。

私を罵つて先輩に同情してください。

薄情な彼女を持つて可哀想に、と。

それが先輩のために浅井ができる唯一のことだと思った。
もう何一つ先輩のためにできることはないと絶望していた浅井には、それが唯一の光だった。

だから笑つた。

友人たちとも浅井から連絡を絶つた。
同情されてありきたりの慰めの言葉で傷つけられる自分を守りた
かった。

そしてその姿を友人に知られたくないなかつた。

浅井のために、浅井のことを思つているからこそその言葉だとわか
つていた。

だからこそ、浅井を傷つける言葉しか選べない友人たちとも縁を
切つた。

それを友人たちに気付かれたくなかつた。

あなたの善意が私には凶器だと、優しい友人たちには気付かれた
くなかつた。

あの事故で私は不幸になんかなつていない。
先輩のせいで不幸になんかなつていない。
短くとも先輩と一緒にいた時間は私を生涯支えてくれる。
私はその証明をしなければならない。
先輩のために。自分のために。
他の誰かと幸せになれるなら積極的にそうする。
しかしそれよりも先輩を思い出している時間の方が幸福だから一
人でいるのだ。

泣かずに平然と自立することがその証明だと思った。

誰にも邪魔されずに一人だけの記憶を薔薇の香りで再現する。

どんなに泣いても薔薇の香りが先輩のかわりに包んでくれる。

昔はお湯が冷たくなるまで出られなかつた。

先輩のいない現実に戻りたくなかった。

するいなあ先輩。

私が死にたかつた。

私も死ねばよかつた。

だつてこんなに苦しい。

どうせ死ねないなら、どうせ生きていくなら、一緒に一人でずっと生きていきたかつた。

こんなに苦しんでる自分を見たら先輩もきっと苦しいだろうな、と思うよつになつたのは事故から何年も経つた後だ。

先輩は私を大事してくれたからね。

浅井は涙を一筋流した。

軽く食事をして、メインは栗尾が見つけたという飲み屋のはずだつたのに、スペイン料理の店で「一人はワイン」一本空けていた。

大沢はともかく、栗尾は酒に弱い。

話題には上げなかつたが一人とも気にしていたのは浅井のことで、何の話も盛り上がらず、空回りする。

せめて場所を変えれば、と大沢が、ぼちぼち出よつと栗尾に言つた。

「うん？ そうね、ちょっと酔つちゃつたわあ・・・」

栗尾が真つ赤な顔を上げて笑つた。

ちょっとどじやないだろ、と大沢は苦笑し、栗尾がもたもたしていりうつに支払いを済ませた。

出口で待つていると栗尾が小走りでほとんど抱きつくよつと大沢の腕にすがりついた。

「ごめんね、払わせちゃつて・・・」

「いいよ」

どうせクリスマスも何もないのだろうから、今節約する必要もない。

「次のお店は私が払うから」

また栗尾が赤い顔を向ける。それを見下ろして、大沢は頷いた。

「で、店つてどこへ？」

「うん」

栗尾が俯いた。

「なんだよ」

「うん。となりのホテルの最上階のバー」

・・・・・!-!-!-!

「アホか！こんな格好で入れるかよ！」

「きやははは！そうね！ムリだよね～！」

栗尾が笑い転げている。

その姿に、大沢はむくむくと怒りを膨らませた。

「じゃあさ、部屋で飲むのは？」

栗尾が斜め下から上目遣いで大沢に微笑みかけた。

「部屋、取つてあるんだ」

栗尾はそう言つて、俯いた。

そこまで言わせて、やつと大沢は栗尾の言つている意味を知つた。

「私、弱いからすぐ寝ちゃうかも知れないけど…」

真つ赤な顔をした栗尾が笑顔を向けた。

嘘だな、と大沢は思つた。

確かに栗尾は酒に弱いけれど、さつきの店でワインを空けたのはほとんど自分だったと今思い出す。

栗尾は一杯で真つ赤になる体质だ。それ以上は飲んでなかつた。

そんなもんだろう。

大沢はまたそう思つた。

自分はずつとそういう付き合いをしてきた。

自分はそういう男なんだし、こういう栗尾を断る理由もない。

だから大沢は頷いた。

「俺まだ相当飲めるよ」

栗尾が首を傾げてくすくすと笑つた。

大沢の腕を両手で掴んでしなだれかかつたまま、栗尾はホテルへの通路を間違わずに進み、フロントを素通りしてエレベーターの前で止まってボタンを押した。

チェックインは済ませてあるんだな、と、大沢は訊こうと思つたがやめた。

酔つているせいなのか、栗尾の態度にいろいろしている。何が、とまでは突き詰めていないが、なんとなく腹が立つてゐる気がしている。

無言のままエレベーターに乗り、47階で降り、そこからすぐの部屋を栗尾がカードキーで開けて先に入つた。

そして電気をつけないまま窓際まで走り、大沢を呼んだ。

「早く来て！下を見て！」

何が見えるかは分かつていて、想像以上に美しい街の夜景だつた。あちこちのクリスマスイルミネーションがさらに光を増していくせいもある。

「素敵よねえ・・・」

栗尾が大沢の腕にもたれかかった。

大沢はしばらく夜景に見惚れていた。

栗尾がしびれを切らして、ねえ！と大沢の腕をひっぱりその顔を向けさせ、そして爪先立ちをしてその首に腕を回し、キスをした。ああ、と大沢が栗尾の腰に手を回そつとするとそれをひらりとかわして、栗尾が笑つた。

「まずはお酒なんでしょうーバーコーナーがそこににあるわよー」

栗尾の指差した先の棚には、ミニチュアコレクションのような酒のボトルが並んでいる。

「それが、ビールにする？」

栗尾が手馴れたように、棚の横の扉に内蔵された冷蔵庫を開けてビールを取り出してみせた。

それでいい、と大沢が手を差し出すと、栗尾がプルトップを開けて持ってきた。

「どうぞ」

とまた接近して爪先立ちをしてキスをして、またひりりと離れて笑つた。

大沢は、からかわれているようではやはり腹が立つた。

だからまた窓を向いて夜景をみながらビールを飲んだ。

すると今度は、背中に抱きついてきた。振り向くとまた逃げた。

さすがに、怒りが顔に出た。それを見て栗尾がさらに笑つて、「私先にお風呂に入るわね！ 酔つてそのまま寝ちゃうと大変だしつ！」

そう言いながら上着を脱ぎ始めた。そしてスカートに手をかけた。「なんて！ ここじや全部脱がないって！ あはは！」

そう笑いながらバスルームに消えた。

夜景を見下ろし、ビールを一気に半分飲む。はあ、と一息ついて口を拭い、怒りを静めようと試みた。

酔つてるんだ。腹なんか立てるな。栗尾のペースになんか巻き込まれない。

俺は俺だ。
俺のペースでやる。

そしてビールの残りを一気に飲み干した。

「この夜景。こんなに小さい街であんなに小さな会社で、小さいことでガタガタして。

俺はどんだけ小さいんだ。

てか、そんなことを忘れさせる高さだな、ここは。

俺は全てを見下ろして酒飲んでんだな。

全てが俺の下にあるんだ。

そう思いついて、大沢は笑い、またビールを一本冷蔵庫から出した。

浴室では栗尾が、ラベンダーのバスソルトでゆっくりと湯に浸っていた。

ちょっと挑発したから、案外待ちきれなくて大沢君、ここに飛び込んで来ちゃうかも、と楽しみにしている。

そうじゃなくても楽しみが一つある。

あの話を、今夜絶対教えるの。

あの美しい話を、汚してしまおう。

一言でいい。私が詳しく知ってるのもおかしいものね。

ねえ、あの人、浅井さん？

高校生の時、集団レイプされたんですって。可哀想ね。私だった生きていけない。

栗尾の風呂が長い。

俺のピッヂが速いのか。

大沢はもう冷蔵庫のビール5缶飲み干していた。

やはり、いろいろしていた。

何をしているんだ俺は。

ホテルの高層階からの夜景。
下々の織り成す灯りをバックに、このでかいベッドで栗尾を抱く
のか。

贅沢な話だな。

贅沢か？

なんだ贅沢つて。

大沢は6本目を開けて、また夜景を見下ろす。

こんな高い場所でこんなでかいベッドで他の女を抱くことが贅沢
なら、

大沢が窓をトントンと人差し指で突いた。

あのあたりに住む女をあのあたりで抱くことなんか、どうつてこ
とないんじやないか？

ふふ、と笑つて、大沢はビールを飲み干し空き缶をゴミ箱に放り

投げた。

そして一度大きく息を吐いてから、脱いでベッドに放ったブルゾンを取つた。

こんな贅沢、いるか。

俺は浅井さんを抱きたい。

ここで栗尾を抱くへりこなら、浅井さんを抱きたい。

酔つてゐるくせに、部屋を出て大沢は走り出し、エレベーターを降りてホテルの出口でタクシーに乗り込んだ。

浅井の部屋の住所も、間違わなかつた。

タクシーの中で、無視していた携帯が一度日に鳴つた時に電源を切つた。

薔薇の香りのお湯が排水口に全て吸い込まれるまで、浅井は髪を拭きながらじっと見ていた。

もう充分年月が経ち、先輩の思い出とも折り合いかつていて、風呂から出るコツは掴んでいた。

実体がなくても、いつも同じセリフでも、自分を大切してくれた先輩の記憶を抱いて暖かく眠りにつく。

ぽかぽかした体で寝室に入り、こたつの上の編みかけのマフラーに気付いた。

・・・もついたらないね、これ。

編み物は好きだから編んでいる時は楽しかった。
でももう解いてしまおう。

もう、いらないものだ。

そういうえば先輩にも一枚だけセーターを編んだ。マフラーも一本。
一つだけ。

冬が一度しか来なかつたから。

え？これ、編んだの？浅井さんが編んだの？本当に？すごいな！
すげ～嬉しい！

思い出して、浅井は笑つた。

笑いながら、もう思い出したくない、と思つた。

思い出すたび、色が薄れていく。先輩が遠くなる。

先輩なしで生きていいとは思わなかつた。

先輩のことを思わない日がくるとは思えなかつた。

それでも月日が流れ自分は生きている。

生きていることが先輩の望みだと分かつていても、それを裏切り

だと感じる自分の気持ちも消えない。

生きているだけで、時間が経つだけで、先輩が薄れしていく。
こんな日がくるとは思わなかつた。

そう思つていたことすら忘れている。

それは裏切りでしかないと浅井は思つ。

自分は毎日、先輩を裏切つて生きている。

編みかけの赤いマフラーを握つて、そんな自責の思いに俯いてため息をつくと、部屋のチャイムが鳴つた。

こんなに遅い時間に、自分も風呂上りなので浅井はドアを開けるつもりはなくインター ホンを取った。

「はい」

「あの、俺です。大沢です」

浅井は身構えた。

大沢が連絡もなくここに来るのは初めてだし、これまでのことでも、君島のことと、何より部長に言われたことで、大沢とはもうこれ以上続けられないと浅井の中ではもう結論が出ていた。

「何の用？こんな遅い時間に」

浅井は低い声で訊いた。

「あの、俺、・・・」

声が遠くなつた。

「何？」

「すいません・・・あ、・・・血が・・・」

「え？」

「怪我、してて、・・・血が止まらないんです・・・」

「えつ・・・!」

浅井は慌てて編みかけのマフラーを落とした。

それに構わず慌ててティッシュの箱と救急箱を抱えて、玄関の鍵を開けた。

開けたと同時にドアノブが勢いよく外に開かれ、大沢の足が踏み込んできた。

「ケガつて、・・・」

心配気に見上げた浅井を、大沢は薄笑いで見下ろした。
「血・・・つて」
酒の臭いがした。

ティッシュと救急箱が浅井の手からこぼれた。
そして全身から血の気が引いた。

大沢の両腕が浅井の体を締め付けた。

ドアを閉めたかった。それは無理だった。

せめて部屋の中に逃げようとした。それも出来なかつた。
大沢の両腕が、肩と腹に巻きついて身動きが取れない。
それ以前に体に力が入らず、立つてことさえ難しい。

大沢は後ろ手でドアをしめ鍵をかけ、浅井の体を抱きなおし、そ
の場に押し倒した。

そして上着の裾から手を差し入れて、服を脱がしにかかった。

浅井は恐怖のあまり声も出せずに体を固く縮めることしかできな
い。

なんとか固く握った拳で大沢の体に抵抗するが、大沢の手は風呂
上りで上着を一枚しか着ていない浅井の体をいとも簡単に這い回つ
た。

嫌だ、嫌だ。声も出せずに浅井は何度も首を振る。
もうこんなこと嫌だ。

首筋に吸い付く大沢から強い酒の臭いがする。

嫌だ。動けない動けない動けない。嫌だ嫌だ嫌だ。もうはやく、
こんなことはやく、終わってしまえばいい。
そうやってあの時も絶望した。
その記憶がフラッシュのように蘇った。

「・・・・先輩・・・」

声と息の間の掠れた音が漏れた。

それを聞いた大沢が弾かれるように腕を立てて浅井を見下ろした。
「やつぱり、そなんだろ！忘れてねえんだろ！なら最初からそう
言えよ！」

浅井は怒鳴り声に目を閉じてまた体を固める。

「事故で、命がけで助けられたんだって？野球部のキャプテンに？」

どうして、知ってるの。

浅井は唇を噛む。

「忘れられないよねえ。ムリだよそんなの。それじゃあ、あのチビ、
何？バーーンは何？」

大沢がまた両肩を強く押される。

浅井はまた強く目を閉じる。

先輩・・・

「からかつたの？バカにしたわけ？俺を！」

嫌だ、嫌だ。浅井が首を振る。

また大沢が手を浅井の体に滑らせる。

「どうせ最後にはその先輩のこと持ち出して、俺を、」

浅井が抵抗して拳を持ち上げた。

それにちらりと大沢の視線が奪われた。

そして、視界の端に部屋の奥の壁際の、赤い塊を捉えた。

浅井の両肩を押さえたまま、視線がしばらくそこに留まった。

赤い、何か、毛糸？

編みかけの、何か、赤の、

赤い、編みかけの、マフラー？

大沢君は赤が好きなの？

まあ、はつきりした色だから好きかな

大沢の両手から力が抜けた。

それを見逃さず、浅井がその両腕を両手で跳ね上げて大沢の体の下から抜け出し、転がるように部屋の隅まで這つていった。

「・・・俺、」

大沢が逃げた浅井に目を向けた。

浅井はがたがたと震えたまま体を丸めて壁に寄りかかっていた。

「浅井さん、」

大沢が手を伸ばしてきたので、浅井はとっさに座り込んで両手を床について、その間に頭をつけた。

そして震える声で言つた。

「お願いします。帰つてください」

小さく丸くなつて土下座をしている浅井の体が、目に見えるほど震えている。

その悲壮な姿に耐えられずに、大沢はドアを開けて外に出て、そこでざるざると腰を落として頭を抱えた。

赤い、マフラーだつて・・・?

頭がガンガンして大沢はそれ以上考えられない。

酔つているせいでの何が衝撃なのかもよくわからなかつた。

赤、なら俺の色、なんだろう。今日だつて赤のブルゾンだ。
あれは、クリスマスの準備・・・。俺へのプレゼント。
だから赤のマフラー。

大沢が顔を上げた。

その浅井さんに、俺は何をしようとした？

嘘だろ。なんでだ。

どうしても考えがまとまらない。

しばらくして後ろで部屋の鍵が掛けられる音がした。

そうだ。俺は浅井さんに拒絶された。それはでも、俺のせいだ。
それだけはわかる。

謝るしかない。俺のせいだ。

頭を振つて、立ち上がつた。

換気扇から花の香りが薄く匂つている。

浅井の体の匂いと同じだと気付き、大沢は激しく後悔した。
浅井さんはまさか俺がこんなことするなんて思いもせずに、風呂
に入つてたんだろうと思つた。

俺は、許してもうえるんだろうか。

血口嫌悪と絶望で大沢は立ちすくんだ。

震える体をやつと自分の意思で動かせるようになり、浅井は立ち

上がるうとしたが震える足が体重を支えない。

這つて玄関まで行き、ショーズボックスに手を掛けてそれを支え

にドアの鍵を閉めた。

まだ足が立たない。

浅井はそのまま這つて風呂に向かつた。

あそこに行けば、まだ薔薇の香りが残っている。

先輩が残っている。

先輩が待つている。

そして浴室のドアを開けた。

薔薇の香りは残っていた。

だけど、クリアになつた浴室には誰もいない。

浅井が高校一年生の冬、先輩と付き合い始めた頃に、一人で下校途中に他校の男子生徒に襲われたことがあった。

浅井を狙つたというよりも野球部元主将で引退後とは言え暴力事件を起こせない立場の先輩を狙つたものだつた。

相手が三人で逃げ切れず、殴打されて気力も萎え果て、大木の下で仰向けにされ制服を引き裂かれた。

怖くて痛くて苦しくて恥ずかしくて、こんなこと早く終わればいい、と抵抗を止めた。

その時、先輩が金属バットを片手に飛び込んできた。

まず浅井の上に四つん這いになつていてる男を蹴り倒した。浅井の肩を押さえている男の顎をバットで突き倒した。

そして、血だらけで自失している浅井を見て一瞬息を飲み、すぐに制服の上着を脱いで浅井の体に掛けてから、逃げた残りの一人を追走した。

間もなく先輩に浅井の危機を伝えにいった友人たちが駆けつけて浅井を抱き起こした。

遠くから声が聞こえた。

お前！野球部なんだろっ！通報すっからなっ！高野連つてどっこいっ！

ぞつとした。

浅井の頭がやつと動いてきた。

先輩、こんなことしたら、大学だつて野球の推薦なのに、
そしてまた声がした。

やれよ勝手に！通報ならとっくに警察にしたわ！逃げるなよ！

先輩・・・！私のせいだ・・・！

じきに野球部の後輩や友達が集まり、先生も来て、パトカーのサインも聞こえてきた。

最後の一人を友人に預けて、先輩がうずくまつている浅井の前に走ってきてしゃがんだ。

浅井は顔を上げられなかつた。

自分が先輩の未来を壊したのだと、謝りきれないことをしたのだと、怖くて顔を上げられなかつた。

「浅井さん」

先輩が肩に触れた。

びくりとしたが、さつきの男たちとは違う優しい触れ方で、この優しい人の未来を私が壊した、と、浅井は考えるほどに絶望した。

「浅井さん、怪我は？」

浅井は首を振つた。

もういいんです。先輩、私なんかに関わらないで。

浅井は首を振り続けた。

その時、友人が浅井の前にはだかり、怒鳴つた。

「須藤先輩、やめてください！浅井はもう怖いんです！男全部が怖いんです！怖いんです！」

その言葉に驚き、浅井が顔を上げ、先輩は間髪入れずに返した。

「男全部？俺もあいつらと同じだつてのか？」

先輩の目がぎらりと光つていた。

浅井はさつきとは違う意味で首を振つたが、先輩が顔を向けたのでまた下を向いた。

「浅井さん、もう大丈夫だよ」

浅井は下を向いて首をふりながら、『ごめんなさい』と言つた。

「もうやめてください！」

友人がさらに先輩と浅井の間を妨げる。

「ごめんなさい」

体が震えているせいで浅井の声も震える。

震える声で、『ごめんなさい』『ごめんなさい』、と繰り返した。

先輩は少し沈黙した後、言つた。

「鈴乃」

胸がギュッと熱くなつた。

下の名前を呼ばれるのは初めてだつた。

「鈴乃。君は悪くないよ。全然悪くない。あいつらが全部悪い。00%あいつらが悪い。鈴乃は何にも悪くないよ」

こんな時なのに、嬉しい自分に浅井は混乱した。だからやはり首を振つて、答えた。

「悪い・・・私が、いるから・・・」
そう口に出すと涙がこぼれそうになつた。

「私、もう先輩に、」
涙の堰が切れそつた。

その時に、先輩が言つた。

「逃げるな」

逃げるな?

浅井はびっくりして先輩を見上げた。

「そつちに逃げるな。自分に逃げるな」

そつちに逃げる?

自分に逃げる？

私、逃げる？

自分に？

自分に、逃げる？

「逃げるなら、俺のところに逃げてこい」

浅井はやつぱり意味が分からず、眉を顰めた。そしてその途端に涙の堰が切れた。

その涙を見て先輩は友人を押しのけ、浅井の頭を抱えた。

苦しい。痛いよ、先輩。

そう思いながら、そうかこの力に守つてもらえばいいんだと思った。

「俺は強いよ

先輩がそう言った。

そうか。強い先輩に守つてもらつて泣いてもいいのか。そう理解した。

だから先輩のシャツの胸あたりを掴んで、言った。

「うん。逃げる。先輩に」

浅井は泣きながら、とても幸せだった。

先輩がいればずっと幸せなんだと思った。

もういない。強い先輩はもういない。どこにもいない。いない。薔薇の香りの薄くなつた寒い浴室で、浅井は立てずにバスタブに頭を乗せている。

ここでのまま凍死できたらいいのに。着ている上着を脱いだ。

大沢にひつかれて赤く筋ができている。

先輩。やつぱり怖いです。

先輩が守ってくれないと、私は怖くて生きていけないです。涙が次々と溢れた。

迎えに来てください。

浅井は泣きながら、寒い浴室で上着を脱いで濡れた床に座つたままバスタブに頭を預けて一晩明かした。

大沢は夜半過ぎに自分の部屋に戻つた。

それから携帯を取り出して、栗尾を忘れていたことを思い出して慌てて電話したが、留守電に繋がつた。

少し悪いことをしたとは思つたが、浅井にしてしまつたことを思えば栗尾の誘いをすっぽかしたぐらいしたことではないと大沢は思つた。

だからすぐ栗尾のことを忘れた。

明日からどうやって浅井に謝ればいいのか、そればかり考えていたが、さすがに飲みすぎていたので寝てしまった。

そんな大沢の事情など預かり知らない栗尾は、バスルームから出ると姿を眩ました大沢に怒りを覚えて何度も携帯に連絡したがじきに電源を切られ、その後には怒りのあまりにまた探偵に連絡して、浅井の部屋を張るようにと頼んだ。料金ははずむと。

栗尾にとつてこんな屈辱は初めてだった。

自分がお膳立てした食事と酒とベッドの最後の最後で逃げられるなんて、こんなこと何かの間違いだ。

嘘だ。
嘘だ。

翌日、仕事をしながら大沢は時間が空けば浅井と栗尾に携帯をかけたのだがどちらも留守電に繋がった。

勤務時間はとらないかもしけないと、定時過ぎてから会社に完了報告の電話を掛けた。定時過ぎてあれば浅井が取る可能性が高いと思つたのだ。

ところが取つたのは栗尾だつた。しかしそれもちょっとびといと思ひ、大沢が言つた。

「緑区の鳴海、完了しました」

『田村設備さんですね。』『苦勞様でした』

「あの、栗尾、昨日は、」

『明日の東区、よろしくお願ひします』

それだけ言つて、栗尾が電話を切つた。

栗尾が怒つてゐる。そりやそつだらう。そんなことはいい。どうして浅井さんじゃない?この時間はいつも浅井さんが電話をとるはずなのに。

もしかして、出社してない・・・?

大沢はバタバタと後始末をして、速攻で会社に戻り、そのまま浅井のアパートに向かつた。

浅井の部屋に明かりはついていない。新聞受けにも何も入っていない。

やはり出社していて、まだ戻つてないのか・・・?

チャイムを押す。返事はない。ノックをする。返事はない。

電話をしてみる。また留守電。

ため息をついてまた昨日と同じところにぎゅぎゅると座り込む。
そして、気が付いた。

昨日の自分の足跡があちこちにある。昨日は新しいぶん靴が汚れて
いたからまだ足跡が残っている。
しかし、その上に浅井さんの足跡がない。

浅井さんはここを出でていない！

立ち上がり再びチャイムを押した。何度も押した。浅井さん！と
呼びかけもした。

そのうち部屋の中から咳が聞こえた。
いる！この暗い部屋の中にいる！

「浅井さん！」

ドアを叩いて呼びかけた。

大丈夫ですか、風邪ですか！

大声で呼びかけた。

返事は全くなかつた。

大沢はまたドアにもたれて座り込んだ。

朝まで風呂場にいて、浅井は風邪をひいた。

当たり前だ。そう簡単に凍死なんか出来ない。

何度もチャレンジしている。できた試しなんかない。

朝鼻声で会社に病欠の連絡を入れた。それっきりベッドの上。これなら餓死できるか？無理。できた試しはない。

先輩のところには行けない。

先輩のところには行けない。

独りだ。

独りだ。

独りだ。

熱があるから心細い。

こんな時には絶対人に会わない。

頼つてしまいそつだから。

先輩じゃないのにすがつてしまいそつだから。

浅井はベッドの上で寝返りをつつ。

独りだ。

私は独りだ。

チャイムが鳴った。

誰かがドアを叩いた。

そして「浅井さん！」と叫んだ。

大沢君だ。

絶対嫌だ。

絶対会わない。

「浅井さん！大丈夫ですか！」

すぐそこにある。

寂しい。

でも絶対会わない。

先輩じゃないのに

「風邪ですか、浅井さん！」

やめてよ。

昨日私に何したの？

絶対嫌だ。

苦しい。

寂しい。

先輩じゃないのに。

「浅井さん！」

寂しい

浅井は耳を塞いで布団を被つた。

次の日も大沢は浅井の部屋を訪ねた。心配なのでお茶とおにぎりを買って、またドアに向かって呼び続けた。

前日と同じように返事がなく、買って来たものはドアノブに掛け

て、せめてこれだけでも食べてくださいと言つて帰つた。
次の日、それはドアノブに下がつたままだつた。

ドアを叩いて、叫んだ。

「明日、ここ開けてくれないんだつたら、蹴破るからね！」

三日断食したぐらいで餓死はしない。
そのぐらい、浅井はよく知っている。

毎晩大沢が外から呼びかけてくる。

毎晩毎晩。

とうとう明日はドアを蹴破ると言つてゐる。

浅井は餓死どころか熱も下がり回復傾向にあつた。
丈夫な体だ。

体の回復と反比例して心が沈んでいった。

寂しくて胸が痛い。

誰もいない。

先輩がいない。

だから餓死したいのに、できない。

大沢君は許せない。

それなのに毎晩外から呼びかけられて、浅井は嬉しかった。
心細かつたから。

誰でもよかつた。

誰かにいて欲しかつた。

だけど大沢君は許せない。

許すわけにはいかない。

それなのに明日踏み込まれたら、拒絶する自信がない。

先輩じゃないのに。

あんなことした大沢君を許せるはずがないのに。
それなのに。

耐えてきたのに。

これまでだつて耐えてきたのに。

大沢君さえいなければ耐えられるのに。

浅井は頭を振つて、決めた。

明日は外出する。

大沢君には会わない。

勝手に踏み込め。

私は消える。

翌朝薔薇の匂いの消えた浴槽を洗い、久しぶりに入浴した。

久しぶりに食事も作つた。

久しぶりに鏡を見て、やつれた自分に驚いた。

私が食べさせなきや死ぬね、あんたは。そう鏡の中の自分に言つた。

死なないけどね、そう簡単に。

大丈夫。私が食べさせるから。

先輩が守つてくれないんだから、私が守つてあげるわ。

こんなふうに自分は立ち直つてしまつ。

狂うことでもできない。

いいんだ。それならそれで生きていく。

独りだつて生きていく。

先輩を抱えて生きていく。

だけど今日、先輩の好きだつた私の長い髪を切る。

私は独りで生きていくから先輩にも変わつてもらつ。

もう、先輩の好きだつた私じゃないからね。

だつて先輩だつてもう私を守つてくれないからね。

お互いそうやって変わつて、残つたものがきっと大事なものなん

だ。

変わつた一人の過ぎ去つた過去なんてもう誰にも解らない。

だから誰にも先輩のことは話さない。

誰とも話さない。

先輩をもつと奥深くに沈めるために、浅井は自分を変えることに

した。

そしてまた全てから逃げる準備を始めようと思つた。
会社も辞め、ここも引越し、全部捨てる。
先輩以外。

それからふと、なぜ大沢があそこで止まつたのかと疑問が湧いた。
彼も酔つていたし、自分も薄着だつたし、簡単だつたはずだ。
思い出して浅井は少し震える。
なにが彼を止めたんだろう。

部屋をぐるりと見回した。

目についたのは、床に落ちている赤い塊。

あれだ。

浅井は確信を持つて頷いた。

あれを見て、大沢君は止まつた。

浅井は、ため息をついた。

それで許せるものではないけれど、あれで衝動を止めた大沢が少
しいじらしい気がした。

それでも許すつもりはないけれど。

浅井は、丈の短いダウンジャケットを羽織り、膝丈のタイトスカートをはき、ヒールのショートブーツで部屋を出た。

メガネではなくコンタクトで、髪も縛らずに流して。このロングヘアも今日が最後なのだ。

行きつけの美容院はやめた。どこか遠くの縁の無い場所の大きな美容院で一度つきりの客になる。

地下鉄にすると斜め前に立つ背の高い学生がヘッドフォンで何かを聴いていた。

なんとなくバーテンを思い出して笑った。久しぶりに、笑った。

『俺が不愉快だつたから』

あのバーテンにももう会うことはないのかも知れない。

浅井は、きゅっと唇を噛み、降りる駅を決めた。
バーテンの大学、浅井の母校の、最寄り駅。

地下鉄を降りて階段を上り、通りをぐるりと見回してみる。
一度目に目の端にとまつた遠くの看板を二度目にガン見した。

「BeautySalon・Forest」

あれ？ なんだっけ？ なんとなく聞き覚えが・・・？

思い出せないが、これも何かの縁だろうとそこまで歩くことにした。

自分が学生だった頃とは大きく街も変わっている。
そりやもう10年も経つてるんだから・・・。

しばらく歩いてそこに入り口の前に立つと、待つてたかのようになから若いお兄さんが「いらっしゃいませ」とガラスの扉を開いた。通り側が全面ガラス張りで、クリスマス模様にスプレーで絵が描

かれていた。

「うーん。新しくて若向け……と浅井は一瞬躊躇った。

「今日はどうなさいますか?」

とお兄さんが、中へじづれと腕を開き、ひりひり話してきました。
今日はつて、初めてなの」と思いながらも浅井もつられてひりひり笑ってしまった。

ま、いいか。ひりひりせつれつに行け。

「ショートにしたいの」

「ええええつ？！？！」

お兄さんが声をひっくり返した。浅井も驚いたが、奥で店長らしき人も驚いたようでは飛び出てきた。

「えあの、こんなロングのお客さんガショートにしたいっておっしゃるもんだからつい……」

お兄さんの説明に、店長らしき中年前くらいのおじさんが、ほほ～となにやら嬉しそうに頷いた。

「ショートと言こましてもいろいろバージョンがありますけど、誰つぼくとがじんな感じとか希望は？」とこます?」

「あんまりよくわかんないんですけど、くわせのド短くすると斬いちやうのが気になるので、」

「いつそパークかけましょ？」

「パークもかからない軟弱な毛なんですか？」

「じゃ縮毛矯正でストレートにしましょ？」

「まつすぐになるんです?」

「なるんです」

とつあえずひりひりく、と大きな鏡の前の座席に案内された。

白とシルバーでほぼ統一された清潔感のある店内。
さつきお兄さんが大声を上げたせいで席に案内された浅井が他の
客に一瞬注目された。

そしてさつきのおじさんが後ろに立ち、にやりと笑つて、それで
うしまじょう?と言つた。

「ストレートにして、どこまで切れます?セミロングとか肩までと
か首が出るくらいとか」

鏡に映つたおじさんが男子としては肩に掛かるロングだったので、

「あなたより短く」

と浅井は短く頼んだ。

「少し染めませんか?」

「少しなら」

「はいっ!かしこまりましたっ!」

また嬉しそうに笑つて、そこを離れて準備に掛かった。

横を通り過ぎる時にネームプレートがちらりと見え、「大森」と
書いてあり、浅井はまた、んん?と考え込んだ。

まず、伸ばし続けた長い髪を、肩あたりまで一気に切つた。

それからパーマをかけ、色を染め、カットという手順。

パーマや染色の待ち時間に飲み物サービスとこうことで、コーヒー
一か緑茶を選べますがと訊かれ、お茶を頼んだ。

「お茶のリクエストって結構珍しいんですよね。せつかくいいテ
ィサーバー置いてあるんですけどね」

と聞いて、お茶を噴き出しそうになつた。

お客様だ! そうだ! 、加藤設備の社長に無理行つて出でも! りつ
た美容院じゃない! 、

私が電話で話したお客様が大森さんだ…」の美容師さん……！

「じゃちょっと時間置きますね」「大森さんが離れていった。

「そうか。ここもお客様だったか。ティサーバーは、壁際に設置してある。加藤社長が置いていったのね。

小柄で色黒で強面の加藤社長を思い出してもう社長とも会うことはないんだなあと思った。

10年。加藤社長にはずいぶん無理を言つてきたと思う。ありがたかったなあ。

浅井は少し、笑つた。

さすがにパーマとカラーとカットと、何度もシャンプー・ブロード長時間かかった。

ずっとその作業を見ていて、自分が変わっていく様を見ていたのに、最後の仕上がりには驚いた。

「もう少し、色軽くしたかったなあ・・・」

大森が呟く。しかし浅井がこの色だと頑固に譲らなかつたのだ。

「しかし、大変身ですよ！お友達もきっと分からんんじゃないですか？」

「そうだな」と浅井も思った。

「お客さんは首が細いからショートの方が似合いますよ。あとは大きめのイヤリングと香水ね。必需品」

浅井が頷いて立ち上がつた。

店内の客にまた注目された。

全身が写る鏡を見て、うん、確かに私じゃない、と浅井も思った。

メンバーズカードを勧められたが、もう引つ越すので、と断つた。

残念そうに大森が、ガラスのドアを開けていつまでも見送つてくれた。

大きめのイヤリングと香水。

先輩。こんな私はどう？

浅井はガラスに映る自分を見て、先輩に問いかけた。
それから空を見上げた。

首が寒い。

必需品の大きめのイヤリングと香水。

雑貨屋さんで求めたイヤリングは、オレンジ色の大きな菱形。鏡に映った自分の顔に、首を傾げて笑ってしまった。

誰？この元気そなめお姉さんは？

嘘みたい。髪型と小物でこんなにも変わるんだ。

香水は今日は無理だと思っていたら、しばらく歩くと専門店があった。

中に入ると、華やかなデザインのボトルに囲まれて夢の空間のようだ。

どのようなものをお探しですか？と店員が寄ってきた。

香りは決めていた。

薔薇。

店員が、5つほどボトルを持ってきてそれを試験紙に吹きつけ、浅井に渡した。

試験紙を渡される前に、浅井にはもう香りがわかつた。どの香りからもあのピンクの球の香りがする。霧のように消えていくその香りが田に見えた。

全部、霧のように消えていく。

こんなところで先輩の香りが霧のように消えていく。

泣かない。

泣くもんか。

一度大きく息をつく。

どれも薔薇の香りがする。

だからその中で一番楽しそうなタイトルを選んだ。

今度はこのゴールドのボトルに先輩を閉じ込める。

ね、先輩。
一緒に帰る。

浅井は母校に向かつての道を久しぶりに歩いた。
多分ここを歩くことももうない。

私はまた、逃げるから。そう考えながら。

しばらく歩くと、大学のグラウンドがある。
その手前に小さな公園があつた。

夜になつたらジガーレイに行こうと思つていた。
バーテンに領収書をもらうのだ。
それは君島に会えるフリー・チケットだと、あの時思つた。
多分もう彼らにも会えなくなる。
私はまた、逃げるから。

ため息をついて公園に入った。
俯くと首が寒い。
肩をすくめてぐるりと公園を見回して、
小さな子供とお母さんがブランコで遊んでいて、その向いにベンチがあり、

そのベンチに君島が座つていた。

浅井は田を見開いて、しばらく田を疑つた。

君島はじつと大学のグラウンドを眺めていた。

浅井はその横顔を口を開けて見つめた。

「この街は決して小さくはない。それなのにここには何度も偶然出会うんだろう。

ん？違うかな？最初と、今回だけかしら？でも何度も偶然会つても怖くなんかないわ。

私、この子好きだし。でも好きだと言つと嫌われるから言えないんだけど。

そう思い出した時に、吹き出した。

それを聞いて君島が振り返つた。

そして首を傾げてしばらく浅井を見つめた。あまり長いこと見つめるので気付いた。

私だとわからないんだ！

浅井は可笑しくて、笑いながら訊いた。

「君島君、もう三日酔いは大丈夫？」

君島は田を丸くしてしばらく考え、あ、と言つてから、

「あつ・・・・！え・・・？浅井さんつ・・・？！」

と声をひっくり返した。

それが可笑しくて浅井はさらに笑つた。

君島が立ち上がり浅井の前に立ち、まだ口を開けたまま田をまん丸にしている。

「ど、どうしたの！ びっくりした！ 何、何で？ あ、でも、似合つ…す」く似合つよつ！ うわあ、びっくりしたあ…」

君島が頬を染めて驚いている。

「全然わからなかつたよ！ つて、あれ？ 会社は？」

「ん、さぼつちやつた」

「えつ！ それでこんなに変えちやつたなんて、なんで？ 何かあつたの？」

君島の顔が一瞬で心配そうな表情に変わる。

・・・嬉しい。

心配されるのが嬉しくて、やはり笑顔になる。

「ちょっとね。むしゃくしゃしたの。だから思い切つてね「もしかして彼氏と何かあつたの？」

鋭いというか、まずそう考えるのが普通よね。

「あつたというかなかつたというか、多分ね、彼とは何もないのん？」

「違つたみたいだから、もういいのよ。切り替えるためにね」

「そうなの…？ 僕はお似合いだと思つたんだけどなあ…」

「うだつたわね。

私たちを最初に認めてくれたのが、あなただつた。

「でも、しようがないんだね。あなたはもう割り切つてるんだね

「え？ そう思つ？」

「うん。花の香りがするか？」

「え？」

「香水だよね？だって今まで香水の香りなんかあなたからしたことないもん。

落ち込んでたり悲しかったりしたら、わざわざ香水なんか付けないかなあつて思つただけ」

浅井は目をぐるりと回して考えた。

選んだ香水を、実際にお試しください！と店員に手首に吹き付けられて、少し首筋にも擦り付けた。

それだけのことだったのに、そういう受け取り方をされたことが面白かった。

これは先輩の香りだから多分それも間違いではないのだと、やはり笑顔で頷いた。

「ところであのバーテン君は元気なの？」

すると君島がわざかに言い濶んだ。

「ん？ 浩一？ うん・・・。あれから会つてないけど・・・」

そして君島は体の向きを変え、腕を伸ばして何かを指差した。

「あそこ、見える？ 木の下のベンチに一人で腰掛けてる人、いるよね？ あれ、浩一」

浅井も顔を向けた。

公園の木々の間からグラウンドが見えるが、そのグラウンドの木々の下に所々ベンチが設置してあり、君島の指差す先のベンチにだけ人がいた。

腰をかけているというか、両足まで乗せている。

「浩一はね、ネコが好きなんだ。多分、てか絶対、人間よりネコが好きなんだ」

確かに横に置いたヘルメット、着ているブルゾンがバーテンのものだ。

「あれね、餌付けしないで懐かせるんだって。挑戦してるの」ベンチの下には、小さなネコらしき姿がもぞもぞと動いているよう見える。

「見えないけどさ、絶対人間には見せない顔を、ネコには見せてる。それがさ。腹が立つ」

バーテンは身動きせずに、じっとネコを見下ろしている。

「きつと見たこともないような優しい笑顔とかでネコ見てるんだよ？僕なんか睨まれたことしかないのに」

うつかり浅井は笑つてしまつた。この前の一人の様子では、きつとそうなのだろう。

「あなたたちつてどうこう付き合いなの？バイク仲間かと思つたら違うつてバーテン君は言つてたし・・・」

「バイク仲間？僕バイクなんか乗らないよ。僕らは高校が一緒だつたの。ただこつちに来るまでほとんど口きいたこともなかつたけど

「同級生」

「そつ。横浜からこつちに進学するつてそういうからさ。だから嬉しいじゃない？普通？知り合いがいるつてさ？でも浩一はああ

なんだよ

「面白いね」

浅井が笑つた。

「面白くない！だからね、浩一研究が僕の最近の趣味なんだよ。最近の研究の成果が、バイト前にあそこでネコ見てるつてことだけなんだけど」

やはり浅井は、さらに笑つた。

「笑い事じやないんだよ、浅井さん。こっち来てからの付き合いはもう1年越えてるのに、僕何にも知らないんだよ。浩一は僕のことほとんど知ってるのにだよ？」

「だつて君島君、酔つ払つて電話するのがバーテン君なんですよ？そりやもう何でも知つてておかしくないわよ」

やはり笑いながら浅井が言つた。

「ああ！それ言わないでよ！僕だつて浩一の弱味をつかみたいのに。・・・」

君島が頭を抱えた。

「なんとかして、調べ上げるんだ。だつて、親とか兄弟とか友達とか、全然わかんないんだよ。趣味がバイクとネコつてだけ。悔しいよ」

すつと、浅井の頭が冷えた。

「あれでいいじゃない。ネコ好きで寡黙なバーテン。隠してることなんて彼の一部でしかないわよ」

君島がちらりと浅井を見上げた。

「よくない。僕は浩一と一生友達でいようと思つてゐる。だから、一部だらうと一部だらうと知つておきたい」

「隠してることを暴いたつて、彼を知ることにはならないわよ。

外側の出来事を知つたって彼の内面なんかわからんんだから」「それでも知りたい。言つたでしょ？一生付き合つつもりなの。それには必要だと思わない？」

「思わない」

君島が浅井をじっと見詰める。そして首を傾げてため息。「多分、浩一もそう言つんだ。似てるんだよね、浩一と浅井さん。そのハードボイルドなしゃべりかたとかさ。浅井さんも何か、隠してる？」

何も言わずに君島を見つめ返す。

「何がそんなに怖いのさ？」

君島がそう言った。

浅井がくすつと笑つた。

怖いなんて……。

そして話題を変えた。

「そういうばああなた、どうしてこひんなとこひるこるの？」

「え？ あ、僕ね、もうすぐ5時からそこの公民館で道場。本当は金曜日はフリーなんだけど、指導者がちょっと都合でいないとかで僕ヘルプなの」

「え？」

「言つている意味がさっぱり解らない。」

「あ、言つてなかつたつけ？ 僕、少林寺拳法の有段者なんだよ。道場で練習といふか今はもう指導的立場でね」

あ。だから、あの時の獣のよつな姿……。

そうだつたのか……！

「だからさ。段持つてゐからあんまり街で暴れいやいけないんだよね。」ごめんね。彼氏蹴つちやつて。でも手加減はしたよ。あ、彼氏じゃないのか

「そうだつたの」

「浅井さんには謝るけど、あいつには謝らないよ。僕の顔をからかうヤツはこいつでも殺してやるつもりで僕は強くなつたんだから」

一瞬、君島の田付きが鋭くなつた。

「時々、じつして法律なんかあるのかと思つちやつと

「こんなに美しい子も、そんなにもがいているのかと思つた。」

外側から見ただけじゃ、何にもわからない。
あなた自身がそうじゃない。

浅井は心中で君島に語った。

気付けばバーテンも姿を消していた。

君島ともこの公園で別れることにした。

最後になるかも知れない、とは考えなによつにした。涙が出るから。

浅井はまた一人で街を歩いた。

最後になるかも知れない町並みを記憶するよつこゆつくりと歩いた。

有名なフランチャイズの喫茶店で独特の濃いコーヒーを飲んで時間稼ぎもした。

夜になつたらバーテンの店に行ひ。

『なにがそんなに怖いのさ?』

怖い?怖くなんかない。

諦めてるだけ。

どうせわかつてもらえないのだから。

バーテン君もそう言つはず。

私と似てるつていうならね。

しばらくそこで過ごし、夕焼けが消えてから店を出て歩き出した。
夜になつてまた気温が下がり、首が寒い。

一時間以上も歩いてジガーレイに到着した。
何日も会社をさぼっているので曜日感覚がないが、今日は金曜日
だと君島君が言っていた。

あれから一週間。
先週初めてここに来たんだわ。
遠い昔のことのようだ。

鈴の音をたてて扉を開け、空いていないテーブルの間を抜けて力
ウンターの席についた。
バーテンが相変わらず無愛想に働いていた。

「ねえ、原田君。この前バイクに乗せてた娘、彼女なの？」
頬杖をついた女性客がバーテンに訊ねた。
バーテンは無視しているが、浅井はぎょっとした。
私？あ、そうとも限らないわよね？彼女がいたら乗せるわよね？
「あんな真昼間にノーヘルで、かつこよかつたわよ」
私だ・・・！見てたんだ・・・！

「ねえ原田君！ん、ダイキリ追加！」
「はい」

「彼女なの？」

バーテンが注文を受けるタイミングで、客が質問した。

「ええええええ～～～～～～～～～？」
「・・・そうです」
バーテンが表情を変えずに低い声で答えた。
「ええええええ～～～～～～～～～？」

カウンターの客が全員大声を上げた。浅井も含めて。
「やだもつ信じられない原田君、ダイキリキヤンセル！」
「あなたのファンがこれだけいるの、気付かなかつたの？」
「そうよそうよ。もうしばらく来ないから！」
「あ、私は来るから心配しないで！」
「抜け駆けつ？ありえない！」
「私も来る！」

賑やかな若干年嵩の女性客たちが一斉に席を立つた。
「ありがとうございました」とバーテンの氣のない挨拶が聞こえた。

他の店員がカウンターのグラスや皿を片付けている間、バーテンはショイカー やナイフを洗つて水切りに置き、「注文は？」と浅井に声をかけた。
浅井はまだ驚いたままだったのだが、とりあえず最初に頼む物は決めてあつたので答えた。

「領収書」

「お支払いがなれば発行できませんが？」
バーテンが即答した。
「払つたじやない、1万円！つて、ねえ、私、あなたの彼女なの？」
浅井は小声で訊いた。
バーテンが珍しく、驚いた顔をした。

そしてバー・テンは視線を右に逸らしてから顔を顰めて首を傾げ、浅井に視線を戻して言った。

「たしかにこの前タンデムしましたけどあなたじゃないし、ストーカーならお断りしますので他をあたってください」

浅井はカウンターに顔を突っ伏して笑い転げた。
ひどすぎるじゃない・・・！

笑いながらだったのでほとんど片言で、自分の名前は浅井で、君島の部屋まであなたの縁のバイクで送つてもらつて1万円払つたのだと、当事者しか知らない情報を提供して納得してもらつた。やつと納得してもらつたが、バー・テンはまだ首を傾げている。「多分この次会つても、あなただと認識できないと思います」「そういうこと偉そうに言わないでよ」

「いや、認識できないと思うので今謝つておきます」
相変わらず変な子だ。浅井はまた笑つた。

「それに。私あなたの彼女なの？」

笑いながら問うと、バー・テンはいたずらを見つけられた子供のようにわずかに唇を尖らせて俯いた。

そんな顔もするこかと浅井はさらに笑つた。

「・・・すいません。めんどくさかつたので・・・」

浅井はまた、頭を抱えて突つ伏して爆笑した。

浅井が笑つているうちに、新しくオーダーが入りバー・テンが働き出したので、頬杖をついてそれを見ていた。

それに気付いたバー・テンが

「オーダーは？ホワイトレディですか？」

と訊いてきた。

たつた一度きりの浅井のオーダーを覚えていた。
嬉しくて笑顔のまま頷いた。

今日はずっと笑顔だ。

昨日までが嘘のようだ。

バー・テンの作業は今度はテーブル席毎に、時間の掛かるシェイクから始めていた。

さほど急いでいるようには見えないが動きに無駄がないせいと作業が合理的なので仕事が速い。

合間にいつの間にかホワイトレディが出来ていて、目の前にコースターが置かれ、グラスが置かれ、シェイカーからカクテルが注がれた。

注ぎ終わりシェイカーをカラッと鳴らして、お待たせしましたと低い声で言つて、バー・テンはまた仕事に戻つた。

君島君に研究されているミステリアスなバー・テン君。

何も教えていないのなら、きっと教えたくないことばかりなのだろう。

それを探られるのはどんな気持ちなのか。

私ならたまらない。多分耐えられない。

バー・テン君はどんな気持ち？

と、ぼんやりバー・テンを眺めていると、彼は小さな紙を引き出し

から出してペンで何か書きながら

「日付は今日でいいんですか？」

と言つた。

浅井がまだぼんやりしていると、

「宛名は上様ですか？」

と浅井を見下ろして言った。

領収書か！と気付き、浅井はまた笑い出した。
印鑑がないんですけど、まさか血判まではいらないでしょ？？と訊
かれてまた笑った。

少しバーテンの手が空いたようなので、ギムレットを頼んで浅井が話しかけた。

「君島君が、あなたのこと色々知りたがってるじゃない？」

「ああ。はい。嫌なヤツです」

バーテンが酒を準備しながら答える。浅井が少し笑つて言つた。

「教えてあげないの？」

「何ですか」

「色々」

「別に・・・知つて欲しいとも思つてないので」

「そうよね」

納得・・・やはり私とバーテン君は似てるんだろうか。

「でも君島君はあなたと一生付き合つていくから、何でも知りたいんだつて言つてたわよ」

「・・・。そういうことを言いますか普通・・・。鬱陶しい・・・」

「

「そりかな」

眉間にざつくり皺を入れたバーテンの顔を見て浅井は笑つた。

「私は君島君、鬱陶しくないけどなあ」

「俺はダメです」

「そう言いながら、この前もお世話してたじゃない」

「そうですね。手間もかかるし鬱陶しいです」

何かおかしい、と思いながら浅井はまだ笑つていた。

「仲よさそうに見えるわよ」

「悪いです」

「だって、鬱陶しきならお世話しなきゃいいじゃない

そうだ。筋が通つてないのはここだ、と浅井が訊いた。

「いや、あそこで被害を食い止めておかないと大惨事が俺に降りかかる事になるんです」

「え？」

「そういう計算の元で、しょうがなくやつたことです」

「計算」

「多分、あいつは俺のそういう足元を見た行動を取つてゐるんです。それが鬱陶しい」

「そんなことないと思つよ。君島君は君島君で精一杯だと思つけどバーテンが真っ直ぐ浅井を見て首を傾げた。

「精一杯？俺はあいつ、かなり余計なことをしていると思いますけど」

あああ・・・！ そうだった・・・・！

君島の彼女たちを思い出して、浅井は両手で顔を覆つた。その顔の前にギムレットが置かれた。

そしてまたオーダーが入り、バーテンは仕事に戻つた。

浅井はバーをぐるりと見回した。

そういえば恐らく、ここも最後になる。

今日で二度目だけど、これでおしまいか。

そしてまたバー・テング田に入る。

君島に一生付き合おうと思われているバー・テン。

私はこの街で10年も暮らして、何も得ずに逃げようとしている。この子たちは、ここに来て2年足らずで生涯の友人を得たのね。あ、違うか。君島君だけか。

ギムレットの最後の一滴を舐めてからため息をついた。目を上げるとバー・テンと目が合つた。だから、頬杖をついたまま、XYZをオーダーした。はい、と答えてまた手際よく仕事に入る。

いいなあと思った。

羨ましいなあと。

何がかははつきり分からぬが、二人が羨ましい。多分私は酔つてきたのだ。

浅井は熱くなつてきた頬を手の平で包み、目を閉じた。コトーンと音がして目を開けると、もうカクテルが置かれていた。見上げると、バー・テンが無表情に見下ろしている。

グラスの足をつまんで、バー・テンに訊いた。

「君島君が嫌いなの？」

「はい」

即答された。

酒を一口飲んで、教えた。

「だから、君島君に好かれてるのよ。知らないの？」

そしてバーテンを見上げた。

「あの子、自分を嫌いな人が好きなのよ」

バーテンは少し目を見開いて驚き、その後顔を顰めて片手で頭を抱え、果てしなく嫌な表情をした。

酒をもう一口飲んで、追い討ちをかけた。

「君島君に嫌われたいなら、方法は一つしかないじゃない」顔を顰めたままバーテンが目を向けた。

「彼に好きだつて言いつの」

浅井は真面目な顔をして、指を一本立てて断言した。

バーテンは両手で頭を抱えて俯いた。

浅井はものすく楽しい気分になり、笑顔でもう一口飲んだ。

「あれ？」

と、バーテンが、まだ50%ほど嫌な表情を残したまま浅井を見下ろして訊いた。

「じゃ、あなたは君島に何て言つたんです？」

「私、嫌いだつて言つちやつたのよ」

「やつぱり嫌いなんじゃないですか」

「そんなことないわよ。いろいろと事情があるの」

浅井がそう言つてカクテルを飲み干して次を頼む。

「ウォッカベースのこういうの何て言つたつけ？」

「バラライカ」

「それ

「はい」

バーテンが仕事を戻る。

一人のお酒も楽しいじゃない。

あ、違う。バーテン君が相手してくれてるからか。
酔っ払いらしく、浅井の思考がどんどん遅くなる。

一生友達でいるなんて、そんな単位を持ち出す人なんてそういうない。

少なくとも私には、先輩しかいなかつた。

この先60年一緒にいるんだと思えば、この1年ぐらいは我慢できる気がしないか？

そう言われて、先輩に会えなかつた1年を我慢できた。

その言葉で、高校最後の1年を乗り切つた。

それを思い出して、浅井は首を振つた。

それも全部、私だけの宝物だ。

宝箱にしまつて、心の奥底に沈める。

そのためにここから逃げるんだ。

「コースターの上にコップとグラスが置かれて

「大丈夫ですか？」

とバーテンに訊かれた。

はつと氣付いて頷くと、シェイカーから酒が注がれた。

このバーテンも、人に言わない宝箱を心の奥底に沈めてるんだろうか。

だから君島君にも何も教えないんだろうか。

「バーテン君」

「・・・・・はい」

「君島君にどんなこと訊かれるの？」

「どんなこと？・・・何でもですが」

「何でも・・・あ、そういうえば家族のこととか友達のことも教えてあげないんだって？」

「普通誰でも必要のない」とは教えないでしょ?」

「そつか」

そうかな。

何かこう、領けない気がする。

もつと納得できる答えをバー

「でも、教えない必要もないじゃない」

「教えない必要」

ちよつと屁理屈か・・・

「ただしでも、俺には教えなくともいい権利はあります」

浅井は笑つた。私の屁理屈以上の

そして浅井がため息をついた。

「そりやね。教えないといい権利は確かにあるわよねー

その後、バリテンが強引に其の上に、乗つた。

「どうせ、わかつても「らえないし」

ぞくりとして、浅井は腕を押された。
バー・テンの独り言は予想していた言葉だったのに。
ただその言葉を口にした時のバー・テンの表情に、まるで電流が走
ったかのように一瞬痺れた。

バー・テンの顔に、わずかに怒りが見えたのだ。

怒り
何に対する？

わかつてもらえないことへの怒りだ。

理解されないことへの怒り。

諦めたつもりの怒りがまだ燻っている。

諦めたつもりの、理解への切望。

どうしてわかつてくれないんだ。

その怒りをまだ胸の奥に秘めている。
諦めてはいない。

彼は解つてくれる誰かが欲しいのだ。

それが恐らく、君島君。

バー・テン君が何を抱えているのか知らないけれど、本当は君島君
に理解して欲しいと思っている。

じゃなきや、あんな怒りの表情はできない。

ああ、嫌だ。

それは、私も一緒だ。一瞬でわかつてしまつた。
先輩を心の奥底に沈めたいなんて大嘘だ。

それはまた先輩を死なせることだ。

浅井は両手で顔を覆つた。

私は何てことを考えていたんだ。

そんなこと、できない。

だけど、無理。

だつて、わかつてもらえない。

誰にもわかつてもらえない。

だから諦めたい

諦めたいのに

『何がそんなに怖いのさ?』

そう、怖いの。

わかつてもらえなってことを、決定的に知らされるのが怖いの。
だから諦めたいのに、諦めたはずなのに。

「あの。大丈夫ですか?」

バーテンの低い声が聞こえた。

浅井が、はつと顔を上げた。そして自分のグラスを見下ろし、空

になつてたのでまたホワイトレーティを頼んだ。
そしてまた考え続けた。
どうしたらいい。

しばらく頬杖をついて黙つていると、チーズを乗せた皿が目の前に滑ってきた。

顔を上げるとバーテンと目が合つた。

「それ、余つたんで」

そう言われて皿を見るとなつかに不恰好なチーズ勢ぞろいだ。

「ありがとう・・・」

そういえば浅井はここに来てから強いカクテルを飲むばかりでつまみを一切取つてなかつた。

そしてチーズを咥えてバーテンに訊いた。

「君島君に知られたらどうする?」

「何を?」

「あなたが隠してること、君島君が知つてたら、どう?」

「どうつて・・・。別に無視しますけど」

違う。それは私の求めている答えじゃない!と思いつつ、浅井は次のチーズを頬張つた。

私はそうじやない。
多分そうじやない。

酔つていて全然整理できないけど、私は多分もう一人じや先輩を抱えきれない。

多分そういうことだ。

それは多分、

大沢君が現れたからだ。

大沢君さえいなければ、きっとまだ頑張れた。

浅井が天井を仰いだ。

賭け、になるかな。

そう考えて目を閉じた。

この後家に戻つて、大沢君が待つているかどうかの賭け。
それから、その後大沢君が、私の話を受け入れるかどうかの賭け。

大きく息を吐いて顔を正面に戻すと、バーテンはシェイカーやジ
ガーを洗っていた。

浅井は両手で頬杖をついて、それを眺めた。

この子も、戦っているんだなあ。

怒りと諦めの間で戦つている。

まだこんなに若いのに。

私がこのくらいの時は、先輩を失つたばかりで苦しいだけだった。
浅井が、呟いた。

「すごいね」

「・・・は？」

バーテンが返事をした。

「まだ若いせに。二十歳なんでしょう？」

浅井が笑顔で言つと、バーテンは一瞬目を逸らした。
だから浅井は笑顔を消して、え?と言つた後に、まさか、と呟き、
バーテンはそれを聞いて唇に人差し指を当てた。

浅井も口を手で隠しながらも驚いて、手の中に叫んだ。

「まさか19?！」

バー・テンは眉を顰めて、立てた人差し指を折つて拳を唇に当たった。

「未成年ってこうこうところで働いていいもんなの？」

「飲んでるわけじゃないしいいんじゃないですか？ただ隠してるので言わないでください」

「言わないけど・・・・じゃ、今は君島君の方が年上なのね？」

「そうですね。あっちが4月で俺は3月なので、実は1年ぐらいあ

つちが上です」

「見えない・・・・」

「それ、褒め言葉ですかね？」

「あ、うん。そう思つて」

戦っているのは私一人じゃないんだ。
まだ19の、10も年下の男の子も、今の私と同じく戦っている
んだ。

私は諦めないかも知れない。
賭けになるけど、大沢君に助けてもらえるかも知れない。
当たつて碎ける可能性の方が高いけど、当たれるなら諦めないこ
とにした。

この子も、君島君に当たれる日が来ればいい。
きっと君島君なら、碎けない。

砕けても多分、当たつたことは後悔しないはず。

だつてひとりぼっちで怒りを抱えて生きていくのは苦しげから。

浅井は悶々と頬杖をついて考えていた。

「あの」

バーテンの声がして、浅井が顔を上げた。

「俺もう上がりますので、今日はありがとうございました」

「あ、そうなの。こっちこそありがとうございました。君島君によろしくね」

「……自分で言ってください」

ちょっと吹き出した。

しかし、バーテンともこれが最後かもしれない。きちんと礼を言
つておこう。

「いろいろありがとうございました、バーテン君。この前のことも本当に助かつたわ」

「・・・俺の名前は原田だとこの前言いましたよ」

「あー、そうだったわね！ありがとうございました原田君！」

「いや・・・もうタンデムはないですから。それじゃ失礼します」

やはり、浅井は笑つた。

そしてバーテンがいなくなり、最後に入れてくれたホワイトレギュイを飲み干して、浅井も店を出た。

さすがにもう夜も遅いので、浅井はタクシーで帰宅した。アパートの階段を上りきつて通路に向いてから、気付いた。自分の部屋の前に、誰かがうずくまつていてる。誰か、なんて、予想はついてる。

浅井はヒールを鳴らしながら歩いていった。ここまで変身した自分に、まず気付かないだろう。それで失格だ。そう考えながら、歩いていった。

その音でうずくまつていた男が顔を上げた。

もちろん大沢だ。

浅井は田も合わせずに俯いたまま歩き、ちょっと自分の部屋の前も通り過ぎてみようかな、などと考えていたその前に、

「浅井さん。そんなに瘦せたんだ」

と、大沢の声がした。

ここまで髪を短くした自分に気付いた？

「ドア、蹴破るんじゃなかつたの？」

少し悔しくて、浅井が低い声で訊いた。

「外出したのがわかつたから・・・」

「え？」

「足跡が、その、ブーツの。それがこの部屋から出て行つた跡があつたから、外出したんだと思ってて」

浅井は顔を顰めて、部屋の鍵を開けた。

大沢も立ち上がった。

ドアを開けて浅井が大沢を振り返り、言った。

「二の後、私に指一本触れないで。それができるなら、入つて。できないなら帰つて」

大沢が一瞬息を飲んで、頷いてから、できる、と答えた。

それを見て浅井がドアを大きく開き、室内の電気をつけた。

玄関から入つてすぐのダイニングキッチンで、ブルゾンを横に置いて大沢は正座していた。

浅井にそうしろと言われたからだ。

ダイニングキッチンとは言え、テーブルも椅子もないで広く感じる。静かな中、冷蔵庫だけが動いている音を立てている。

浅井が奥の部屋に入つて行つてエアコンをつけたので、少し暖かい風を感じた。

そして浅井がジャケットを脱いで戻ってきた。

思い切り髪を短くして、少し色を入れて、メガネを外して、短めのスカートにヒールのブーツ。

確かにいつも浅井さんは180度印象が違う。だからと言つて俺は間違わないよ。

大沢はそう思つて、浅井を見つめる。

こんなに外側を変えてもごまかされなかつたあなたは、私の何を見ていた？

浅井はそれでもまだ、大沢を全面的には信用しない。

これから厳しいテストをするから、覚悟して。

浅井はそう思つて、大沢を見下ろす。

部屋の電気を暗くしてから、浅井が正座する大沢の前に膝をついた。

そして右手で大沢の耳に触れ、左手を大沢の膝に置き、顔に唇を近づけた。

大沢は息を止めてそれを待ちながら、両手を浅井の体に伸ばした。

その途端に浅井の体が離れて大沢の両手が浅井の両手で弾かれた。

「私の体に触れないでって言つたでしょ？」

大沢が、はつ、と息を吸つた。

浅井がまた大沢に近づき、その体の端から触れ始める。

大沢は浅井から目を逸らして、大きく息を吐いた。

浅井の唇が大沢の顎に触れた。

大沢はきつくる目を閉じた。

仕返しだ。これはこの前の。俺はこれに耐えなければならない。

耐えて、どうなるつていうんだ？

耐えれば、多分、許される・・・？

じきに浅井に両手で顔を挟まれ、少し顎を持ち上げられ、唇にキスされた。

大沢は顔を顰めたまま、目をきつくるまま、両手を握り締めて息も止めていた。

そして、浅井の声がした。

「昔の話、聞きたいんでしょ？」

ぎょっとして大沢が目を開けると、浅井が正面で、ひどく挑戦的な攻撃的な目付きで大沢を見ていた。

「高校の一年先輩で、野球部のキャプテンでショートで4番。かつこよかつた。全校の女子のアイドルだった」

うそだろ・・浅井さん。

困惑している大沢の肩に、浅井がまた手をかける。

「私もこつそり好きだつたけど、それだけで別に何も望んでなかつた。だつてアイドルだから。きっと私の名前も知らないと思つてた」

浅井が大沢のパークーのファスナーを下ろした。

「だけど、漫画みたいだけ、廊下でぶつかっちゃつて、それで初めて話をして、」

・・・悪趣味だ・・・浅井さん・・・

「図書室で借りた本を落としたの。それを見て先輩がね、」

「そう言いながら浅井が大沢の体を押して床に倒した。

「自分が借りたかつた本だ！つて、次自分が借りるから一緒に図書室行つてくれつて頼まれて、」

パークーの前が開かれて、浅井は中のTシャツをめぐらうとしている。

「でもその本はもう予約が入つててだめだつたの。それでがっかりしてたから、」

浅井の冷たい手が腹に触れ、大沢は力を入れた。

「別のシリーズでよかつたら持つてますよつて言つてみたの。私としては思い切つて」

大沢が、はあ、とため息をつく。苦しい。

「そしたら、貸してくれるの？ありがとう、浅井さん！って」
耐えられない。耐えられない。大沢が目を閉じた。どうしたら耐えられる。

「浅井さんって言つたのよ。びっくりした。私の名前知つてるなんて」

「ああ、この話か。これに集中すれば。

「だけどやつぱり期待はしなかったの。たまたま名前知つてただけなんだつて思つた」

高校生の浅井さん。多分、長い三つ編み。セーラー服。

「それなのにね、先輩、私のことずっと見てたつて言つたのよ。そんなんはずないでしょ？」

見てたんだる。俺だつて見てた。

「だからやつぱり信用しなかつたの。嘘だと思つたんだけど、そしたら先輩が、たまに会つて本の話じよつと見てたつて言つたの。それじゃ、断れないじゃない？」

ああ、やつぱりな。浅井さんは昔から誘い辛かつたんだな。わかるよ先輩。

浅井の手が大沢の黒いTシャツを胸がはだけるまでめぐり上げた。
「それで、会つてると先輩つて思つたより面白いし、なんていうかな。もつと好きになつていつたのね」

浅井が鎖骨を舐める。大沢は天井を見上げて浅く息をした。

「でもあまり本気にならないように気をつけてたし、あまり知られないようにもしてたんだけど、」

苦しい

「それなのに、他校の生徒に知られていて、私襲われたの。先輩は野球部O.Bだから絶対事件なんか起こせないから。もし起こしたら次の年の後輩たちの活動が制限されることになるから、私は助けられないはずだったの」

⋮
⋮
⋮
⋮

「急に乗つてた自転車倒されて、私転がされて、でも立ち上がり逃げたんだけど、逃げ切れないよね。つかまっちゃって、もうダメだと思った」

・・・・え、じゃ、俺、同じことを・・・

「後で気付いたけど、かなりひどく殴られたり蹴られたりしてたの。傷とか痣とかすこかつたんだけど、その時は何にも感じなかつた」

・・・じゃあ俺、許されるなんて、無理だ・・・

大沢の感情が一気に冷やされた。

「だから私、諦めて、相手三人だつたんだけど、もう抵抗もやめされるがままになつてたんだけど」

三人・・・！

大沢が目を閉じた。

「そしたら先輩が、野球部の金属バット持つて撃退に来たの」

大沢が目を開けた。

「だつて野球部OBが野球部の備品で暴行事件起こすなんて、最悪じゃない？それも相手の思う壺だつたのよ。だけど、来てくれたの

ああ

「一気に三人とも倒してくれて、だけど野球部とか、先輩は野球の推薦で進学が決まつてたし、私のせいだそれが全部ダメになると思って、」

すげーよ・・・先輩

「だから、私も先輩とは、付き合えないって思つたのに、」

浅井が言葉を止めて、大沢を真っ直ぐ見下ろした。

「そしたらね、先輩私に、逃げるなつて言つたの」

「逃げるな・・・」

大沢が繰り返す。

「そう、逃げるなつて。自分に逃げるなつて。意味、わかる? わかるはずがない。」

浅井が首を傾げて続けた。

「逃げるなら俺のところに逃げて来いつて」

それなら、わかる。

胸が締め付けられる気がして、大沢は目を閉じた。

「だけど結局、野球部も先輩も何のお咎めもなかつた、ていうか先輩警察から表彰されたしね」

浅井が偉そうに言つので、大沢が笑う。

それに引き替え俺は、と若干沈んでいると、浅井が大沢のジーンズのボタンを外したのでまた大沢が全身に力を入れた。

「その後、先輩卒業してから一年はほとんど会えなくて、先輩は野

球があつたし、私は勉強があつたし

名大だもんな、と大沢が息を吐く。

「だけど我慢できたのは、先輩がね、」

先輩が。先輩が。浅井さん、どんだけ先輩が好きなんだ。
それなのに浅井は大沢の腹筋の筋をなぞっている。

「この先60年一緒にいるんだから、一年ぐらい我慢できるって言つたの」

60年、生きるつもりだつたんだよな。

大沢が口を開けて息をしている。苦しいのだ。

「それで我慢できた。それで、名大に入れて、本当に嬉しかつた」

だつて東大蹴つたんだろ？

大沢は苦しさを紛らすために体を捻り、左手で自分の短い髪の毛
を握つた。

「」うちに来てからは、できるだけ一緒にいた。先輩は野球で忙しかつたから夜にしか会えなかつたけど。だけどほとんど毎日一緒にいた」

大沢が体を捻つたタイミングで、ジーンズを腰から下ろされた。浅井の指はもう温かくなつてきているが、大沢は一瞬全身が冷える思いがした。

気を紛らすために浅井の話に集中する。

ほとんど毎晩一緒にいた、といつことは、ほとんど同棲と言つてもいいくらいだ。

俺にはそんな経験はないな。

「豊田の花火大会には2回行つたよ。笑うべからず」の

ああ、おいでん祭りな。俺も行つた。女と。

浅井が腿を握るので、マッサージだと思い込もうと大沢は心で抵抗する。

息が速くなつてきている。

「毎年行くつもりだつたの。そつ、約束してた」

大沢が目を開けて息を止めた。

「秋に、事故があつて」

「」からだ。

「」から、浅井さんがどんなに嘆き悲しんだか、どんなに彼を必要としていたか、語られる。

そうか。

たしかにこれは仕返しだ。

こんなにひどい罰はないだろ。

大沢がそう覚悟した。

「先輩の単独事故なんだけど、原因がハンドル操作の誤りとか動物が飛び出したんだろうとか言われてね」

「私、隣に乗つて一緒に事故に遭つてゐるのに、記憶がないの」

「私しかわからないことなのに、覚えてないの」

え？

「絶対、先輩のせいじゃないのよ。私が乗つてゐるのにそんな乱暴な運転するはずないのよ」

「でももう、車だつて潰れてしまつて誰も検証なんかしてくれなかつた」

待つてよ、浅井さん

「先輩、死んでしまったから何も言えないのに、私しか知らないことなのに、」

なんだよ・・・

「思い出せないの」

「絶対先輩のせいじゃないの？」

「まだに、先輩を庇つてるのかよ。
自分だって、どんな辛い思いしてきたんだよ？」

「それでね、」

浅井が話を続けようとしたが、大沢の体から力が抜けたのが分かつたのでその顔に目をやつた。

大沢は右手の甲で両目を覆っていた。

浅井は首を傾げて、その顔を覗き込んで、上げている右腕を掴んだ。

大沢が泣いていた。

「大沢君」

「すみません。俺が泣くのも筋違いつていうか、だけど、」

大沢が泣きながら、微笑んで言つた。

「先輩、浅井さん残していくの、辛かつただろうなって思つて」

そして大沢が大きくため息をついた。

「ずっと浅井さんと一緒にいたかっただろうなって」

死んでしまつてもう10年も経つのに未だに自分の悲しみそつちのけで、事故の責任なんてこと考えてるような彼女。残していきたくなかったらうな。

可哀想だな。先輩。

大沢が涙を拳で拭うと、浅井がトランクスに手をかけていた。

「えつ・・・？！」

ジーンズはとっくに脱がされて放り出されている。

「あつ・・・浅井さん・・・！」

「私に触らないで」

浅井の左手が大沢の首元を押さえていた。

そしてトランクスに手を差し込まれ、大沢が息を飲んで顔を背けた。

ついさっき全身で脱力したばかりなのに、浅井の動作一つで大沢はまた熱くなってしまう。

また簡単に呼吸を増やしている。

トランクスもむりやり下げられ、大沢は喉の奥から、くつ、と声を出した。

無理だ、耐えられない。

浅井は腰のあたりに触れている。

まずいだろ。どうするんだよ。大沢は焦りながらも気持ちの昂りに抗えない。

もう荒い息も隠せない。

ただ、目は閉じていた。

薄明かりの中、今の自分の状態は見るに耐え難い。

苦しい。苦しい。

浅井の手が足を滑る。

大沢の体を仰向けにさせる。

両手が腰の左右に置かれる。

両手？

手？

手じゃない

手じゃない！

両脚・・・！

大沢が目を開けた時に、強く熱い圧迫を感じた。

同時の強い快感で上半身を跳ね上げ、浅井の体をかき抱いた。

薄明かりの中、上にいる浅井の体を強く抱きしめ、熱と圧の一番奥に押し込んだ。

たつたそれだけで、終わった。

浅井は体のいくつかの痛みに耐えながら、胸元で大沢の頭を抱えていた。激しい呼吸のせいで熱い。

じきに背中を抱く手に力が入ってきたので、痛いよ、と伝えた。

「だつて浅井さん、これ、仕返しなんだろう？」

涙声で大沢が言った。

「こんな目に遭わされて、俺、どうやって忘れたらいいんだよ」またきつく抱いてきた。

「痛いってば」

浅井は大沢の短い髪をぐしゃぐしゃと撫でた。

「私を、忘れるの？いいよ、それでも」

そして大沢の頭に口をつけた。

「今度は私がしつこく追い回すわ」

ぐいっと大沢が浅井の体を自分から離した。

「…………本当？」

浅井はまた痛みを堪えて頷く。

するとまた大沢にきつく抱きしめられた。

「嘘みたいだ……」

大沢は泣いていた。

「痛いってば！」

浅井は笑っていた。

「だけど、浅井さん、先輩のこと一生忘れないでしょ」「忘れない。絶対忘れない。だけど、大沢君が言つてくれたから」

「え？」

「辛かつただらうなつて」

「はい」

「私、そういう言葉、初めて聞いたの」

「励まされたり慰められたり叱られたりしたけど、誰も、「誰も先輩がそんな風に、」

「先輩がそんな風に考えたとか、先輩が何を思つたとか、誰も」

そこまで言つて、突然浅井の目に涙が湧いた。

「先輩が、辛かつたなんて」

声が震えた。

「私と一緒にいたかつたなんて」

それ以上は続けられなかつた。

体の震えも涙も止まらなくなつた。

だから大沢は浅井を膝から下ろして、震える体を胸に抱いた。

辛かつただらうなんて、考えたことがなかつた。

先輩が私と一緒にいたかつただらうなんて、思いもつかなかつた。いて欲しい、幽霊でもいいから側にいて欲しい、私も連れて行つ

て欲しい、ずっとそう思っていた。

悲しむ自分を見たら先輩が苦しいだろうとは思つた。空にいる先輩が苦しいだろうとは思つた。

しかし一度も、自分の側を離れる瞬間の先輩の気持ちを考えたことがなかつた。

十年間一度も思いつかなかつた。

それを、今初めて話を聞いた大沢君が伝えてくれた。

何故思いつかなかつたのだろう。

どうして気付かなかつたのだろう。

その思いこそ先輩なのに

浅井は嗚咽を噛み殺す。

大沢の言葉を聞いて、浅井の中の先輩に血が通つたような気がした。

自分は長い間、10年間も、血の通わない先輩の抜け殻を抱えていたのかも知れない。

わかつていなかつたのは自分だつた。

「だつて、俺だつたら、辛い。もう一緒にいられないことが一番悲しい」

大沢が言つた。

浅井は、うん、と頷いて、また泣いた。

10年も経つて初めて人にすがって泣いた。
寂しかったのだ。自分はこんなにも寂しかったのだ。
だけど誰にも頼れなかつた。

先輩以外に頼るなんてできなかつた。

先輩以外に涙をみせるわけにはいかなかつた。

昨日まで10年もたつた一人で耐えてきたのだと改めて思つた。
ずいぶん頑張つた。

ただ大沢君がいなければ、まだ頑張つていたはずだ。

もう、頑張らなくてもいい。

そう思うとまた涙がこぼれた。

10年も一人で、よく頑張つたな。

頑張つた自分を誇りに思つう。

救つてくれた大沢君をありがたいと思つう。

浅井は涙を拭いて、大沢にありがとうと言つた。

「でも」

大沢はまだ泣いていた。

「多分俺、先輩に嫉妬すると思うんだけど」

浅井が吹き出した。

「笑い事じやない！俺きつとこれからも先輩と比べたりして、」

「比べたりしないよ」

笑いながら浅井が言つた。

「比べないよ。先輩と全然違うもの。だつて先輩こんなに可愛くな
かつた」

「可愛い？！？」

大沢はがつんと殴られたような衝撃を受けた。

初めて言われる形容詞だ。

そんな表現されたことは今まで一度もない！

「もう先輩の話はしないわ。私ももうあの時の私じゃないしね」

「え？」

「私はもうとっくに大人なのよ。大沢君」

「はあ」

「寒くないの？裸だよ？」

突然浅井が言い出した。

「・・・！誰が脱がしたんですか！つて、浅井さんだつてそれ・・・！」

大沢が笑い出した。

お互の体を離して落ち着いて見合つと、大沢は開いたパーカーと
めくれたTシャツを着ているだけで、浅井はストッキングとショーツを片足の途中に引っ掛けていた。

「あなただつて笑えないわよ！」

浅井が笑つて大沢にブルゾンとトランクスを渡した。

トリいそぎ大沢はトランクスを穿いて、Tシャツを下ろし、パー
カーを羽織りなおした。

そして浅井を見上げると、着崩れもせずにすっきりと立っている。
やはり大沢は少し腹が立つた。

俺をこんな格好にさせて、自分は全然変わっていない。
おまけに、可愛いとか言われて。

大沢も立ち上がった。

「ゴーヒー入れる？」

そう訊いた浅井を大沢が後ろから抱いた。

「いらない」

そう言って首に唇をつけた。

「髪、染めたんだね」

「そう、チョコの色」

「花の匂いがする。香水？」

「あれ？まだ残ってる？つけたの夕方なのに」

「この匂い・・・」

あの夜、外に匂つてきたものと同じだ。

「バラの香水」

「バラなんだ」

「ジョイツて名前」

「・・・洗剤？」

「そういうこと言わない！」

笑う浅井の首に唇をつけたまま、上着に手を滑り込ませて素肌を抱いた。

スカートの下から手を入れると、あーと浅井が座り込んだ。

「何？ 浅井さん？」

大沢がしゃがんで訊くと、

「さつき下全部脱いじゃったから・・・」
と答えられて呆れた。

「知ってるよ。てか俺なんかさつき全部脱がされたんだよ？」
そして大沢はため息をついて、座り込んだ浅井を抱き上げ、

「寝室どっち？」

と訊き、指さした方に浅井を運んだ。

ベッドの上に浅井を置いて、改めて服を脱がしにかかった。
自分で脱ぐという浅井を押さえつけて、無理やり脱がせた。
そして、宣言した。

「この後、俺に触らないでよ。分かってると恩うけだ

浅井はわざかに絶句してから、反論した。

「そんなの、おかしいわよ！ だつて先にそういうことしてきたのは
大沢君でしょ！」

「だつてさつき、俺を可愛いって言った。俺は、可愛いくないよ」

「え？ なにそれ？」

浅井が反論する前に、大沢はもう始めていた。

一人は、二つの夜の二つの昼をほとんどそのベッドの上で過ごした。

ジョイは先輩だけの香りじゃなくなつた。

日曜の夜遅く、大沢は自分の部屋に戻った。そのマフラー、クリスマスに間に合わないよね、と言い残して。そして部屋に戻つてから携帯の電源を切つていたことを思い出したが、まだ浅井との時間の余韻を消したくなくてそのまま放つておいた。

翌朝浅井は久々に出勤した。

ちょうど一週間の病欠。後ろめたい気持ちは全くなかつた。ただ困つたのは、誰一人として浅井を一目で認めてくれなかつたことだ。そして必ず驚きの大声を上げること。

驚かなかつた人間が一人だけいた。
栗尾だ。

もちろん探偵から報告が入つていたから浅井の変身はとっくに知つていた。

大沢が浅井の部屋に泊まつたことも知つていた。
朝礼の後に浅井が部長に声をかけ会議室に一人で入つていつたが、それもどんな話かの予想はついている。

大沢と別れなければ退社に追い込むと部長に脅させたのが、栗尾だからだ。

事務員との不倫を社長の耳に入れないこととの交換条件。部長は二つ返事で呑んだ。

それなのに昨日まで大沢と一緒に一晩いたのなら、部長への返事

は一つだろう。

栗尾は、鼻で笑つた。

困つたおばさんね。

大沢も出社して、田村とばったり会つたので挨拶すると、首を傾げて無視された。

不可解に思つたが朝は準備に忙しいのでそのまま放つておいた。そしていざトラックで出かけようと運転席に乗り込もうとした時に、田村の大声が聞こえた。

「大沢！お前、昨日までどこ行つてたんだ！携帯も切つて！」

大沢はあっけにとられてしばらく動作を止めてから、答えた。

「お前に教える必要ねえだろ」

「ふざけんなよお前！いいかげんにしろ！」

被せるように田村が怒鳴つた。

大沢には田村のその態度がやはり不可解で、何かあつたなというわずかな不安も覚えた。

「何怒つてんだよ？」

大沢はトラックを降りて、田村に相対した。

田村は大きくため息をついて、怒つた表情のまま、言つた。

「もうみんな知つてんだぞ。あんまりだろ？」

「みんなつて何が？あんまりつて何だよ？はつきり言えよ」

「なんこと言わせんなよ！みつともねえ！」

「言わねえとわからんねえだろ！何だよ一体！」

「どうせ浅井さんのところに行つてたんだらつてことだよ。」

大沢は口を噤んだ。

「ほりみろー、そななんだろー、少しは栗尾の気持ち考えろよー。」

「あ?」

大沢が目を見開いた。

「あじやねえよー、最低だなお前ー、栗尾の腹に子供がいるんだろ?ー。」

「ああつ?ーーーー。」

ホテルですっぽかされ、探偵に探らせれば大沢は浅井の部屋の前で何時間も座り込んでいたという。

栗尾のプライドは大きく傷ついた。

何日も同じ状態だったと言う。

傷ついたプライドが深く抉れた。

そして、とうとう浅井の部屋に大沢が入っていったと言つ。

抉れた傷に、狂氣が沁みていった。

ホテルですっぽかされたなんて、嘘。

嘘。

だつて私今まで、クリスマス一人だったことなんかないのよ？

狙つた男を一度も外したことなんかないのよ？

だいたい、今までこんなに準備したこともないんだから。

食事もお酒もホテルも。

食事もお酒もホテルも、行つたわ。

全部予定通りだったわ。

全部予定通りだった。

予定通りだった。

でもクリスマスは、決めてない。

どうして？

だつて、ちょっと困つたことが発覚したのよね。

今月、遅れてるの。

どうしてって、大沢君に訊いて。

そういうことなの！

どうしよう。パパとママに何て言おう。
でも多分祝福してくれると思うの。
だって私が幸せなんだもの。

祝福してくれないなら、駆け落ちするわ。
お腹の子と三人で幸せに暮らすの。

それなのにあの人は、こういう体の私を避けて、他の女の元に行
つてる。

今が一番大事な時期なのに、こんな思いをさせられるなんて。
でも大沢君が悪いんじゃない。

悪いのは、あのおばさん。

「土曜日の飲み会にお前來なかつただろ？栗尾から全部聞いたよ。だからそこにいたやつ全員知つてんだぞ。お前最低だ。栗尾の妊娠知つてから栗尾さんのところに入り浸つてるんだつてな？なあ？他の女のところに逃げたつて腹はでかくなるだろうよ…」

「待て！！！んなわけねえだろつ！！俺栗尾となんかやつてねえよつ！ガキなんかできるわけねえだろつ…！」

「まだ逃げんのかお前！」

「逃げるつて何だ！何でお前栗尾の話を信用してんだよ？！俺ずっと栗尾さんのところに行つてたんだ！いつ妊娠するんだよ？！」

「あつ・・・それは、その前なんだろ？」

「前つていつだよ？妊娠つて何ヶ月だよ？！俺がいつ栗尾とやつたつてんだよ？！」

「ああ・・・・・、あれ？」

「あれじやねえよつ！何だよその話は…」

「・・・栗尾が・・・・」

大沢の背中がぞくりとした。

「え？まじであれ、栗尾の嘘？いや、嘘言つてる顔じやなかつたぞ？てか泣いてたし、俺だつてつきりお前が・・・」

大沢がトランクの鍵を田村に渡した。

「悪い。代わりに現場運転していつて。俺あとでバンで合流するから

「何？お前、」

「本社行く！」

大沢がキー ボックスからバンのキーを外して走り去つた。

田村はしばらくそこに立ち尽くして、今の会話を反復していた。
そして、何を信じたらいいのかわからなくなっていた。
自分自身が一番信じられないと思っていた。

大沢もバンを運転しながら、田村の話を反復していた。
繰り返すたびに恐怖が募つた。

田村でさえ信じてしまう栗尾の話を、「そこにいたやつ全員」が
信じたとしたら、今浅井さんはその全員に囲まれている。
そして当の栗尾がそこにはいる。
それが一番、怖い。

栗尾は狂っている。

浅井さんはそれに勝てない。

浅井さんは、強くはない。自分はそれを知ったばかりだ。いつで
もぎりぎりで一人で立っている。
もう傷つけたくない。
間に合つだらうか。
守れるだらうか。

大沢はアクセルをベタ踏みした。

会議室で部長に退社の意思を伝えると、部長が慌てた。

「いや、私はそんなことを言つたんじゃなくて、その、じゃ大沢君とは別れないということかね？会社辞めても？」

「いえ、それとは関係ありません」

「じゃあ何だね？大沢君とは別れるんだらう？」

「それも部長には関わりのないことかと思いますが」

「そうではないだらう！それが退社理由ならわう！」とじゃないのかね！」

「退社理由は、一身上の都合です。長い間お世話になりました」

「一身上・・・」

「失礼します」

浅井が一礼して、ドアを開けた。

事務所を見渡すと、全員が浅井に注目していた。そして全員が一瞬で目を逸らした。

栗尾以外。

浅井は特に気にせずに自分の席に戻り、一週間欠勤した分の仕事を取り戻そうとマウスに手を置いた。

すると、向かいの席の栗尾が立ち上がった。

「浅井さん」

浅井は顔を上げずに、はい、と返事をした。

「会社、辞めるんですかあ？」

不自然なほど、栗尾はゆっくりはつせりと発音した。

浅井が顔を上げた。

そして見下ろす栗尾の顔をじっと見た。

たつた今部長に告げたばかりの、部長しか聞いていないはずの自分の決意を、知つてこる。

社長の縁続きの娘さんが大沢君とお付き合いを始めたいとおつしやつてね、と部長は言つていた。

社長と縁続きという話が本当かどうかはわからないが、大沢と別れるように部長に言わせたのは栗尾だと、浅井はさつきの一言で気付いた。

しかしそんな脅迫めいた手を使ひひとがむしろ子供っぽく思え、呆れた。

「ああ。あなたなの。部長を利用するなんて、どうかしら？」

浅井は首を傾げて顔を顰めた。

栗尾は笑つている。

「浅井さん、辞めるんですね？」

栗尾が笑いながら繰り返した。また、ゆつくじはつきり。事務所内は水をうつたようにしんと静まり返つてこる。そこに電話が鳴つた。

「あなたに関係ないでしょ？」

浅井が返して、電話を取つた。

電話で決まり文句の挨拶をしながら、関係ないことはないか、と思つて直した。

同じ業務なのだから引継ぎをしないといけない。まあ、後によう、と電話に応対した。事務所内のざわつきも戻つた。

そこで、事務所の扉がガンと音を立てて開いた。

大沢が現れた。

大沢の出現で事務所内のざわつきが一段高くなつたが、浅井は電話に出ていたので気付かなかつた。

電話を終えようとした時に悲鳴が混じつたので、顔を上げた。ジャツジャツという、砂利を踏むような音が耳についた。右を向くと、栗尾が近づいてきていた。

浅井さん！と、聞きなれた大声がした。

その声に顔を向けようとした時に、

肩に、焼けるような痛みが走つた。

直後に大きく重いものが被さつてきた。

その大きいものからは、慣れた匂いがした。

そしてそれは、徐々に浅井の体からずり落ちていった。

その大きい体の脇腹には、カッターナイフの刃が、全部埋まつていた。

事務員たちの悲鳴が部屋の中で反響する。

営業マンたちは声も出せず、動けもしなかつた。

やつと一人だけ、救急車を呼ばなければと気付き受話器を外したもの、番号が浮かばない。

事務員たちも、救急車！救急車！と言い出した。

119！119！

そうか、そうか、と営業マンは、震える指を渾身の力で押さえ込み、1を押した。

悲鳴が途切れない中、最も大声を張り上げているのは栗尾だ。事務員たちに押さえられながらも大声を上げ続けている。

どうしてこんな女庇うのよ！

全部この女のせいじゃないの！

だまされてるのよ大沢君！

起きてよ！聞いてるの！

浅井の耳は、何も聞いていない。

目の前に倒れている大沢の姿に時を止められた。

大沢は椅子に座る浅井の下に体を丸めている。

じきに、脇腹から流れる血が、床に黒い染みを広げていった。

浅井は椅子から下りてそのまま膝をつき、大沢の側に両手をついた。

もう、いや

浅井は首を振った。

もういやなのに

浅井もゆっくり、大沢の上に被さった。

「救、救急車、刺されて、男が腹、刺されてて、はい、一人、一人です、警察？まだで、・・・あつ！・・・もう一人！もう一人倒れた！救急車追加！」

また白い天井。
ベージュのカーテン。
あの時の夢だらうか。

浅井が病室で田を開けた。

メガネをかけていないので、ぼやけた色しか見えない。
しかし悪夢で何度もなく見ている色と同じだ。

体を起こして周りを見回し、手を伸ばしてメガネを探した。
ザツという音がしてからじばらくして、手にメガネが渡された。
ありがとうございます、と言つてメガネをかけ顔を上げると、ス
ーツを着た男女が立つていた。

「県警の佐藤と鈴木です。お話伺つてよろしい？」

女性が訊いてきた。

あの時の夢じゃないようだ。あの時は男性警官一人だつた。
しかし訊かれることはあまり違わない。

名前、年齢、住所、職業。ばかみたいな質問だ。

「それで、何があつたかあなたの口から聞かせてくれる？」
言葉が馴れ馴れしく高圧的だ。

以前の男性警官は、明らかに小娘の自分に対して始終敬語だつた。
女性の方が怖いのだな、と浅井はぼんやり感じている。

「聞こえます？何があつたか、覚えてますよね？」

何があつた？

一瞬紗が掛けたような事務所の様子が頭に浮かんだ。

砂利を踏む音

被さつてきた重いもの
床に広がる黒い染み

「・・・・・大沢君・・・・・」

「そうそう、そのことね」

「大沢君は、容態はどうなんですか？」

「手術も終わつて、命に別状はないそうよ。よかつたわね」

はあ・・と浅井は心臓を押さえた。

「そのことを訊きたいのよ？」

突つかかるような物言いをする女性警官を、男性警官が名前を呼んで諫めた。

女性警官はため息をついて、また訊いた。

「何があつたのか、教えてください」

しかし浅井は、ほとんど何も見ていない。

気付けば自分の肩を裂かれて、脇にカッターナイフを刺された大沢がいた。

それだけなのだ。

「あなたの肩を切りつけたのは誰？」

「わかりません」

「では、大沢さんを刺したのは誰？」

「わかりません」

女性警官はまたため息をついた。

「目撃者も多数いますし、容疑者も逮捕されますのでお教えしますが、栗尾萌23才があなた及び大沢聰を突然カッターナイフで切りつけたんです」

男性警官が言つた。

確かに、あの時横に栗尾が立っていた。

向かいの席に座つているはずなのに、とあの時一瞬思つた。

栗尾さんが、逮捕・・・。

砂利の音は、カッターの刃を出し入れする音だ。

「動機はわかります？」

また女性警官が訊いてきた。

浅井は首を振った。

「切られる覚えはないといふこと?」

え?と浅井が顔を向けた。

佐藤!とまた男性警官が女性警官を諫めた。

「知らない可能性だつてあるだろ!お前の感情は抑えろつていつの
がわからんか!」

男性警官は小声で言つたが、全部聞こえていた。

しかし、浅井は男性警官の後ろの、カーテンの隙間に、目を奪わ
れていた。

世界が真つ暗になつた気がした。

グレーのスーツを着た、母が立つていた。

浅井の視線に気付き、一人の警官は広げた手帳をバッグに仕舞つて、

「またお話伺いにくるかもしませんのでよろしく」

と言つてカーテンを開け、そこにいた浅井の母に会釈をした。すると母は深々と頭を下げて、言つた。

「この度は娘のみつともない不始末にお手を煩わせてしまって本当に申し訳ありません」

そして振り返り、カーテンを閉めて、浅井に言つた。

「あなたは何年経つても結局こんな見苦しい真似ばっかりしてうちには恥をかかせるんだね」

鼓動が激しくなり
呼吸が早くなり
体が震えてきた。

妊娠している娘さんの彼氏を寝取つたつて?
さぞかし簡単だったでしょうよ
刺されて当たり前だわ
恥ずかしいと思わないの?
こんなことで呼び出されて、いい迷惑だわ

わからない

わからない

助けて

誰か

先輩

浅井はベッドの上で膝を立て、体を丸めて耳を塞いでいた。

だけどその甲高い大声は、聞こえた。

「誰だよ、そんな鬼のよつなこと浅井さんに言つてんのはー。」

カーテンを開けて、オレンジのブルゾンを着た君島が立っていた。

顔を上げると君島が走り寄ってきた。

「浅井さん、怪我したんだね。大丈夫？もつ痛くない？」

君島の顔を見て、すうっと気が緩んだ。
初めて自分の怪我を気遣つてもらつた。
涙が出そうになつた。

「そのくらいの怪我、当たり前だわ。自分のやつたこと考えなさい」「何言つてるの？誰この人？怪我人の枕元でそんなことばっかり言うつて異常だよ！悪化するから出て行つて！」

「私はこの恥ずかしい娘の親ですよ！あなたこそ誰なのよ！」

「恥ずかしいって何？親のくせにそんなこと言つの？そんなの絶対親じやないよ！」

「親だからこそ言つのよ！あなたは鈴の何？お友達？お友達ならどうして止めなかつたの？人様の彼氏を盗むような真似！」

「人様の彼氏？」

君島が浅井を振り向いた。

「あの、彼？」

浅井は反応できなかつた。君島には別れたと告げたままだつた。

「何にしても、こんなところで一人で暮らしてたつてまともな生活してないつてことだわ。うちに帰つてきなさい」

母の言葉に浅井は俯いた。代わりに君島が応えた。

「あの彼が人様の彼だとしたら、悪いのは彼だよ。なんでそれで浅井さんがまともな暮らししてないなんてことになるのさ？」

「お相手のお嬢さんが妊娠してるので。会社の同僚だつていうのこの子がそれを知らないはずないでしょう！」

「妊娠？」

君島がまた浅井を振り向いた。

浅井は俯いたまま、首を振った。

君島は首を傾げて、また母親を見て続けた。

「浅井さん知らなかつたようだし、お嬢さんが妊娠してるならやつぱりそれを隠してた彼が悪い。浅井さんには全然責任ない」

「知らなかつたなんて嘘です。みなさん知つてたんですよ。会社の人みんな知つてたことを、なぜ鈴だけ知らないなんてことがあるの？」

君島が首を傾げたまま、言った。

「浅井さんが知らなかつたって言つてゐるのに、どうして親のあなたが信用しないの？他のみんなの方が信用できるの？」

「あら！あなたは信用するの！」この子一人が知らなかつたなんてばかげたこと…」

「するよ」

君島は、手で浅井の腕に触れた。

「もしそれが本当だつたら、今一番傷ついてるのが浅井さんじゃないか

浅井は思わず君島の顔を見た。

「わけもわからぬいで、そのお嬢さんに刺されたつてことだよね？怖かつたね」

今度こそ、涙が溢れた。
それを母が鼻で笑つた。

「甘つたれるんじやないわ。一番傷ついてるですつて？お腹に子供のいるお嬢さんが一番氣の毒に決まつてるじゃないの！」

「あのねえ！氣の毒なら人刺しても許すの？刺されたのはあなたの娘だよ？どうかしてるよ…」

「どうかしてのよつて・・・どうこうのあかた? 女の子でしょ
! まつたくどういう友達なの」

「女じゃない! そつちこそ失礼だろ!」

「なんですか? ・・男なの? まあ・・・! 呆れたわ鈴!」

「呆れてるのはこっちだ!」

浅井がまた俯いた時、ザアーツとカーテンが開けられ、
「病室で騒ぐなら出て行つて外で騒いでくださいね~つ! ! !」
と大柄な女性看護士が大声を張り上げ、一人を引っ張り廊下に追
い出した。

静かな病室に一人、残された。
浅井はただ呆然としている。

何か考えなければ、と思つても、何から考えればいいのかがわからない。

何があつたのか、それがどういう意味なのか、誰に訊けばわかるのか、誰を信じればいいのか
何もかもわからない

せめて自分が今何を感じているのか・・・
自分の姿を始めて見下ろした。

肩を裂かれたせいで肩と腕に包帯が巻かれて、病院の患者服を着ている。

やつと流れた涙に気付いて拭いた。

自分が今何を望んでいるのか、浅井は天井を見上げた。
何を望む・・・。

逃げたい。
ここは怖いから逃げたい。
私は逃げてばかり。
逃げたい。
怖い。

浅井はベッドを降りた。
自分の靴が壁際に置いてある。

それを履いて、病室の扉を開いた。

その扉の横に、バーテンが立っていた。

「あ、君島連れて帰ります。お大事に」
バーテンがおじぎをして立ち去る。するので、
「待つて！」
と浅井はバーテンの腕を取つて廊下を走り出した。
「なんですか！…どこに行くんです！」

「屋上！」

「はあ？ ここ一階ですよ！ 屋上ってなんですか！」

「ここから逃げる！ 誰もいないところに行く！」
「それなら！」

バーテンが浅井の腕をつかみなおして急停止し、言った。
「こっちの先が、入院病棟です。そこの渡り廊下はほとんど人が通
りません」

そしてその腕を離してバーテンが歩き出したので、浅井はやはり
バーテンの腕を取つて走り出した。

「なんで走るんですか！」
「逃げるって言つてるでしょ！」
「何からですか」
浅井は返事をしなかつた。

走つて走つて、渡り廊下に着いた時には息が切れていった。
そして病室から離れたせいか、運動して気が晴れたのか、少しす
つきりしていた。

これなら頭もすつきりしてゐるかしら。
バーテン君に上手く説明できるかしら。

まだ口を開けて息をしながら、バーテンを見上げると、バーテン

はさほど息を上げてはいなかつた。

浅井が落ち着くのを待つてゐるのか、場所が珍しいのか、あちこちに視線を飛ばしてゐる。

「バー・テン君」

浅井が声を掛けると、バー・テンが浅井を見下ろした。

「あなたに、猫の時みたいな、簡潔な答えを、出して欲しいの」

「は？」

あ、だめだ。我全然すつきり落ち着いてなんかいない・・・。

「えつとね、説明するから、教えて欲しいの」

「何を？」

「何でもいいの。あなたの答え」

バー・テンの答え。

「猫のことを、俺が不愉快だつたからやつただけで、猫のためじやないです、と答えたバー・テン。

きっと私の問題も簡潔に本質を掴んでくれる、浅井はそう思つた。

「まず、私今日会社で同僚に刺されて、」

「ああ、さつき病室の外でだいたい聞きました。君島の声がでかかつたんで」

「そう・・・？」

「で、それが？」

「・・・わかんない」

「え？」

やはりだめだ。説明以前だ。なにもかもわからない。わからないことしかわからない。

浅井はまた俯いた。

「あの・・・」

バーテンが呟いた。

「さつき聞いた限りでは、妊娠してお嬢様の男をあなたが盗つたということでしたけど」

「そう・・・みたいなの・・・」

浅井が一度頷いた。

「みたいっていうのは？」

「わかんないのよ」

「わかんない。これだけの話だと要素は三つですよね？お嬢様が妊娠している、その父親がいる、その父親をあなたが盗つた。まずお嬢様が妊娠しているのは確かですか？」

「わからない・・・けど、みんながそう言つているみたいだから・・・」

「それは証拠にならないでしょ。第三者の確認がなければ」

「警察もそんな感じだった」

「警察で検査でもしたんですか？」

「そうは言つてなかつた」

「じゃ、その話はまだグレーです。次にその父親は、あなたと一緒に刺された男と言つことですか？」

「わからない」

「それもグレーだと、最後のあなたがその父親を盗つたという事はその一つの前提の上に成り立つものだから、この話は全部不確かで信用できるものではないです」

・・・・・

「たとえ全部本当の事だとしても、どうしてあなたが刺されるんです？」

「え？」

「そういう事実があつたら、あなたはその父親と、どうしますか？」

「別れる」

「でしょう。だとしたら話し合いで済むことです。どうして凶器が持ち出されたんですかね？」

・・・・・

「そのお嬢様に話訊かなきや何にもわかんないんだと思いますけど、訊いても何にもわかんない可能性の方が高いでしょうね」

「どうこう」と？

「話のわかる相手だつたら凶器を持ち出わなこからです」

「あなたでもわからないの？」

「俺、部外者ですし」

バーテンが笑つた。

「刺された男の証言が次に重要でしょう」

大沢君

大沢君の証言

「その証言次第であなたの気持ちが変わるとこ、ついで、今のところ決着じゃないですか？」

「・・・・そう・・・・か。さすがねバーテン君」

まるで扇子がパタパタと畳まれて一本の棒になつたように、片が付いた。

大沢君の証言次第

逮捕された栗尾さん

みんなが栗尾さんに同情的なのは、私が追い詰めたと思っている

せい

それには根拠がないと、バーテン君が分析した

ただそれが、栗尾さんの妊娠が事実なら、大沢君とは別れる

そして

そこまで考へて、浅井はしゃがみこんだ。

そこで事が終わらないと気付いた。

ついでつき、母に帰つて来いと言われたではないか。

浅井にとつてそれは地獄に墮ちると言われているに等しい。

浅井はしゃがんだまま壁に寄りかかり両手で顔を覆つた。

「バーテン君」

しばらく経つてから、呟いた。

「はい」

上から返事が降ってきた。

もういなくなっているのではないかと思いながら呼んだので、やはりこの子は親切なのだなとほつとした。

「バーテン君のお母さんは、どんな人?」

訊きたくないのに訊いてしまう。

だけどこの子なら、あなたのお母さんだってあなたのことを思っているからこそ厳しいのだ、なんて非情なことは言わなはず。

そんな期待をして、訊いた。

その期待が、おかしな方向に外れた。

「俺、両親いません」

浅井はしゃがんだまま、首が痛くなるような角度でバー・テインを見上げた。

「…………いい？」

「はい」

「…………いいなあ」

浅井の言葉に、バー・テインが吹き出しだ。
「そう言われるのは初めてです」

「あ、『ごめん。やうが、『ごめんなやー』」

浅井が慌てて立ち上がり謝った。

「いや、構わないです。同情されるよつぱんじマシですかい」

胸の中でなにかがピンと弾けた気がした。

「わう、同情されるよつ」

そう。私もそんな気持ちを一一杯張つてたことがあった。

背筋が伸びるような気がした。

この子も戦つてゐるんだった。

何やつてゐんだ自分。

今、泣き言を言おうとしていた。

さつきまで愚痴めいたこと言つてないだろ？

それが一番恥ずかしいことだ。

私は、それ以外に恥ずかしいことなんか何もしていない。

地獄になんか墮ちるものか。

まだまだ戦うんだ。

私は戦える。

今までだつて戦つてきたんだから。

地獄に墮ちるくらいなら一人で戦つてやる。

さつき弾けた何かに心を熱せられた。

そして自分に戻つた。

ではさつきまで、心が凍つていたのか。

「バー・テン君は、私の神様ね」

「は？」

バー・テンが怪訝な顔を向けた。

「君島君が、私の天使なのよ」

「うわ・・・」

バー・テンが顰めた顔を背けた。

「本当よ。今日一人がここに来てくれなかつたら、私どうなつてたか・・・つて、そういうばどうしてここにいるの？」

「ああ、君島の携帯にあなたの携帯から着信があつたそつですよ」「私の携帯？」

「会社の誰かが勝手に掛けたんでしょう。あなたが病院に運ばれたから、親しい人間に伝えてくれと言われたそつです」

「ああ・・・」

携帯には会社の知り合い以外の番号は「秋ちゃん」と登録してある君島のものしかない。

「そう・・・それで、バイクで？」

「はい」

「1万円？」

「・・・2千円」

「安つ！-するい！」

「・・・あの時はあなたが勝手に値段を吊り上げたんです」

「そうだけど！君島君は交渉上手なのね」

「しつこいんです。とにかくしつこいんです。俺が根を上げただけです」

様子が目に浮かんで、浅井は笑つた。

久しぶりに笑つた。

前もそんなこと感じたことがあった。

たしかそれも、バー・テン君のことだった。

「本当にありがとうございます、バー・テン君」

「あの、俺の名前は原田だと何度か言つてますが」

「そうね。ありがとうございます、原田君」

「君島置いていきましょうか？」

「え？ あなた一人で帰るつてこと？」

「あいつまだあの怖いお母さんを引き止めてるんじゃないですか？」

「あ・・・。まだやつてるのかしら？」

「いや、俺が見た時は受付の前で背中合わせに座つて緊迫してましたけど」

「そう。・・・す」かつたな君島君

「お騒がせしました」

「つうん。私もあんな風に言えたらいいんだけど」

「言えないですか」

「難しい」

「君島の言葉真似したらどうです？」

「真似？」

「そんなの親じやないよつーとか言つてましたよね」

原田が君島の真似をしたので、大笑いした。

「そうね。まずそれね。ありがとうございます。頑張るわ

「大変ですね。親がいるのも」

「そうでしょ」

またね、と原田に手を振つた。
まずは大沢君に会おう。
浅井はまた走り出した。

走つて自分のいた病室に戻ろうとして、初めて自分がERにいたのだということを知つた。

その受付の前にまだ母と君島が座つてているのが見えた。浅井は腰を屈めて受付に滑り込み、ナースか事務か分からぬ人に声を掛けた。

自分のことは分からぬだらうと思つて名乗るうとしたが、

「あ！あら、意識戻られたんですね？」

と大きな声で言われたので、しいく、と口に人差し指を立てた。

そして、自分のことを知つているのなら話は早いと、

「一緒に運ばれてきた大沢君は今どこにいますか？」

と、早口で訊いた。そしてすぐに返事をもらえた。

「え、ええ、手術も終わりましたから、病棟の方に移動になりましたよ。2号棟の5階の5012号室ですね」

書類を見ながら答えていたナースか事務かわからぬ人にありがとつと言つて、浅井はまた走り出した。

どうして病院つてこんなに複雑に入り組んでいるのだろうと思ひながら、時々掲示してある見取り図で確認しながら、目指す病室の階に辿りついた。

もう走るのは止めて、部屋番号を数えながら、そこに着いた。

その前で、ふう、と一つ息を吐いた。

その時後ろから声がした。

「あら・・・もしかして、浅井さん？」

振り向くと、アイボリーのアンサンブルセーターを着た小柄な女性が浅井を見上げていた。

浅井は、はい、と頷いた。

すると女性は浅井の両手を握つて、言った。

「肩に大怪我されたつて聞いてたから・・・その包帯、大丈夫なんですか？」

大沢の母だと、一目でわかつていた。

大沢君の端正な童顔は母譲りだつたのだな、と浅井は思った。

だから笑いながら答えた。

「大丈夫です。かすり傷なんです」

「ごめんなさいね！聰のせいでこんな、大怪我させてしまつて・・・

「ごめんなさいね！」

大沢の母は涙を浮かべて謝つた。

浅井は笑いながら、首を振つていた。

「大沢君のせいじゃないんです。この怪我は、」

そして、自分の言葉で自分の気持ちを知つた。

「大沢君が庇つてくれたから、こんな怪我で済んだんです。大沢君のせいじゃないんです」

それが、今現在自分のわかる全てのことだ。

栗尾さんのことなんか知らない。

自分は大沢君に命を救われた。

「大沢君に、お礼を言わなくちゃ」

浅井の目にも涙が膨らんだ。

「『めんなさいね、』『めんなさいね』

謝り続ける優しそうな母親の柔らかい手を、浅井が強く握り返した。

「大丈夫なんです。私は大丈夫なんです」

笑いながら、浅井も涙をこぼした。

「あの、どうかしましたか?」

病室の扉を開けて、田村が顔を出した。

「うん、田村君、浅井さんが来てくれてね、」

大沢の母が浅井の片手は手を握つたまま片手で口元を押さえて言った。

そして田村が浅井の顔を見て二度瞬きをした。

「浅井・・・さん?」

あ、そうか。髪切つたんだつた。と、浅井は涙を拭いて頷いた。田村がまだ絶句していると、病室の中から、入つてもらえ、と低い声が聞こえた。

「そうね、こんなところで失礼しちゃつたわね、どうぞ」と大沢の母も浅井の背を押した。

個室の窓に背をもたれて田村設備の社長が立つていた。

田村の父であり、大沢の雇い主で、浅井の会社の下請け会社の社長。

「おお。浅井さんか?ずいぶんイメチェンしたんだな」

田村社長も驚いた顔をした。

「大沢、手術終わつて後は起きるの待ち」

田村社長はベッドを顎を上げて指した。

「動脈は切つてなかつたからよかつたけど、結構深くまで刺されるんだつてよ。助かつてよかつたよ」

浅井は大沢の足元の傍に立つていた。

「浅井さんも切られたんだつてな?その包帯か。大丈夫なのか?」

浅井が頷いた。

「ごめんなさい、とまた大沢の母が呟いた。それを聞いて、田村が言つた。

「だから違いますつて！俺今朝大沢に聞いたんですよ！栗尾を妊娠させたのは大沢じやないですよ！」

「ん？」と浅井は振り向いた。

「浅井さんは栗尾の嘘なんか信用してないでしょ！ありえないって大沢が言つてたんだよ！」

大沢の母が首を振つた。

「聰が悪いの」

「だから！」

田村の言葉なんか聞こえないように、大沢の母は涙を浮かべて続けていた。

「女の子に刃物持たせるようなこと、そんなことをせただけで、聰が悪いのよ」

浅井の頭に、先輩の声が聞こえた。

逃げるな

「もし、栗尾さんが妊娠してたとして、」

浅井が呟いた。

「違うって、浅井さん！」

田村が遮るのを、首を振つて抑えた。

「もしね、栗尾さんが言つてるように大沢君の子供がお腹にいるとして、それでどうして私たちが刺されなきやならないの？」

それも聞こえないように、大沢の母が続ける。

「うちの聰がお嬢さんも浅井さんも傷つけたんだもの・・・。どんなに謝つても・・・」

逃げるな

自分に逃げるな

「大沢君は悪くないです」

わかつた。先輩。やつとわかつた。

「もし大沢君の子供を妊娠してるんだとしたら、大沢君を刺した栗尾さんが悪い」

「それ・・・でも、」

「だって、お腹の子のお父さんでしょ？」

「・・・！」

大沢の母が絶句した。

「大沢君が悪いんじゃない。刺されたんだから、刺した栗尾さんが悪いの」

「それでもこの子が、あなたのことも騙して、」

浅井が首を振った。

「そうだとしても、刺した栗尾さんが悪いんですね」

「この子は・・・」

自分が悪いのだと、自分の息子が悪いのだと、責めを内に向ければ誰からも攻撃されない。

自責の壁は、弱者の要塞だ。

最強の要塞だ。

しかしそれはそのまま、潰れる。
そこからは抜け出せない。

だから、そつちに逃げないで。
自分を責めないで。
自分に逃げないで。

「大沢君は、何も悪くないです」

そういうことだったんだね、先輩。

「どんな事情があつたって、刺したのは栗尾さんです。大沢君じゃないんです」

「うん、まあ、そうだな。正しいんだけどな、浅井さん」

田村社長が、言った。

「浅井さんはいつでも冷静だな。こんな時でもそんなに頑張るか」

浅井が首を傾げた。

「あんただつて刺されてんだから、少しいう、痛い痛い！って泣いてもいいんだぞ」

「今はそんなに、泣くほど痛くはないので」

「そうじゃなくて」

田村社長が笑つた。

「あんたはずつと頑張つて来てるんだから、こんな時ぐらいい泣き喚いたらどうだ？」

「泣き喚く？」

浅井が顔を顰めた。

「聞いた話じや、大沢がそつちの若い事務員とあんたを一股掛けてたつてことなんだろ？で、向こうが妊娠したと。今寝てるけど、大沢の顔面殴つてみたらどうだ？」

浅井が吹き出した。

「そうね、それで気が済むつてこともないでしちゃけど、よかつたら殴つて？」

大沢の母まで勧める。

「いや、違うつて！栗尾と大沢は付き合つてないつて！」

田村が両手を振つて話を訂正する。

「でも私、大沢君とは昨日今日の付き合いなので、その前に栗尾さんとそういうことになつてたとしても不思議じやないんですよ」

浅井が笑つたまま伝えた。

小さく

「・・・・ひでえ・・・・」

と声がした。

全員が、ベッドに注目した。

「聰！！」

「大沢！いつから起きてたんだつ！」

「え？ 大沢君？」

「おい！ 寝たふりか！」

一斉に大声を出した。

「あんたはもう・・・・どんなにびっくりしたと思つてんの！」

また大沢の母が泣きながら、寝ている大沢の胸あたりを叩いた。

「いてえよ・・・・！俺怪我人だよ？」

「何いばつてるのよ！自分が悪いんでしょ！」

「俺悪くない・・・！全然悪くないって・・・！」

大沢は本当に痛いので、声に力を込められない。

「てか浅井さん・・・昨日今日の付き合いはないでしょ・・・」

「・・・だつて栗尾さんが妊娠してるとしたら何ヶ月も前のことつてことじゃない。その頃のことは知らないし・・・」

「何ヶ月前だつて栗尾と付き合つたことなんかないって」

「じゃなんで刺された?」

田村社長が訊いた。

「・・・俺が聞きたい・・・」

「じゃあ誰に何を訊かれても大丈夫だな」

「はい?」

田村社長がドアを開けて入つてきた相手を睨みながらいった。
「お前はただの被害者なんだ。そう言ってやれ」

入つてきたのは、浅井の会社の社長。田村社長の元請け会社の社長だ。

長身で痩せている田村社長とは対照的に、恰幅のいい体をダークスーツに納めている佐々木社長。厳しい目付きだけが似ている二人の社長。

浅井は無意識に、包帯を巻かれている腕に手を当てた。
自分もただの被害者ではあるけれど、加害者の栗尾がこの人の姪らしい。

大沢と自分が違つのは、自分はこの社長に雇われている社員だと
いうこと。

体の傷ではなく、姪の履歴と名前を傷つけることになつたのは、
自分の存在に間違いない。

雇用主として社員の私を罰する権利はこの人にあるのではないだらうか。

やはり、大変なことだ。

浅井は目を閉じた。

自分たちは悪くないと、言い続けられるだらうか。

そして佐々木社長の声がした。

「田村、大沢君の具合は……？」

呼び捨て？ 浅井は驚いて佐々木社長を見た。

「昏睡状態。今晚が山」

田村社長の嘘に大沢が慌てて声を上げた。

「大丈夫です！ 手術終わって、麻酔も切れたところで、痛いですけど無事です！」

その声に佐々木社長も慌ててカーテンを開けて大沢を見下ろした。
「良かつた……。本当に良かつた。田村、ふざけるなよこんなことで！」

田村社長は、しれっと答えた。

「俺だつてさつきまでそつなるんじやないかつて不安だつたんだ。
お前の姪がやつたことだろ。お前に責任があるんだ」

お前……！

この二人の関係つて……？

浅井は二人の顔を交互に見ていた。

「ああ、うん。 そうなんだ。 とんでもないことだよ。 本当に申し訳なかつた、大沢君。 あそこまでバカな娘だとは思つていなかつた。 まさかこんな事件まで起こすとは・・・。 うちの浅井さんも被害にあつたらしくてそつちにも顔出さないとならないんだが、」

浅井はじつと佐々木社長を見ていた。

「じゃあ謝つたらどうだ? そこにいる」

田村社長が浅井を指差した。

「え・・・?」

「・・・はい」

浅井が返事をした。

「あ・・・? 浅井さんか? ああ、気付かなかつた! なんだ、見違えたな!」

「あ、はい、そう、でしょ? うか?」

「それは、その肩の包帯が、怪我か? 縫つたりしたのか?」

「あ、そういうえば知りません。 気付いたら包帯が巻かれてたので・・・」

「 そうか、申し訳なかつた。 あれは、栗尾は私の姪で、言いがかりで二人を刺したそただけど、全く、」

「言いがかり?」

何人かが声を合わせた。

「・・・ そなんだろ? 言うのも恥ずかしいが、大沢君の子供を妊娠してるんだとか勝手な作り話を自分で妄想して刃物振り回して聞いたが」

「作り話?」

浅井と大沢の母が声を合わせた。

「ええ。私の妹が、栗尾の母ですが、今警察に行つてまして、事情を全部聞きだしまして、・・・まあ何と言いますか子供っぽい娘ですから、大沢君どころかまだ男性と付き合つたことすらないのに妊娠なんかできるはずもないですから、」

「え？」

大沢と浅井が声を合わせた。

「・・・えって何だ？・・・それが作り話か・・・？」

佐々木社長が顔を顰めた。

浅井は首を振つて俯いた。

子供の本当の姿を知らない親つて、少なくないかも知れない。私自身ずっと親には何もかも隠して生きてきたんだけど、私程じやないとしても案外みんなそうかも。

浅井はふとそう感じた。

「とりあえず姪のことは警察で炎をすえてもうつて、浅井さんのご実家に連絡させて、大沢君のところにも連絡させて、私も急遽戻つてきたところで、」

佐々木社長が花束を出した。

「急いでたから出来合いの花束一つ買って来たんだけど、どうもお見舞い用じゃないようだ・・・」

「ユリやバラなどの芳香の強い花は普通お見舞いには向かない。

「菊よりはマジだろ」

田村社長が笑つた。

「お前のジョークはブラックすぎやん」

佐々木社長が苦笑した。

「それから、唐木部長に聞いたが、浅井さん会社辞めたいそうだが
浅井が佐々木社長を見上げた。

「え？ 辞める？」

大沢と田村社長が声を合わせた。

「それももしさ、姪が関わっているのかね？ そならもうこれ以上
姪を会社に置いておくつもりはないから戻つてももらえないかね？」

「いえ、その、」

理由はそれだけではないのだけれど

「浅井さんが事務所にいないとなると、無理だぞお前の会社。そつ
いやその部長？ 唐木？ 僕のところに電話があつて、オオサワのよつ
な社員を雇つてゐるような会社には今後仕事は出しませんっ！ とか言
つてたぞ」

田村社長の言葉に、え・・・・！ と浅井が口を押さえた。

「いや、その、ありえないんだ。浅井さん。唐木君も・・・。眞面
目なんだが小心者で・・・」

顔を顰めた佐々木社長に田村社長がすぐさま反論した。

「小心者が大沢の安否もわからないうちに俺を怒鳴りつけるか？」

「小心者だからだよ。勘弁してやれよ」

「うん。やれるもんならやつてみるよ！」のやつひつて言つておいた

「お前は子供か・・・」

「ああ、俺よりも子供の加藤もこっちにくるぞ。仕事終わり次第。
あいつ浅井さんのファンだからな。お前二三発殴られるかもよ」

田村社長が言った。

加藤・・・？

「加藤つて加藤社長ですか？」

大沢が訊いた。

「うん。元々は俺ら三人で立ち上げた会社なんだよ。で、本体を佐々木に任せて俺と加藤は外注で樂してるんだけどな。ただ腕つ節は俺と加藤の方が強いだろうな」

「だからお前のジョークはブラックだつて」

「ジョークじゃないよ。加藤は来るつて。あそここの若いのも相当なものだしな」

加藤社長と聞くだけで、浅井は少し笑ってしまう。

いつでも結局私のゴリ押しを呑んでくれて助けてくれた社長。

そうだったのか。

この会社の創業者の一人だったのか。

「浅井さん。私が加藤に殴られるので、辞職は考え直してください。佐々木社長に言われて、浅井は笑ってしまった。しかしそれが、そのまま凍つた。

ノックをしてドアを開け、浅井の母が現れた。

「娘がここに来ているそいつですが・・・？」

「いるわよ。お母さん」

浅井が体に力を入れて答えた。

「あ、浅井さんのお母さんですか」

佐々木社長が振り向いたので、浅井が紹介した。

「佐々木社長です。私が、」

そこまで言うと浅井の母が走りより、また深々と頭を下げた。

「この度は娘の不始末でとんだ迷惑を、」

それを佐々木社長が遮った。

「いや、逆です、とんでもない迷惑をおかけしたのはこちらで、娘さんに怪我をさせた上に親御さんまでわざわざ遠くからお越しにただいて本当に申し訳ないです」

「いえいえまさかうちの娘に迷惑なんて、置いていただいてるだけでもありがたいのに、」

浅井は唇を噛んだ。

「しかし実際、このようにお怪我までさせてしまいまして、これが完治するまで必ず私の方で保証しますので」

「え？ でも娘の責任でしょうか？」

「いえ、浅井さんには何の落度もないのにこんな怪我までさせてしまつたので、」

「でも、娘がその、お腹の大きいお嬢さんのお相手と、」

「ああ！ いや、それはもうお恥ずかしい限りですが、その佐々木社長が額を押された。

「全くの事実無根でして、浅井さんは全く落度のないことでこんな大怪我を負わせてしまつたんですよ」

「え・・・？」

母が浅井を振り向いたので、浅井は母を半眼で見つめた。
そして母は、ベッドで上体を起こしている大沢に目をつけた。

「お嬢さんのお相手だったことにには変わりはないでしょう、いい年
して若い人に・・・」

そんなの絶対親じやないよ！

君島の声が蘇る。

「いえ、それも違うんです。大沢君とも何の付き合いもないもなか
つたんですよ。うちの姪は」

「姪？！」

「そうなんですよ。私の姪なんですよ、今回の事件を起こしたのは・・
・。本当に申し訳ありません」

浅井の母は、言葉を失い首を振り続けていた。

それもきっと、浅井を責める材料を探して時間を稼いでいるのだ
るうと、浅井は思った。

PDF小説ネット発足にあたって

PDF小説ネット（現、タテ書き小説ネット）は2007年、ルビ対応の縦書き小説をインターネット上で配布するという目的の基、小説家になろうの子サイトとして誕生しました。ケータイ小説が流行し、最近では横書きの書籍も誕生しており、既存書籍の電子出版など一部を除きインターネット関連＝横書きという考えが定着しようとっています。そんな中、誰もが簡単にPDF形式の小説を作成、公開できるようにしたのがこのPDF小説ネットです。インターネット発の縦書き小説を思う存分、堪能してください。

この小説の詳細については以下のURLをご覧ください。
<http://ncode.syosetu.com/n1013y/>

JOY

2012年1月12日20時59分発行